

七号鎮守府譚

kokohm

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

無数にある鎮守府の一つにて、艦娘達と提督が築いていく物語。

※不定期更新

## 目次

### 一隻目 始動

提督が七号鎮守府に着任しました	1
叢雲が哨戒任務に出撃しました	8
電が新しい朝を迎えました	18
響は幾つかの答えを得ました	26
北上は当面の目標を定めました	33
木曾は初めての対空戦闘を経験しました	44
天龍は一つの納得を得ました	58
七号鎮守府が最初の難敵と相対しました・前編	76
七号鎮守府が最初の難敵と相対しました・後編	90
閑話 提督談義・一杯目	102
二隻目 足場	
加賀が鎮守府に着任していました	110
川内型姉妹はそれぞれの職務を全うしていました	122
足柄は護衛任務に就きました	133
如月が演習の実施について学びました	140
長良が演習の開始を宣言しました	149
陽炎が演習を行いました	159
睦月は提督の意外な強さを知りました	168
龍田は艦娘の事情について知りました	179
千歳と提督は、平和な一時にいたはずでした	188

## 一隻目 始動

提督が七号鎮守府に着任しました

「……………いよいよ、か」

眼前にそびえる門と、その奥に並ぶ建物を眺めながら、一人の男が感慨深げに呟いた。丹精な顔立ちと、細身だが締まった身体。その身を包む軍服と、その腰に佩いた軍刀を見れば、彼が軍人であるということは誰の目にも明らかだろう。加えて、彼の立つ場所を踏まえれば、それを疑う者などおそらくは一人としてしまい。

「さて、と……………」

七号鎮守府。堂々と門に掲げられたこの場所の名を一瞥した後、男は門をくぐって鎮守府内に足を踏み入れる。ぐるり、と改めて見渡せば、広大な敷地内に幾つかの建造物を視界に収められるが、それに反して人の気配というものは何処から感じられない。

だが、それは決して不思議なことではない。何故ならば、この七号鎮守府は数年前に一度、完全に閉鎖されているからだ。今回、男が来たことでそれも解除された形になるが、裏を返せば彼が来るまで誰も立ち入っていないということ。人の気配を感じられない、というのは当然であり、むしろそうでなければおかしい。

もともと、人の気配は、の話だが。

一瞥の後、彼が改めて正面を向き直ると、足元に小さな影が見つけた。ついと見下ろせば、そこにはデフォルメされた掌サイズの人形らしきものが立っている。今しがたまでなかったはずのそれだが、男は特に驚く風でもない。むしろ、その人形に対しゆっくりと口を開く。

「君が……この妖精だな？」

男の問いかけに、人形が動いた。自らピシリと背を伸ばし、可愛らしい敬礼を取ったそれは、一部から『妖精』あるいは『妖精さん』と呼称される存在であった。何時からか自然発生的に誕生した、摩訶不思議で不可解な種族。もし彼らが、そして彼女らが居なければ、今の国は存在していないに違いない。

「歓迎、感謝する」

妖精の敬礼に、男もまた答礼で応える。それを解いた後、妖精が男を見上げながら口を動かす。それはまったく空気を振動させるようなことはなかったのだが、男は気にしたそぶりもなく、一つ大きく頷いてみせる。

「頼む」

男の返答を聞くと、妖精はタタタとその場から駆け出した。勢いこそあるものの、如何せんサイズがサイズである。人間から見れば精々子供の小走り程度の速度であったので、男は焦ることなく徒歩でそれを追いかける。

そのまま、数分ほど歩いただろうか。妖精に連れられ、男は一つの建物の前に辿り着いた。事前にこの鎮守府の情報を得ていた男は、ここが『工廠』と呼ばれる施設だということを理解している。

そのまま妖精に続き、男は工廠内に足を踏み入れる。鉄や機械油の臭いが僅かにし、その奥にはいくつかの工作機械の姿が見られる。

だが、もつとも目立ったのは、足を踏み入れてすぐの場所に鎮座された資材の山だろう。燃料、弾薬、鋼材、そしてボーキサイト。これらに開発資材と呼ばれる特殊資材を加え、一つに纏められたこの小山こそ、今から彼がすべきことの核であった。

「大丈夫そうだな。では、始めて欲しい」

小山を軽く確認した後、男は足元の妖精に対し小さく頷いてみせる。それを受け妖精はまたピシリと敬礼をした後、身体の小ささに似合わぬ大きな拍手かshawでの音を鳴らす。

すると、何処からか現れたのだろうか。気付けば資材の小山の周りに何体もの妖精が出現していた。彼らもまた一度敬礼をした後、彼らのサイズに合った工作機械らしきものを手にして小山へと殺到する。

そして、小気味よい音を鳴らしながら、彼らは小山を均し、その中に何かを形作っていく。数分が経ち、積み重ねた資材がすっかり消えてなくなった頃、そこには一隻の軍艦の模型らしきものが鎮座していた。

「いよいよか」

男が小さく眩く中、妖精達は模型を取り囲み、合わせて一つの大きな拍手を打った。パン——と静かな工廠に大きなそれが響き渡ったと同時に、突如模型が光を発し始める。目も眩むような強い光に、男は思わず目を閉じる。

数秒、光が徐々に収まり、もう大丈夫かと男が目を開けた時、そこには模型は全く存在していなかった。代わりに在ったのは、一人の少女の姿。青い髪に、その付近に浮かぶ二つの機械。白い服を囲うようにしてその背からはアームと砲があり、その手には槍と発射官をそれぞれに持っている。

「——艦娘」

眼前に立つ少女に、男は小さくその名を眩く。突如として現れた深海棲艦と呼ばれる敵に対する為に、かつての軍艦の魂が人の姿を持って再誕した存在。乙女の姿をとりつつも、かつてのそれを模した艤装を手にとって敵を討つ、勇猛果敢なる戦士。それが艦娘と呼ばれる存在である。

その艦娘の一人、男の前に立つ彼女が静かに目を開けた。赤い瞳で彼を見上げた後、勝気そうな表情で口を開く。

「アンタが司令官？」

「そうだ」

「ふうん……まあいいわ。特型駆逐艦、五番艦の叢雲よ」

「七号鎮守府提督、防人さきもりだ」

短く名乗った後、男——防人は敬礼を取る。本来であれば敬礼というのは上位者に下位者が、あるいは同位者同士が行うものなので、彼の方から行うのは些かおかしい。それは少女——叢雲にも分かったのだろう。彼女は怪訝そうに数秒ほど彼を見上げた後、やや躊躇いげに答礼を取る。

「……よろしく頼むわね、司令官」

「ああ。長い付き合いとなる事を期待する」

しばしの間、二人はその体勢のまま見つめあう。別に、そのように

しなければならぬ理由が——少なくとも防人の側に——あったわけではない。ただ、目の前の少女を見つめていると、防人の心中に先ほどまでとはまた違った実感が生まれてきたので、ついそのまま居たいと思ってしまったからだ。

とはいえ、そのままですつと居るわけにも行かない。妙な名残惜しさを覚えつつも、防人はようやく礼を解いた。叢雲の方も、防人の反応に困惑していたのだろう。防人が礼を解くと、まるで緊張を解くかのように小さく息を吐き、その後神妙な表情で口を開く。

「それで、まず何をするの?」

「そうだな……」

叢雲の問いに、防人は顎元に手を当て、軽く考え込む素振りを見せる。とはいえ実の所、防人は既におおよそその行動予定は立てていた。だからこの素振りはどちらかと言えばポーズ、あるいは確認とでも言うべきものでしかない。数瞬ほどそれを続けた後、防人はやはり予定通りの言葉を紡ぐ。

「何にせよ、まずは頭数を揃えないと意味がない。建造から始めるぞ」「了解。まあ、初期艦のやることなんて大体それよね」

建造というのは、先ほど叢雲が生まれたように、妖精たちの協力の元、資材を消費して艦娘達を生み出すことである。どのような艦娘が生まれるかは消費した資材の量、そして運に作用される。今までのデータから、資材の量を変更することで艦種をある程度コントロールすることは出来るようになったものの、結局はその程度。建造に関わっている妖精たちですら結果には干渉出来ないとのことなのだから、彼らよりも劣る人の手では完全なコントロールなど夢のまた夢という奴だ。唯一の例外があるとすれば、大本営によって特殊加工された資材を使うことで建造される、叢雲を初めとした五種の初期艦くらいだろう。

「数は?」

「まず二隻。最低値でな」

防人の返答に頷いて、叢雲は妖精達に声をかける。すると妖精達も我が意を得たりとばかりに頷き、何処彼処に散っていく。彼らが戻つ

てきた時、その手には先ほどと同じ資源が抱えられていた。

「それじゃ、建造を開始して頂戴」

叢雲に敬礼をし、妖精達は二班に分かれて建造を開始する。最低値の言葉通り、使用する資材は建造を可能とする下限の量だ。必ずしも大量に資材を消費する事が強い艦娘を生み出すわけではないが、そういう傾向があるのは事実だ。従って今回の場合だと建造される艦娘は艦種の軽い艦、つまりは駆逐艦ないし軽巡洋艦となるだろう。

叢雲と防人が見守る中、妖精達は叢雲の時のように軍艦の模型を作成していく。ただし、あの時ほど素早くは無い。これは元々あちらの方が例外であり、一般的に艦娘を建造する時は酷く時間がかかるようになっていくからだ。駆逐艦でも数時間、戦艦ともなれば数日ほどと、艦の大きさに比例して建造までの時間がかかってしまう。これを解決する為には、高速建造剤と呼ばれる特殊な資材を使用する必要がある。これを最初から組み込んでいた叢雲のように、使用することで建造までの時間を一気に短縮する事が可能となっているのだ。

「どのくらいかかりそうだ？」

妖精たちに防人が声をかけた。するとそれぞれの班で一人ずつが振り向き、それぞれに口を動かす。

「二時間から三時間が一隻、もう一隻は半日ほどか」

「駆逐と軽巡つてとところでしょうね。高速建造剤を使う？」

「ああ。躊躇う理由もない」

そう言って、防人は妖精達に頷いて見せる。すると妖精も一つ頷いた後、何処かに駆けていく。戻ってきた時、彼らの手には高速建造剤が握られていた。傍目にはバーナーのようにも見えるそれだが、実際に使用する時もまさしくそういう見た目であった。火で炙っただけのように見えるのに、しかし火が消えた後には艦の模型が生まれているのだから不思議ではあるのだが、そもそも妖精も艦娘も常識の埒外存在である。今更驚くようなことではないのだろうか、防人は改めてそんな感想を抱く。

「さて、誰が生まれるかしらね」

叢雲が呟く中、再び拍手の音と共に光が工廠を満たした。防人が目



を開けた時、そこには二人の少女が立っていた。

「電です。よろしく願います」

「木曾だ。よろしく頼むぜ」

そう言って、特に幼い外見である少女と、右目に眼帯をつけた少女が敬礼をした。防人と叢雲も、それに対し答礼を返す。

「提督の防人だ。貴官らとも、長い付き合いとなる事を期待する」

「初期艦の叢雲よ。まあ、以後よろしく」

これで三艦。一先ずはどうかなるだろうと防人はそう判断する。妖精たちに休憩と、その後もう一度の建造を指示した後、彼は改めて三人に向き直る。

「早速で悪いが、貴官らの実力を確かめたい。叢雲を旗艦とした第一艦隊を編成、鎮守府正面海域の哨戒任務にあたってもらう」

「実力ってことだが、敵が見つからなかった時はどうなるんだ？」

「その場合も、哨戒が終了次第帰還を命じる予定だ。無理に戦闘を行う必要はない」

「それでいいのか？」

「航海中の動きだけでも能力は知れるし、場合によってはむしろそういうデータの方が貴重となる可能性も有る。少なくとも、戦うために無理に敵を探する必要はない」

防人の返答に納得がいったのか、木曾は勝気そうな笑みを浮かべながら頷く。さて、その笑みは一体どういう意味なのか。そんな疑問は浮かぶものの、その反応から察するに、少なくとも反感を覚えている風ではない。であれば、別に気にする必要もあるまい。そう判断し、防人は視線を全体へと向け直す。

「他に質問はあるか？」

「電はないのです」

「俺もない」

「私も特に」

「では最後に、私の——いや、当鎮守府の基本理念を告げる」  
「基本理念」

そうだ、と言葉を繰り返した電に頷き、防人は気持ち背筋を正しな

がら宣言する。

「当鎮守府において掲げるは、敵の撃破ではない。如何なる戦場であれど、絶対に生還することである。撃破と生還、そのどちらかしか選べぬとなれば、躊躇いなく生還を選べ。その結果、鎮守府としての目的が達せられずとも良い。目的は変えられるが、貴官らは替えが利かない。その事を心に刻み、戦場に望むように」

それが、防人の方針だ。世の中には艦娘の被害を厭わず戦果を上げる鎮守府も存在するが、防人にはそのような気は毛頭無い。生還こそが第一であり、戦果は二の次。それが、彼が提督と決まった時に始めて定めた、必ず守るべき信念。

「良いな?」

防人の確認に、三人は敬礼でもって応える。少なくとも、防人の方針に反感があるようではない。そのことに大きく頷き、改めて防人は告げる。

「——第一艦隊、出撃せよ!」

『了解!』

返答の後、叢雲たちは早速と海に向かって駆け出す。建造されたばかりの彼女らの背中は、まだまだ頼りなく見える。しかし、初の任務を果たすのだという確かな意欲は感じられた。

遠ざかっていく背を見守った後、防人も軍帽を被りなおしながら歩き出す。行き先はこの鎮守府内にある、提督用の執務室。艦娘たちとは違う、提督がすべき仕事をするために彼はカツカツと早足で歩き出す。

「私も、うかうかとはしてられないな」

歩きながら、防人が小さく呟いた。その口調こそ平淡なものであったが、しかしその口の端には、確かな微笑が浮かんでいた。

## 叢雲が哨戒任務に出撃しました

本来、船というのは海の上に浮かんでいべきものである。船は船である限り、海上をゆらりゆらりとしているのが自然だ。

では、その船の一つである軍艦、そしてその軍艦が変じた存在である艦娘はどうか。人の姿となり、陸を歩くことが出来るようになった彼女らであるが、かといって海の上にある事が不自然となったわけではない。どういう理屈か、彼女らは自身の艦装が健在である限り、自身に特異な能力を付与する事が出来る。五感の強化や身体能力の向上、砲撃すら防げる障壁の展開、そして何よりも、不釣り合いな浮力と推進能力を得ることが出来る。その特性こそが、まるで人がスケート靴で氷の上を自在に滑るかのように、艦娘達に悠々とした航海を可能としていた。

「はあ……」

七号鎮守府第一艦隊が出港して、数十分後。海の上を緩やかに滑りながら、艦隊旗艦である叢雲は何処となく退屈そうな表情を浮かべていた。

「どうかしたのですか、叢雲ちゃん？」

「いやね。後少しも行けば正面海域も抜ける所まで来たって言うのに、結局敵が出て来ないなと思って」

「出てこないならそれに越したことはないのではないですか？ 提督

さんも、必ずしも戦わなくていいと言っていましたし」

「そうだけれど、せっかくの初出撃が何も無しというのは張り合いがないわ」

宥める電の意見に納得しつつも、叢雲はつまらないという感情を消し去る事が出来なかった。せっかく意気込んで出てきたというのに、倒すべき敵は何処にも見られない。それでは空回りしているようではないか、という思いが彼女の中にはあったからだ。

「俺も叢雲の意見に同感だ。とはいえ、だからといって命令無視するわけにも行かないしな。俺達の命が大事だと言ってくれた相手を

裏切るようなことも出来ねえだろ」

「分かっているわよ。私だって、提督の命令には納得しているんだから」

それでも、つまらないものはつまらないのだ、と叢雲は心の中でぼやく。しかし、それを口に出した所で堂々巡りにしかなるまい。そもそも理屈はちゃんと理解しており、僅かに感情が文句を言っているだけなのだ。だったらわざわざ余計な事を口にする必要も無いなど、叢雲は僅かな不満の感情を押し込む。

そんな時であった。

『——叢雲、聞こえるか?』

叢雲の脳裏に、突如として防人——提督の声が響いた。艦隊を組んでいる時に限るが、艦娘たちは会話不可能な距離での意思伝達や、それぞれの現在の状態などの情報の共有を行なえる能力を所持している。データリンクと簡潔に称されるそれは、外部からの干渉も可能であり、そのための設備が鎮守府には必ず備え付けられている。今の提督の声も、その設備を用いて届けられたものであった。

「っと、こちら叢雲、感度良好よ」

『木曾と電も問題は無いか?』

「大丈夫だ」

「こつちもです」

『よし、相互通信に異常は無いようだな。おおよそ把握しているが、現状の報告を』

「現時点まで敵影は発見されず。そろそろ帰還も考えているわ」

『分かった。ではそのペースのまま——』

「——待ってください」

提督の指示に割り込むように、電が声を上げた。何事かと叢雲が背後を振り返ると、そこでは九時の方向に顔を向け、じつとそちらに目を凝らす電の姿があった。

「……………何か見えます。数は二、大きさは私達と大差ないと思います」

『叢雲』

「待つて」

電と同じように、叢雲もまた九時の方向に目を凝らす。電からのデータリンクの手助けもあり、数秒後には確かに、何かの姿を確認する事が出来た。視覚を意識して強化し、さらによくよくと見てみる。黒を基調とした、まるで化け物の頭部だけのような醜悪な姿。船といふよりは魚雷に近いフォルムをしたその敵を、叢雲は確かに知っている。

「……確認したわ、深海棲艦ね」

『艦種は?』

「二体とも駆逐イ級と判断。動きを見るに、まだ私達には気付いていないと思うわ」

「ハグレか、突発的に生まれた奴だろうな。アイツら、海だったら何処でも現れるみたいだし」

海であれば何処にでも現れる。それが、深海棲艦と呼ばれる者達の特性だ。彼らが表舞台に出てきた当時、彼らが大海のほぼ全てを掌握してしまったのもこれが要因と言っているだろう。何せ今回のように、人類側が完全に制海権を取った場所ですら時に出没するくらいなのだ。だからこそ、今回のような哨戒任務も重要なのである。

「提督さん、どうしましょうか?」

『そこはまだ哨戒範囲内であり、戦力的に敵わない相手でも無いと判断できるか……よし、叢雲』

「なに?」

『第一艦隊を率い、発見した敵部隊を叩け。細かい観測が出来ない都合上、戦闘中の全指揮は貴官に一任する。そうすべきだと思えば私の許可なく撤退して構わない』

「了解したわ」

『戦闘の混乱を避けるため、一時通信を切る。戦闘終了後、報告をするように。では、武運を祈る』

その言葉を最後に、提督からの通信が切れる。一度大きく息を吐き出した後、叢雲は左右に並ぶ二人を見る。

「木曾、電、準備はいい?」

「俺は問題ねえ」

「電も大丈夫なのです」

「じゃあ作戦を説明するわ。私を先頭に最大戦速で接近、射程範囲内に入り次第第二体の中央に向かって主砲を斉射。相手の散開に合わせるところもばらけ、挟むわよ。私が右、電が左で、木曾は中央で行くわ。質問は？」

「ないな」

「ありません」

「よし、では全艦、最大戦速！ 続きなさい!!」

号令と共に、叢雲は最大速度で海を駆ける。その後ろに木曾、電と続き、一直線に敵を目指していく。

「——全艦、構え！」

射程範囲内の直前まで来たところで、叢雲が号令を出した。三人は主砲を構え、叢雲が僅かに右、電が左にずれることで全員の射線確保する。それと同時に、イ級達に動きがあった。どうやら叢雲たちの存在に気付いたらしく、その身体を叢雲たちの方に向けようとしている。しかし、それは叢雲達にとっては、僅かに遅い反応に過ぎなかった。

「撃て！」

イ級達が砲を撃つよりも早く、三人が主砲を発射する。轟音と共に放たれたそれは、イ級達が攻撃を止めて回避に移ったのと、そもそも射程範囲ギリギリからの初撃であったために、そのどちらにも当たる事がなかった。だが、叢雲の予想通り、二体の距離を離すことには成功する。

「散開!!」

叢雲の号令の元、三人が三方に分かれる。木曾は直線、叢雲と電は緩やかな曲線を描きながら、二体のイ級に向かって駆ける。

「喰らいなさい！」

接近しつつ、叢雲は標的と定めた方のイ級に向かって主砲を放つ。初撃は回避されたものの、二射目は見事命中を決めた。だが轟沈には至らなかったのか、着弾の煙の向こうから砲が叢雲に向かって放たれ

る。

「浅いか、だったらー！」

放たれた砲弾を回避しながら、叢雲は更にイ級に接近していく。その姿に多少は恐れでも感じたのか、イ級が叢雲に対し砲を連射する。だが、損傷の所為かその精度は決して高くない。小刻みに進路を揺らしていたこともあり、攻撃はただの一発も叢雲に命中することが無い。

「今度はこれを受けなさい！」

その言葉と共に、叢雲は発射官から魚雷をばら撒いた。放射状にばら撒かれたそれをイ級は回避しようとするが、させないと言わんばかりに今度は叢雲が砲を連射する。

「そこっ！」

気合と共に放たれた砲が、見事イ級に命中した。着弾に動きを止めたイ級の元に、ついに魚雷の一発が辿り着き、爆発する。水柱と共に空に打ち上げられたイ級は僅かな時間だけ空を舞った後、すぐさまに水面に落下し、そのまま水没していく。それは紛れもなく、このイ級が轟沈したという証拠であった。

「よし・あつちは——」

撃破による高揚を感じながら叢雲が視線をずらすと、そこにはこちらに向かつて来る電と木曾の姿があった。どうやら、叢雲よりも早く敵を撃破していたらしい。やはり、二対一であったのが大きいのだろう。見た限り被弾もなさそうであるので、叢雲はホッと息を吐きながら、自分も二人の方へと進む。

「よう、そつちも片付いたみたいだな」

「ええ、何とかね。どうにか無傷で倒せたわ」

「怪我がなくて何よりなのです」

「まったくね……………ん？」

電の感想に頷いた拍子に、叢雲は足元の異変に気付いた。見れば、足元の海が僅かに光りだしている。段々と眩さを増していくそれに、叢雲は覚えがある。

「——ドロップか」

木曾が眩いたと同時に、その光は一際強く輝いた。反射的に叢雲は目を閉じ、光が治まるのを待つ。そして、光が治まったのを感じ取り、叢雲が目を開けると、その傍には一人の少女——艦娘が立っていた。僅かに叢雲のそれと似た艦装を頭部につけ、左目には眼帯をつけた彼女は、軽く周囲を見渡した後、口を開く。

「天龍型一番艦、天龍だ。どうやらドロップしたみてえだな」

本来、妖精達が寄り代を作り、そこに艦の『魂』とでも言うべきものを『降ろす』ことで艦娘は建造される。しかし時に、戦場の気配と、その結果による残骸——その戦闘で沈んだ敵、あるいは味方の『遺体』のこと——を元に、自らを『降ろす』ことで艦娘が肉体を得る事がある。

妖精たちの祈祷ではなく、戦闘の結果その物を神に奉納し、それに感銘を受けた存在が自ら寄り代を組み上げ、現世に受肉する。この、戦場での建造とでも言うべきものが、俗にドロップと呼称される、特異な現象であった。ドロップはどのような戦闘でも起こりえるが、基本的には勝ち戦でのみ起こるとされ、その戦闘での苛烈さや相手の質などにより、ドロップする艦娘も左右されるとされている。

「ようこそ、こ<sup>現</sup>つち<sup>世</sup>に。七号鎮守府所属、叢雲よ」

「同じく木曾だ」

「電なのです」

「おう、よろしくな。生まれた以上さつきと戦闘でもしてオレの力を示したい所だが、まあそうもいかねえか」

艦娘間での情報共有を可能とする機能は、同じ鎮守府の艦娘内では使用する事が出来ない。建造された艦娘はその時点で鎮守府に登録されるが、ドロップ艦の場合は鎮守府の工廠で作業を行うまで登録されないため、データリンクも行う事が出来ない。データリンク無しでの戦闘は連携の精細を欠き、非常に危険であるため、基本的に行われない。天龍の言葉も、これに起因するものであった。

なお、このデータリンクは基本的に、一度に六隻までしか共有できない。そのため、一艦隊に所属できる艦娘の数も六隻までと決まっている。それ以上で運用出来るのは、特定条件化のみで出来る二艦隊の



統合、連合艦隊の場合のみである。

「一人加わった所で、そろそろ通信しないかね。提督、聞こえる？」

『ああ、聞こえる。状況は？』

「三人とも被弾なし、完全勝利よ。それとドロップもあつたわ。天龍型一番艦、天龍よ」

『了解した。三人とも、良くやった。今回の出撃はこれで終了とする。天龍を連れて帰還せよ』

「了解よ」

『復路でも油断の無いようにな』

通信が終了する。ふうと一つ息を吐いた後、叢雲は他の三人を見やる。

「それじゃ、帰りましょうか」

「了解」

「はいなのです」

「おう。どんなところかワクワクするな」

「まだ何も無いところだけだね」

「そうなのか？」

「施設は有るけれど、人がいないから……」

そんな雑談を交わしつつ、四人は帰路に着いた。会話をしつつも十分に警戒を行っていた帰りであつたが、結局その後は深海棲艦も出ることなく、四人は無事に鎮守府まで辿りついた。

やはり皆、それなりに緊張していたのだろう。湾内に入ったと同時、誰しもがホツと安堵の息を吐いた。あるいはそれは、戦闘状態からそうでない状態への切り替えだったのかもしれない。それを示すかのように、彼女達は今回のことについて感想を語りだした。

「敵も上手く撃破出来たし、初任務も中々だったな」

「電としては、敵が出ないほうが良かったのです」

「まあ、その場合オレはドロップしなかったんだけどな」

「その場合、敵を発見した電が功労者になるのかしら？」

「電が見つけなくても誰かが見つけたと思いますし、皆の功績ってことでいいんじゃないですか？」

「そんなところだろうか……うん？」

ふと、木曾が首を傾げた。どうしたのかと彼女の視線の先を辿れば、埠頭の先で仁王立ちをする提督の姿が見受けられた。よくよくと見れば、どうも叢雲たちの方を見つめているようである。

「提督さん？ お出迎えなのでしようか？」

「あれがこちらの提督か。へえ、結構いい面構えじゃねえか」

「にしても律儀だな、アイツも。待たせるのも悪いし急ぐか」

「そうしましょうか」

速度を上げ、叢雲たちは提督に向かって駆ける。話が可能なくらいまで近づいた所で敬礼をすると、提督も答礼を返す。

「任務、ご苦労だった。貴官らが無事帰還したことを嬉しく思う」

「この程度、軽いものよ」

「頼もしいものだ」

叢雲の返答に満足げに頷いた後、提督は天龍に視線を向ける。

「それで、貴官が天龍だな？」

「おう、オレが天龍だ。世界水準の力、期待していてくれよ」

「期待させてもらおう。では全員、工廠に移動してくれ」

「全員で？」

はて、と叢雲は首を傾げた。第一艦隊内に、被弾をしたものはいない。天龍と、まあその案内に一人くらいは納得できるが、どうして全員で工廠に行くのだろうか。そんな彼女の疑問を察したらしく、提督は説明を始めた。

「当鎮守府において、戦闘後の艦装のメンテナンスを義務付けることにする。緊急時はともかく、平常時は必ず実行すること」

「メンテナンス？ 補給は分かるけれど、被弾もない艦装をメンテナンスの？」

「万全を期しておきたいのと、加えてだが出撃後の艦装の状態のデータが欲しいからだ。耐用限界の測定ではないが、まあそれに近い目的があると思って欲しい。それに、これは上からの要請でもある」  
「なるほど。そういうことなら断る理由もないか」

「——そもそも、命令なら断つちや駄目だと思っただろね」

木曾の声に反論するように、能天気そうな声が提督の背後から響いた。それと共に提督の背後から現れた二人の少女の姿に、木曾と電が声を上げる。

「あれ、北上姉？」

「響ちゃんなのです！」

「やつほー、球磨型軽巡洋艦、その三番艦の北上様だよ。木曾、元気？」

「暁型駆逐艦、二番艦の響だ。会えて嬉しいよ、電」

「ああ、元気は元気だが……」

「何で二人がここに居るのです？」

「……ああ、あの時命令していた建造か」

ポンと、困惑する二人の隣で、叢雲が手を叩いた。どうして更に艦娘が増えているのかという疑問が、出撃前に提督が妖精達に建造の命令を出していたことを思い出したことで氷解したからだ。おそらく叢雲達が出撃中に、高速建造剤を使用して建造を終了させていたのだろう。分かっただけなら何ら不思議の無いことである。あつて精々、都合よく今居る艦娘たちの姉妹艦が建造された事くらいか。まあそれも、結局は天命であつたということなのだろう。

「顔合わせは問題ないようだな。では、第一艦隊と天龍は工廠に向かうように。響と北上は着いていくなり何なり好きにしてい」

「いいのかい、提督？ まだお手伝いが終わっていないけど」

「おおよそは終わっているから問題ない。以後、ヒトキュウマルマルまでは自由行動を許可する」

「分かった。じゃあ私は提督についていくね」

「……好きにしろ。では解散」

そう言つて、去つていく提督と、それに着いていく響の後姿をなんとなくしに見送つた後、叢雲が他の面々に向き直る。

「じゃあ、私達も行きますしよるか」

「はいなのです」

そうして、叢雲の先導の元、五人は工廠へと向かう。その道中、電が北上に対し声をかける。

「ところで北上さん」

「んー？ なにさ、電？」

「響ちゃんの言っていたお手伝いって何のことなのです？」

「ああ、あれ。ただの書類仕事のことだよ。そっちが出撃中暇だったから、提督の仕事を二人で手伝っていたってわけ」

「秘書艦って奴か？」

「んー、どっちかと言うと補佐艦って感じ？ 一応、秘書艦には叢雲をつけるつもりみだし」

「私？ いやまあ、別に不思議も無いけど」

大体の場合において、着任して間もない提督の秘書艦は、初期艦の艦娘がそのまま勤める事が多い。そのため、提督もその方針であると聞いても、特段不思議なことは無い。

「そういうことなら、私もメンテ後は提督の所に行こうかしら」

叢雲が小さくそう呟くと、それを聞いたらしい木曾が口を開く。

「だったら俺も行くのかな。自由時間って言っても、どうせ暇が余るだろうし」

「いつそ皆さんで行きましようか？ 提督さんのお手伝いに関しても人が多い方がいいかもしれませんし」

「初仕事が書類仕事の手伝いってのはちよいと気が乗らねえが、偶にはそれも悪くはねえか」

「私は手伝ったばかりなんだけどねえ。まあ、いいけどさ」

いつの間にか、皆で向かうことになっている。自分の仕事なのだと叢雲は思ったものの、既に響が先行しているのだということに気が付き、何となく苦笑してしまう。

「まったく、私の仕事が無くなるじゃないの」

だが、不思議と悪い気もしない。提督も含め、どうやらこの鎮守府とは水が合いそうだ。そんな事を感じながら、叢雲は皆と共に工廠に向かつて歩いていくのであった。

## 電が新しい朝を迎えました

七号鎮守府は、無い無い尽くしの鎮守府である。長年閉鎖され、最近になった再稼動となった関係上、物資も人員もたいしたものがない。特に人材に関しては、とある事情から提督を除けばたった六名の艦娘のみ。どういう事柄にせよ、専任者の類を決める余裕などあるわけもない。故に、現時点で行わなければならぬ重要事項に關しても、そのほとんどが持ち回りという形をとることで強引に執り行っていた。

そのうちの一つが食事であり、また一つは秘書艦業務であった。

「……………んう？」

早朝。控えめに鳴る目覚ましの音に、電は目を覚ました。起床を促す目覚ましを緩慢とした動作で止め、彼女は身体を起こして寝台の上に座り込む。しかしその頭は見るからにゆらゆらと揺れており、その意識はまだぼんやりと霞がかっている。

「ん……………朝、なのです……………」

意味もなく眩き、電はとろんとした目で虚空を見つめる。そのまましばしの間、その状態を維持した電であったが、

「——しまったのです!？」

目の焦点が定まったと同時に、電は焦りの声を上げながら布団を出る。そのままやや危なっかしい手つきで身支度を整え、彼女は自室として与えられた部屋を飛び出す。鎮守府内における艦娘専用の寮の廊下を走り、玄関を出て、近くに建てられている大食堂に飛び込む。「すみません、遅れたのです!」

がらんとした食堂内に、電の謝罪の音が響く。彼女の申し訳なきげな声に応えたのは、食堂の奥、調理場から顔を出した提督であった。「おはよう、電。貴官の言葉を否定するようで悪いが、そこにかかけられている時計を見るといい。私が貴官に要求した集合時間には、まだ若

干の余裕があるようだぞ」

言われ、電は壁にかけられた大時計を見る。確かに提督の言う通り、指示のあつた時間にはまだ十分以上余裕がある。そういえば目覚ましの時間は十分な余裕を持って仕掛けていたのだということ、電は遅まきながら思い出す。

「まあとにかく、急ぎ着替えてくるように。木曾が戻つて来次第、本格的に始めるぞ」

「はい、分かりました」

頷いて、電は調理場横の従業員室に入る。そこに並べられたロッカーの一つを開け、電はそこにかけてられた衣装——エプロンを身につける。

「……調理当番、今日も頑張るのです」

呟いて、電は小さくガツポーズをとる。鎮守府の再稼動から一週間ほど、彼女にとっては二度目となる調理当番。気合も入ろうというものだろう……まあ、寝坊しかけたのだが。

そして軽く身だしなみを確認し、問題ない事を確認したところで電は従業員室を出る。すると、ちょうど裏口の戸が開いて、外から複数の木箱を抱えた木曾が入って来た。

「つと、雷か、おはよう」

「木曾さん、おはようございませうのです。あの、お手伝いしましょうか?」

「ああ、じゃあ一個頼む」

「はいなのです」

ぎつしりと詰まっているのか、受け取った箱はズシリと重い。しかし、見た目の幼さはあれど、電もまた艦娘である。艤装を直接纏っていないくとも、リンクさえしていればその恩恵——例えば、成人男性を遥かに超える膂力だとか——を受ける事が出来る。体躯に見合わぬそれを軽々と抱え、雷は木曾と連れ立って歩き出す。

「これ、中身は何ののですか?」

「そっちはサラダ用の葉物だな。今日の朝飯は洋食にするらしい」

「そうなのですか。司令官さんは色々作れて凄いです」

「そういうの、さつきと俺達も慣れないとなあ。いつまでも提督におんぶに抱っこつてわけにもいかねえだろうし」

基本的に、艦娘の多くは建造の段階において、世間の一般常識などを覚えて生まれてくるようになっていく。これは艦であったころの乗組員の記憶などが作用していると考えられており、実際に艦娘たちの中にはそれを肯定する者もいる。それ故に、電を初めとして、簡単な料理であればレシピを知っているものも多い。

だが、知っているかといつてすぐに実践できるかといえば怪しいところがある。確かに料理というものは、上を求めなければ、大体はレシピを知っていればどうにかなんとかなるところがある。しかしそれも、ある程度のノウハウを分かっていたらいい話だ。まったく料理をした事がない者が突然、レシピ本だけを渡されて料理をしろと言われても期待はしにくい。そしてそれは、艦娘に対しても同様の事が言えた。つまり、知識あれど実際の料理の経験などない艦娘達にとって、補助無しでの料理というのはなかなか難しいものであるということだ。

このため、持ち回りの料理当番を決めているものの、実際には料理経験を持つ——本人曰く、一人暮らしで身についた程度の簡単なものだそうだが——提督がそのほとんどを作るといふ形になっていた。彼の主導の元で補助を行い、艦娘たちは持ち回りで料理の経験値を溜めている、というのが今の料理当番絡みの実情である。

人員が少ない、というのもこの点においては良い方に働いていた。艦娘が少なく、出撃等の規模が小さいために、捌かなければならない書類がさほど多くならず、結果として提督に調理場に足を運ばせる余裕を持たせていたからだ。まあ無論、そもそも人員が居れば提督が自らこういう事をする必要が無かったのだといえ、それはそうだと肯定しか出来ぬことなのだ。

「その辺、北上姉が案外と要領良いんだよな。秘書艦補佐もそうだけど、気だるそうであんまりやる気は見えないのに、仕事はちゃんと終わらせているっていう」

「私達も見習わないといけないのです」

「まったくだ」

一応の結論が出たところで、二人はちやうど調理場内に足を踏み入れた。適当な場所に荷物を降ろそうとした二人であったが、その前に水場で準備中であった提督が二人に気付いて声をかける。

「二人とも、それはここに置いてくれ」

「はいなのです」

指示通りに従い、二人は荷物を置く。蓋を開け、中の野菜を見定めている提督の姿を見ていると、まるで自分達の上官であるように見られない。腰に巻いたエプロンも相まって、本当に食堂で働くコックのようである。

「——って、それじゃ駄目ですよね」

ブンブンと、電は思わず抱いた感想を霧散させる。突如としてそんなことをすれば当然、彼女の内面など知らぬ木曾と提督から、奇異の視線を向けられてしまうことになる。

「雷、どうかしたのか?」

「ええと……何でもないのです」

えへへ、と誤魔化すように電が笑う。それに木曾たちは怪訝そうな表情を浮かべたものの、すぐにまあいいかと思っただのか、話題をこれからのことに切り替えた。

「それで提督、今日は何をすればいいんだ?」

「そうだな。木曾は野菜類を手ごろな大きさ……まあ、その辺は指示するからとりあえず切ってくれ」

「あいよ」

「電はまずレタスの葉を千切って洗うのを。その間に準備をしておくから、その後の火加減などを頼む」

「分かりました」

木曾と比べれば随分と簡単な指示であったが、電は特に不満もなく領いた。艦娘の中でも背の低い者が多い駆逐艦だが、電の所属する暁型は特に体格が小さい。包丁の扱いを含め、キッチンで作業するには背が足りないことが多いということを、電も理解していた。

「何度言ったか分からないが、朝食は身体を動かす為の重要な要素だ。自分や皆の為にも、頑張って作るとしよう」



「ああ」

「はいなのです」

こうして、提督の指揮の下、朝食作りが始まった。三人がかりで七人分。よほど手の込んだ物を作るわけでもないため、一時間ほどあれば大体は作り終えることとなる。

そして後は仕上げのみ、という段階に入った時、続々と他の艦娘たちも集まってきた。まず叢雲、ついで響、やや遅れて天龍と北上。この辺りはそれぞれの性格が出ていると言うべきか、はたまたただの偶然と言うべきか。とにかく、全員が揃った頃には、提督たちのほうも準備が終わり、後は食べ始めるだけという状況になっていた。

「ええと……いただきます、なのです」

その日の調理当番の誰かしらが、代表して食事の号令をかける。何故か自然発生していたその決まりの元、電が号令をかけると、皆も彼女に倣った後に食べ始める。広い食堂で無駄にばらけるよりはと七人で固まって食事を取っているが、そうになると自然、食事の中の話題は鎮守府の仕事関係に偏っていた。

「……それでさ、提督。結局、新しい艦娘に関してはどうなっているの？」

「ああ、それは俺も聞きたいな。不運の影響も、そろそろ払拭されてきていると思いたいんだが」

艦娘の建造において、既に鎮守府に所属している艦娘が新たに建造されることはない。これは、一つの鎮守府に対し同タイプの艦娘が複数所属出来ない、という仕様に関係しているとされている。

しかし、確率上においては、既にある艦娘と同じ艦娘が建造対象となる事がないわけではない。そういった場合、どう処理されるか。答えは、その艦娘の装備のみが建造される、だ。通常の開発とは異なり、主砲や魚雷発射官のみ、などではなく、一度の建造で主機を含めた装備一式が建造されることとなる。なお、この現象はドロップに関しても同様の事が言えた。その場に立ち会った艦娘から何かの干渉を受けているのか、鎮守府の施設と直接の関係がないドロップにおいても、何故かダブリは装備として出現する——なお、その場合は海に装

備のみが浮かんでいるという、笑えばいいのか恐怖を感じればいいのか怪しい状況となる——事が多い。多い、としているのは、やはり建造とは勝手が違うということか、偶にダブリ艦が出現する事があるからである。そういった艦娘はその鎮守府には所属出来ないのも、大抵は大本営を経由した後、他の鎮守府に送られることとなっている。

それで、このダブリ装備であるがこれらは大抵、予備兵装として保管される、他の装備の改修の素材とする、あるいは解体して僅かな資材とする、などと処理されることになる。これを考えると、建造において所謂『ダブリ』が発生することは決して悪いことではないだろう。しかし、今の七号鎮守府においては別の評価、木曾の言った『不運』という言葉に収束することになるだろう。

即ち、

「まさかこの人数で、私達と天龍さんがダブるなんてね」

暁型装備一式、そして天龍型装備一式。それが、北上と響の後に建造された物品であった。確かに、レシピは最低値のものから変えてはいない。だからと言ってもまさか、二度建造させた結果、そのどちらもがダブるとは、誰が思うだろうか。しかも、片方は響ないし電、もう片方は天龍と、あまりにピンポイント過ぎるダブリである。それを聞いたとき、電ですら乾いた笑みを浮かべざるを得なかった。

「しかもそれで開発資材が枯渇したんだから、笑えないってものよ。何で高速系のそれより先に開発資材がなくなるんだが」

「そこは仕方あるまい。再稼動したばかりの、しかも取り急ぎ危険も少ない地域の鎮守府だ。ひとまずということとで初期艦を除いた一艦隊分、つまり六隻分しか用意していないというのは、それほど理不尽なことでもないだろう」

確かに、それはそうなのだが、その後の不運は理不尽と言えるのではないだろうか。それは提督も同じように思っているのだろう。弁論を述べてすぐ後、彼は苦々しそうに口元を歪める。

「とはいえ、まさかこういう形で枯渇するとは、流石に予想外ではあるか。実際、急ぎ元帥閣下にも報告した時も、まず怪訝な声で聞き返されたからな」

さもありません、と提督の言葉に電は頷いた。当事者である自分達ですら、何かの冗談だと思いたいことなのだ。他人からしてみれば真面目に取り合わなくてはならない話なのかと、まずこちらの正気を疑いそうなことである。

「しかも、それに加えて戦闘もろくに起きていないしな。平和なのはそれでいいっちゃいいんだが、ドロップもないんじや人も増えやしねえ」

ため息交じりに天龍が言った通り、初日の戦闘以降、七号鎮守府にはほとんど戦闘の機会が存在してなかった。二日目に、叢雲を旗艦として響、北上、天龍が出撃した時に二度目の戦闘が起こったものの、その時はドロップが発生せず、以降は一度も戦闘が発生していない。哨戒をサボっていると言うわけではなく、最低限より二歩ほどは上というレベルで任務を果たしているのであるが、深海棲艦の姿は影も形も見受けられていない。それが決して悪いことではないのは確かだが、一人でも戦力を増やしたという今時分においては、ドロップの機会すらないこの結果は、確かにため息の一つも吐きたくなるうと言うものだ。

「……それで、司令官？ 結局の所はどうなんだい？」

「結論から言えば、現時点では不明だ。元帥閣下には事情を説明したものの、客観的に見てここの優先順位はそう高くない。開発資材だつてそれなりに貴重品である以上、もう少しは待つて欲しいとの仰せだ」

はあ、と誰かしらから落胆の声が漏れた。しかしそれをもっとも感じているのは、おそらく提督なのだろう。少なくとも、電の目にはそう見えた。

「……何にせよ、無いものねだりをしては始まらない。とりあえずは現状維持、それだけだ」

提督の言葉に、それしかないかと艦娘たちは頷く。そんな諦めの混じった結論が一応は出たところで、叢雲が口を開いた。

「そうそう、今日の秘書艦補佐なんだけれど、響で良かったのよね？」

昨日は再度の確認をしていなかった気がするんだけど」

秘書艦補佐というのは、提督が定めた制度だ。文字通り、秘書艦を補佐する艦娘のこととなる。単純に秘書艦や提督の仕事の負担を減らす、秘書艦が出撃中の間に代わって提督の補佐をする、といったような仕事がメインだ。加えて、秘書艦を変更する際にスムーズな移行が出来るように経験を積む、ある種の下積みやインターンのような地位でもあった。

艦娘としての能力か、あるいは当人の事務能力か。この役目はおおよそ電か響が担当する事が多く、事実昨日は電の番であった。となれば、今日は響の番なのだろう。そう思い電が提督を見れば、予想通り彼は小さく頷いた。

「そうだったか。すまない、それは私の落ち度だ。貴官の言うとおり、今日の補佐役は響を任じている。響、貴官も承知しているな？」

「分かっているよ、司令官。叢雲、今日はよろしく頼む」  
「ええ」

「加えて確認しておこう。今日も哨戒任務は二度、ヒトマルマルマルとヒトゴーマルマルに出発とする。編成は叢雲を旗艦とし、電、北上、天龍。木曾は待機だ」

いいな、と提督が皆の顔を見渡す。それぞれが頷き、了承を示したのを確認すると、提督もまた大きく頷く。

「では、本日はその通りに」

その言葉を最後に、この話題もまた終わる。後はまた、仕事関係やそれ以外の話などを交わしながら、艦娘たちと提督は食事を進める。これが最近定まってきた、日常の始まりの風景であった。

## 響は幾つかの答えを得ました

朝食を済ませてから数時間後、響の姿は鎮守府の提督執務室にあった。朝食の席でも述べられていた、秘書艦補佐の職務を全うしている最中である。

もつとも、現時点ではそれほど複雑な仕事はやっておらず、提督が処理する、あるいは処理済の書類の分別や並び替えを行っている。今は第一艦隊旗艦として出撃している叢雲が、出撃前に一通りの仕事を終わらせてしまっていたからだ。提督と秘書官で仕事量が異なる――勿論、提督のほうが圧倒的に多い――為に、一時も書類から目を離さない提督と裏腹に、響はやや手持ち無沙汰気味な状態となっている。

「……叢雲は優秀だね」

「そうだな。重宝している」

思わず漏らした感想が、どうやら聞こえてしまったらしい。予想外な提督の返事に驚きつつ、表面上は何でもないようして、響は提督の方に視線を向ける。

「おかげで、私は叢雲がいない間にやれる事がないんだけどね。というかさ、司令官。いくら優秀って言っても、秘書艦も旗艦もというのは、流石に使いすぎじゃないのかい?」

「効率を考えれば、私も分離させたいところなんだがな。とにもかくにも、人がいないのではどうにもならない」

「人手不足か……ちよつとした疑問なんだけれど、人を雇うというのは駄目なのかな? 民間人は無理としても、軍にもそういう仕事を担当する人はいると思うんだけど」

ふと思いついた提案を、響は提督に投げる。当たり前のことだが、艦娘は戦闘要員なのだから、事務方を兼任するというのは些かおかしな話だ。戦闘の報告書等を作成するというならともかく、鎮守府の運営に関わる書類まで処理するというのは仕事を集中させ過ぎだろう。料理当番だつてそうさ。そういうった事を別で済ませる人間を雇う、というのが本来あるべき形ではないのか。

そんな当然の疑問に対し、提督は手を止めて、難しそうな表情を浮かべながら口を開く。

「もつともな意見なのだが、鎮守府には『提督』以外の人間は雇用しない、というのが大本営の方針でな。例外がないでもないが、少なくともここはその例外ではない」

「何で人を入れたら駄目なんだい？」

「ああ……これはまあ前提としての話だが、貴官は艦娘の特性の一つとして、人間への『懐きやすさ』のことを知っているか？」

「懐きやすさ……？」

「知らんか。艦娘は人間に対し、無条件とまでは行かないにしても、ある程度好意を抱きやすいという性質を持っている。特に、提督なりなんなりと、自分を指揮する立場である相手にはそれが顕著となるらしい。私が言うのもなんだが、貴官も私と会った時、初対面にもかかわらず、どちらかと言えば好意的な印象を抱いたのではないか？」

言われてみれば、と響は過去を振り返って思う。確かに、不思議と無条件で、この人を信用できる——信用しようと思った覚えがある。そういう性質があったからなのかと、我が事ながら響は納得したように数度頷く。

「確かに。これって、ある種の刷り込みなのかな？」

「さて、個人の、というよりは人類種全体対にするものらしいからな。この性質のため、艦娘が対深海棲艦用に人類に遣わされた兵器である証左、という論すらある。まあ、あくまで全体的にマイナス印象を持ちにくいというだけで、個々人で見ればそういうわけでもないが」

「気に入りやすいだけで、嫌いな相手は嫌いってことだね。それで、それがどうしたんだい？」

「いまいちピンと来ない、と思いつながら、響は分かりやすく首を傾げてみせる。そんな彼女の態度は良く伝わったようで、提督は視線を響に固定してからさらに続ける。

「かつての話だが、提督以外の人間を雇用しながら運営していた鎮守府があったそうだ。当初は何の問題なかったんだが、少しして問題が発生した」

「問題？」

「艦娘達が、提督と雇用者の一人との間で派閥分裂のようなものを引き起こしたんだ。つまり、提督に着く艦娘と、もう一人に着く艦娘とで、鎮守府が二分されたということだ」

「どうしてそんな事に？」

「人望云々やら、まあ色々あったらしい。艦娘といえど個人の集まり。人によっては提督を疎む者も居ただろうし、もう一人になびく者も居ただろう。ここで大事なのは、艦娘の個人として忠誠心が、必ずしも提督に向くというわけではなかったということだ。人類への好意と指揮者への忠誠がせめぎあった場合、時に艦娘たちは仰ぐ頭を他に見てしまう。あくまで可能性であるが、実例がある以上は無視出来ないことになる」

「それで、万一の内部分裂を避けるために、鎮守府に『提督』以外の人間は入れなくなった、と」

「そういうことだな。おかげで事務処理も調理担当もこっちで纏めてやらないといけないわけだ」

面倒な、と響は口の中で言葉を転がす。何ともおかしな話であるが、それが事実というなら受け止めるしかないのだろう。あくまでその一件のみの特例ではないのか、とも思ったが、流石にたった一件の報告のみで軍がそんな非効率な命令を出すとも考え難い。実際は他にもそういうことがあったのだろうと考え直し、今度こそ響は納得の領きを返す。

「そういう事情なら仕方がないか……ああ、でも確か、艦娘には給糧艦がいたよね？ そっちは引つ張って来られないのかな？ 少なくとも、調理当番に関しては手伝ってくれると思うんだけど」

「いや……あれはちよっと、うちではまだ難しいだろうな」

「とことうとこ」

「給糧艦は確かにいるが、あれは一定以上の規模の鎮守府にのみ配備されるのが通例だ。彼女らは補助艦であり、大規模の鎮守府においてその補佐をするために配備すべし、となっているからな」

「……………ん？」

数秒後、提督の言葉を飲み込んだ響は、心底不思議そうに首を傾げる。

「司令官。一定以上の規模、というのはつまり艦娘が多くいるってことだよな？」

「そうだな」

「人が多いから、手助けをいれようってことだよな？」

「ああ」

「……人が少なくても、手助けはいるよね？」

人が多い——つまり調理量が多くなるから人手が居るといのは、確かに事実だろうしかし、人が少ない——つまり手が足りないから人手が居る、というのもまた事実ではないだろうか。何かが妙だ、と首を捻る響に、提督も眉を顰めながら言う。

「まあ、確かにそうなんだが………残念ながら、そういうことになっているのでな。この辺りの補助制度は、そもそもとしてある程度以上の規模の鎮守府を想定して制定されている。うちのようなまだ小規模の鎮守府だと、そういうところで齟齬は出てきてしまうものだ、と納得するしかない」

「色々と面倒なんだね」

「仕方あるまい。どうしても、何処かで妙な欠点というのは出てくるものだ」

そう言っ肩をすくめた後、提督は再び書類仕事に戻る。淀みないその手つきに響が人知れず感嘆していると、書類の山の脇に設置されているパソコンから、突如として音が鳴った。

このパソコンは通常業務以外にも、艦娘の状態把握等も出来る代物で、特に艦隊の出撃時には出撃中の面々の名とその状態——おおまかに数値化した耐久だとか、弾薬や燃料の残量等——が表示されるようになっていて。加えて重要なのは、これが提督と艦隊を結ぶデバイスの一つであるということにある。

そんなパソコンの画面、第一艦隊旗艦である叢雲の名の横に、通信を知らせる通知が表示されている。何か連絡すべき事があった、というサインに、見るからに提督の顔が引き締まる。



「何かあったのかな」

「大事で無ければいいが……」

言いながら、提督はマイクとスピーカーのスイッチを入れ、口を開く。

「——私だ。何かあったか？」

『幸か不幸か、何もなしよ。哨戒任務、往路を終了したわ。ルートを変更して復路としたいのだけれど、いいかしら？』

「問題ない。慢心することなく、注意して帰還すること」

『了解、通信を終了するわ』

その言葉と共に、通信が終わる。何も無かった、と分かったことで、思わず響はホツと胸を撫で下ろした。ドロップで人手が欲しい、艦娘は戦うことが仕事、などと思っているとはいえ、やはり何事も無ければそれに越したことは無い。まかり間違つて轟沈が起こるくらいなら、冷や飯喰らいの方がマシだろう。そんな考えの元、響は安堵の息を漏らす。

「何もなし、か。まあ轟沈でもされるよりは、人手不足にあえぐ方がマシだな」

「えっ……」

響の口から、驚きの声が漏れる。まるで心を読まれたかのように、提督もまた響と同じ事を口にしたからである。そんな彼女の反応に、提督が不審そうに眉を上げる。

「どうした？」

「あ、ああ。ううん、何でもない」

提督からの問いかけに、響は首を横に振って返答する。しかし、自覚はないのだろうか、その口角は僅かに上がっている。自分と提督が同じ事を思っていた、ということが妙に嬉しく、それが素直な感情として彼女の口元に表れたからだ。内容が内容であったから、特にそう思ったのかもしれない。分かっていたことではあるが、提督が艦娘を大事にしてくれる人だと再確認出来たことによる歓喜ということなのだろうか。あるいはこれも、先に提督が語っていた、艦娘の人懐っこさとやらによるものかもしれない。

「まあ……何も無いなら、いいが」

数秒ほど訝しげな風であったものの、特に追求することもなく、提督は再び書類に目を落とす。心なしか、響の目にはその手つきは何処か優しげにも見えた。やはり、提督もまた安堵を覚えているということなのだろうか。そして、そう思えたことにも嬉しいと思ってしまうのは、あるいは先の艦娘の性質によるものなのだろうか。

「——どっちでも、いいさ。大事なのは、そこじゃない」

小さく、口の中で転がすように呟いて、響も数少ない自分の仕事を再開させる。そのまま、しばし無言の——しかし、何故か心地は良かった——業務を続けていた二人であったが、突如として提督が腰を上げた。何か、と一瞬思った響であったが、窓の外の景色を見てすぐに納得する。

「艦隊の皆が帰ってきたみたいだね」

「であれば、出迎えなくてはな」

「随伴するよ」

言つて、響は提督に付いて執務室を出る。誰も居ない階段や廊下を通り、外に出て港へと向かう。そのまま何事も無く埠頭へと辿り着いたところで、提督は足を止め、海を——つまりは帰還中の第一艦隊に、その視線を固定する。その傍らに立ち、視線を同じくした所で、響は口を開いた。

「ねえ、司令官。一つ聞いてもいいかい？」

「何だ？」

「司令官はどうして、毎度毎度私達を出迎えるんだい？ 無駄に動くし、その間は仕事も滞るのに」

初の出撃と、今。そして、その間にあった全ての艦隊出撃において、提督はその帰還をこうして出迎えていた。立場的に言えば、彼がそうする理由は全くないはず。むしろ帰還した者の中の誰かを呼び出し、そこで報告を聞くというのが自然だろう。にもかかわらず、この提督は必ずここに足を運び、自ら艦隊の帰還を確認しに来ている。それはどうしてなのだろうと、響はずっと疑問を抱いていたのである。

「何故、か。強いて言うなら……私の都合、だな」

「都合？」

思わず首を傾げながら、響は驚きの声を漏らす。幾つか想定していた疑問への返答に比べて、それは明らかに予想の範囲外であったからだ。彼女としては、『苦勞をかけているから、これくらい』だとか、『呼びつけるのは性に合わない』だとか、まあそういうようなことを想像していた。今までの生活から垣間見えた提督の真面目さや勤勉さ、あるいは優しさや懐の深さから、てつきりそういう答えが返ってくるものだろうと思っていたのである。

そんな彼女の驚きを、果たしてどれほど理解しているのだろうか。提督はその視線を動かすことも無く、しかしその口元を皮肉げに歪めながら言う。

「ああ、都合だ。私はただ、早く確認したいだけだ。誰一人として失われていないことを。私は、誰一人として失わせていないということ」

そう言う提督の口ぶりには、何処か自嘲らしきものが混じっているように思える。その口元と合わせると、どうにも提督は、自分のこの行動を自己満足か何かとして捉えているように響には思われた。

「……だから、私の都合、か」

艦娘のためではなく、提督の都合。詳しくは分からないが、提督の言葉には含むものがありありと感じられる。どうやらこの提督には、まだ響の知らぬ一面が数多くあるらしい。職務に忠実なれど、艦娘たちには可能な限り優しい。それだけではないのだと、響は提督への印象を僅かに変える。

「まだまだ、司令官には謎があるんだね……」

その全てを知る時は、いつか訪れるのだろうか。そんなことを考えつつも、帰ってくる艦娘たちを出迎えるため、その手を小さく振るう響であった。

北上は当面の目標を定めました

「——このっ！」

水面を蹴り、その場を飛び退る。着地したと同時に、一瞬前まで自身が居た場所を魚雷が駆け抜けていく。その事にひやりとしたものを感じつつ、北上は砲を向ける。

「いい加減に、落ちてくれないか——なっ！」

発砲。爆発音と風切音を生じさせた後、砲弾は見事激突音まで響かせる。北上の放った一撃は見事、敵駆逐級の装甲に命中したのだ。当たり所が良かったのか、それとも先に北上が当てた魚雷が効いていたのか。砲撃を受けた駆逐イ級は一瞬動きを止め、徐々にその身体を海面へと沈めていく。撤退や偽装ではない、確実に轟沈したのだと北上は直感する。

「よっしー！ って、そんな場合じゃないよね！」

思わず歓声を上げつつも、すぐさまに視線を周囲にめぐらす。今回接敵したのは、軽巡ホ級一隻に、駆逐イ級三隻の合計四隻からなる艦隊。対してこちらは、北上を旗艦として、木曾、電、響の四人からなる艦隊。数が等しく、結果として各個対応という形になってしまったのだが、他の皆も自分のように敵を倒してくれただろうか。

そんな心配から、データリンクの結果を見つつも、思わず北上は周囲を見渡す。しかし、結果としてこれは、どうやら杞憂であったらしい。北上が視線を動かすのと同じように、他の面々もこちらを含めた周囲に視線を向けている。どうやら、ちょうど他の戦闘も終了したようだ。哨戒任務中に発生した久しぶりの戦闘であったが、どうにか犠牲無く勝利を収めることが出来たようである。

「皆、大丈夫だったー？」

あえて軽い調子で、北上は全員に問いかける。艦隊を組んでいる以上、データリンクによって各個の状態は把握出来ている。加えて、被弾具合なども視覚を介しておおよそ推測は可能だ。そういう意味ではわざわざ口答で状態を述べる意味はないのだが、あえてそうした方が、戦闘後の緊張もほぐれるだろうか、何となくそう思ったからだ。

実際、それは多少なりとも効果があつたようで、特に電などは戦闘の疲れを追い出すように、大きく息を吐き出している。

「私は大丈夫だよ」

「電も、特に問題はないのです」

「悪い、こつちは一発喰らった」

無傷の駆逐艦二人と違い、僅かに破れ、焼け焦げた衣装を纏いながら、木曾は顔を顰めて言う。そんな彼女に北上は、気にするなと手を振って応える。

「と言つても小破でしょ？　じゃあ問題ないって。というか、謝られても困るし」

むしろ、この結果は上々とすら言えるかもしれない。艦数の等しい相手と戦い、軽巡一人の小破で済んだというのは、今の北上たちの錬度を鑑みれば十分な犠牲だろう。哨戒任務中の接触で、誰一人轟沈することなく敵を撃破しきつたのだ。少なくとも提督に怒られるようなことはあるまいと、北上はある種の確信すら覚えながら言う。

「大丈夫だと思うけど、周囲警戒を厳にお願い。その間に私は提督と通信しておくから」

皆が領いたのを確認した後、北上は鎮守府に通信を繋ぐ。よほど気を揉んでいたのだろうか、一秒と経たずに提督の声が聞こえてくる。

『私だ。どうなった？』

「全員無事だよ。木曾は小破を喰らっちゃったけど、敵は全員轟沈させた」

『……そうか、よくやった』

一拍遅れて放たれた、提督からの賞賛の言葉。そこから北上は、僅かな喜色を感じ取った。こちらの状態はモニターされている以上、北上の報告の前から状況は分かっていたはずだが、それでも実際に言葉に出されると違うものがあるのだろう。先ほど北上が言葉に出して皆の状態を確認したのと同じく、分かっているも本人から言葉を聞くというのは、思っている以上の安堵を覚えるものである。

『ともかく、第一艦隊は急ぎ帰還しろ。往路と同じルートで構わん。万一、があつては貴官らが奮戦した意味が無くなる』

「了解。警戒しつつ急ぎ足で帰るね」

『頼むぞ』

その言葉を最後に、提督との通信が終了する。ふうと息を一つ吐いた後、北上は軽く手を叩く。

「はい。じゃあそういうわけだから、これから第一艦隊は鎮守府に戻るよ。旗艦様について来るように、ってね」

言って、北上は鎮守府に向かって航路を取る。その後に僚艦が続いてくる事を確認し、さらにその距離がやや遠めだと分かると、北上は先ほどまでオープン通信ではなく、個別通信を提督に繋げる。

「……提督、ちよつといいかな？」

『待て、叢雲達は下がらせる』

小声で話しかけた北上に対し、提督は間髪入れず命令を返してくる。状況から内緒話だと察したのだろうが、それにしても理解と対処が早い。有能だなあ、と半ば他人事のように北上が考えていると、少しして提督の声が彼女の脳裏に響いた。

『待たせたな。それで、一体どうした？ 内密な話と判断したが』

「まあ、ね。率直に聞けどき、提督。今回の私の指揮っぷりはどう思った？」

『戦術面の話か？』

「うん、そう。ちよつと、アドバイスを貰いたいなって」

そう言う北上の表情に、彼女が常に浮かべているのんびりとした色はなく、代わりに分かりやすいほどの苦々しさが続いていた。彼女が陣の先頭を買って出たのも、単に彼女が旗艦であるというのもあるが、万一にもこの表情を誰かに見られたくないというものがあつたのだろう。もつとも、彼女がそれを自覚しているかどうかは定かではないが。

『そうか。まあ、アドバイスを考え、与えること自体には、私としても拒否する理由は無』

そんな彼女の表情など見えるはずもないが、その口ぶりから彼女の抱く後悔は読み取れたのだろう。返って来た提督の言葉は真剣で、そして深刻な口調だ。

『だが二つ、まず言っておくべき事がある。まず一つは、何故それを他の者に知られないようにしている？ さして、知られて困るものもあるまい』

「うーん、そうだねえ……何というか、切磋琢磨しているって知られたくないから、かな？」

自分のキャラ、というのを北上は理解している。マイペースで、暢気。それが、他者から見られやすい、『北上』という艦娘の特性だ。そこからしてみると、熱心にメモを片手に教授を受ける、というのはあまり合わないように見えるだろう。別に、それを律儀に守ろうというわけではないが、あまり逸脱すると妙な関心も引くだろう。何か、その理由などをしつこく問われるかもしれない。

それは、面倒だ。だから、こそそこそこ尋ねている。そういうことを含ませた北上の言葉に、通信先の提督からは、小さく頷いたような気配が感じられた。

『なるほど、分からないでもない感想だ。その事に関しては納得しよう』

「ありがとう。それで、もう一つってのは？」

『こちらは私の都合だが、もう一つの前提として、私はあまり戦術面に詳しいわけではない』

「え？ そうなの？」

提督の言葉に、北上は『意外』という言葉を得る。そんな彼女の反応は織り込み済みだったのだろう。さして大きな反応を見せるでもなく、淡々と提督は続ける。

『確かに戦術を極めた提督も他にはいるのだろうが、生憎と私が『提督』となるために学んだことは、どちらかと言えば戦術よりも戦略だ。戦術を学んで貴官らを直接指揮するより、貴官らが十全に戦えるための戦略を学ぶ方が有益だと思っただけだ。どんな状況でも勝てる手段を学ぶより、勝てる状況を作る方がいい、とね』

「だから、戦闘中も丸投げだったの？」

『下手に差し出口を挟むよりは、貴官らの独自判断の方が動きやすいだろう？ 他で作戦行動が実行中というならともかく、ただの局地戦

ならその場だけで判断したほうが返って楽だろうというのが私の考えだ。そも、小さいとはいえ一つの組織のトップが下の細々とした動きまでコントロールするより、下にそれが出来る人材を当てた方が効率はいいと私は思う』

「言われてみると……」

そうかもしれない、と北上は提督への反応を意外から納得に変更する。今の規模ならともかく、将来的に鎮守府が大きくなっていけば、提督の論の方が良さそうに思えたからだ。それに、提督の言う、勝てる状況を作る、という言葉は北上は気に入った。巧みな用兵こそ華、という考えもあるのだろうが、そもそも相手を凌駕する戦力を持つて戦った方がやりやすいに決まっている。その状況こそを作るのが提督の仕事、という考えは、北上の胸の中にストーンと入るものであった。「うん、そこは了解した。でも、全く素人つて訳じゃないんではよ？」

だったら参考意見として話を聞きたいかな」

『そうか。では話すが……そうだな、今回の戦闘において問題となるのは、やはりそれぞれが各個に戦闘を行ったことだろう』

「やっぱり、四対四の方が良かった？」

予想通りの指摘に、北上は眉を顰める。自分でも、そこは駄目だったのではないか、と思っている所であったのだ。

『あくまで私見だがな。艦隊同士でぶつかり、応戦。全体として攻撃受け流しつつ、四隻の攻撃を敵一隻に集中。これを達磨落としの様に繰り返し、最終的に撃破、という方が良かったように思える。各個で戦闘を行った場合、一つが終わり次第他の加勢に迎えることになるが、逆を言うと一つの戦いが終わらないと仲間がピンチになろうとも援護が出来ない。今回の木曾の損傷が例と言えば例だ。そういう観点で言えば、あくまで四隻で互いをカバーしながら一点集中の方が良かったのではないか、と思う』

「そっか……まあ、そうだよな」

『とはいえ、これはあくまで理想論。全てが上手く行った場合の話だろう。実際、今の貴官らの錬度ではこれを成せるだけの連携が出来るかと言うと、やや怪しい所があると私は思う。そういう意味では、今



「回の戦法も悪いものではない」

「そうなの？」

『連携が取れずに足を引つ張り合うよりは、いつそそれぞれが独自に動いた方がやりやすい場合もあるだろう。とはいえ、結局のところ、こちらとあちらの各個の能力差で、こちらに天秤が傾いていたからこそ言えることだが。向こうのほうが優秀な状況で各個戦闘など、むしろ各個撃破されかねん』

「そういう意味では運が良かったってことなのかな。いやまあ、鎮守府近海でそんな強力な個体がポンポン出てこられても困るんだけどさ」

『そうだな。話を戻すが、データを見る限り、今回の戦闘では木曾が率先してホ級に当たりに行ったな？』

「え？ うん、そうだよ。俺に任せろって突っ込んで行った」

『そうか……では、あくまで一論ではあるが、真にホ級と当たるべきは木曾ではなく旗艦だった、と私は思う』

「その心は？ その場合、提督ならどういう指揮をするの？」

『そうだな、私ならまず、ホ級に対しては同じ軽巡である貴官を当てる。その際、貴官に徹底させるのは遅滞戦闘だ。無理に同格の相手を倒そうとせず、相手の攻撃を受け流し、いなすことに専念させて時間を稼ぐ。その間、木曾にはイ級の一体の急ぎ撃破を命令する。撃破後、今度は他のイ級との戦闘、すなわち響か電のどちらかの加勢に向かわせ、これを更に撃破。そして残ったもう一体も、今度は三隻がかりで倒す。最後に遅滞戦闘を行っていた貴官を援護し、四隻での全力攻撃をもって撃破すると、まあ私ならこういう指揮を執るだろうか』

「ふむふむ……」

「そういう手もあるのか、と北上は提督の話す戦術に頷く。提督自身は門外漢と言ったが、北上もまたそれほど戦術面で詳しいわけではないのだ。合っている、いないはともかく、他の考えを知ることには無駄ではないだろう。むしろ、前提自体は北上と同じものであることもあり、こちらの方が良さそうだなとすら北上には思えた。

『ホ級に木曾ではなく貴官を当てるのは、それぞれの性格的な問題だ。』

貴官が消極的と言うわけではないが、こと戦闘においては貴官よりも木曾の方が積極性は高いだろう。切り込み役や遊撃ならともかく、遅滞戦闘という戦い方は木曾と相性が良いとは考え難いものがある。少なくとも、現状では木曾の長所を潰しているだけになりかねん』

「その点、私なら出来るってことね。まあ確かに、能力自体は同等でも、精神的にガンガン行くななら、私よりも木曾の方が向いているかも。マイペースだからね、私は。のらりくらりとするのも、そう難しくはなさそうだ」

『マイペースと言うのは、協調性はどうかあれ、自分の軸はあるということだ。それはそれで、悪いことではあるまい。停滞的な行動もあえて取れるというのも、使い所を見極めれば有用と言えるしな』

「そうかなあ。まあ、そう言ってくれれば悪い気はしないけれど」

物は言いようだ、と思いつつも、北上は微笑を浮かべる。しかしそれをすぐに振り払い、結局の所、と頭につけて言う。

「悪くはないが、失敗したといえば失敗した、って感じなのかな、私の行動は。木曾が出ようとしたとき、私が交代していれば被害は出なかった可能性もある、か」

『でもあるまい。結果的に見れば、小破で済んだのだからな。交代していた場合でも被害が出た可能性は十分にあるし、ともすれば今以上のものとなっていた可能性すらあるのだからな。そもそも、失敗したと言うなら、それは私の方だろう』

「え？ 何で提督が失敗したってことになるのさ？」

再確認して落ち込みかけた拍子に述べられた提督の言葉に、北上の表情は後悔から驚愕に変わる。どういうことだろう、と首を傾げる北上に、提督は苦々しそうな口調で続ける。

『そもそも、私が艦娘の数を揃えてさえいけば、このような論をしなくいいからだ。六対四であれば、そもそももつと楽だったに違いないし、木曾も損傷を受けずに済んだ可能性が高い。そういう意味では、数を揃えるという最低限の戦略も全う出来ていない私にこそ非があるだろう。貴官らと朝食の場で人員不足を語った日から、既に数日と経っている。にも関わらずこの体たらくだ、責任を取るならまず私だ

な』

「それは……そりゃ、さっきの提督の論から言えばそうなんだろうけどさ。私としては、提督がそこで責任を感じる必要はないと思う。開発失敗もドロップなしも確率の問題だし、開発資材が回ってこないのは上の都合でしょ？ 結局は運みたいなものなんだから、提督がどうこうと気を病む必要はないと思うな」

自嘲するように言う提督に、北上は思わず否定の言葉を投げた。提督が努力を怠った末の人員不足なら、確かに提督の責任なのだろう。しかし、現状を導いたのは不運によるものだ。むしろ彼は自分の出来る範囲内で人員を増やし、さらにそれを最大限活用できるように動いている。鎮守府に艦娘を二人待機させているのも、予備戦力として活用や疲労抜きが目的であるはずだ。出来る事をやっているにも関わらず、それ以上を望むのはむしろやりすぎだとすら北上には思えた。「私が言うことでもないんだろうけど、ここはどっちも悪いでいいんじゃない？ 私は戦術で少しミスったし、提督は戦略でちよつと運が逃げた。それでいいじゃん」

『あまり、そういうなあなあな結論は好きではないんだが………ここは受け入れておこうか——ありがとう、北上』  
「へ……？」

提督から礼を言われた。しかも、この上なく純朴でシンプルな文言で。そのことは何故か酷く意外に思えて、北上は間抜けな声を漏らししてしまう。礼を言わぬ冷血漢、と思っていたわけでは当然ないのだが、常に冷静な態度を取っている提督が素直な感情を吐露してきた、というのが本当に意外であったのだ。

『なんだ？ 私が感謝を示すのはそんなに不思議か？』

「いや、何と言ったらいいのか、その……」

『まあいい。とにかく、悪かったと思うなら、次はないと貴官なりに頑張ればいい。私も、数日内にどうにか出来るようにしておく………では、帰還後、改めて報告を行うように。以上、通信を終了する』

その言葉と共に、再度提督との通信が途切れた。怒ったため、というわけではないのだろうが、切り際の会話が会話だっただけに、北上

は何とも微妙な表情を浮かべる。

「やつちやった……ってことはないんだろうけど、うーん………」

弱ったなあ、と北上は腕を組んで唸る。鎮守府に戻った時のことを考えると、どうにも困ったことになった、と思っただからである。無論、それは提督の反応という意味ではない。今までの言動と最後の応対を考えると、さして大きな反応を彼が見せることは無いだろう。内心はどうあれ、表立って非難されたり、逆糺されたりということはまらずあるまい。いや、最後にアドバイスじみた言葉を投げられた事を見るに、提督が本心から気にしていない可能性のほうが高いとも見れる。

だから、ここで問題なのは、北上の側の反応であるのだ。つまり、下手なことをしてしまった本人としては、相手とどうやって自然な会話を交わせばいいのかだろうかと考えてしまうのである。変な演技は不自然になるだろうし、かといって本心から気にしないと思えるほど北上の面の皮は厚くない。どうしたものか、と北上は小さく嘆息する。

「どうしたんだ、北上姉？」

「え？ ああ、うん、何でもないよ？」

悩む北上の雰囲気を感じ取ったのか、背後に続いていた木曾が不意に声をかけてきた。話すとむしろこじれそうだと判断し、北上は咄嗟に別の話題を口に出す。

「そういえば木曾、傷は大丈夫？ データ上は問題ないと言っても、実際はまた違うんじゃない？」

「ん？ ああ、まあちよつと痛むは痛むが、たいしたことはねえ。むしろまあ、割と満足しているな、今は」

「満足？」

「久々の戦闘だったってことだよ。天龍や叢雲には悪いが、久しぶりに暴れられてスカツとしたぜ。平和が一番だが、やっぱり俺らは艦娘だからかな。深海棲艦相手に戦うのはまあ、使命だとか本能みたいなものだから、それが満たされたって言うか」

「ああ、そういう」

確かに、と北上は木曾の言葉に同意する。程度の違いはあれ、似たような感覚を北上もまた抱いていたからだ。心の中にある闘争心か、闘争欲か、あるいはそれに類似した何か。それらが満たされ、自然な形で自身の中に納まっている。そういう感覚であった。

「まあ戦いというか、経験を積めるつてのは艦娘にとつて悪いことじゃないしねえ。戦えば錬度も上がるし、錬度が上がればそのうち改造も出来るからさらに強くなれる」

「それを段々と繰り返し返していけば、初期じゃ倒せないような相手も打ち倒せる、と。それがまあ、艦娘なりの成長つて奴になるのか」

「分かっていると思うけれど、だからと言って無茶は止めてよ？勝つても沈んじや意味ないんだからさ」

「分かっているつて。俺だつてむぎむぎ沈む気はねえよ——つて、今回小破した俺が言つても説得力は微妙か」

「小破した上でそう思っているならいいんじゃない。その場しのぎならともかく、木曾なりに反省した上での言葉ならさ」

「そうかな」

「そうだと思うよ。提督も木曾の積極性は評価しているみたいだし、長所を殺しすぎるのも駄目っしょ。木曾は木曾で、アンタらしく頑張ればいいさ」

「提督が……そうか。じゃあ、俺なりに頑張るとしようかね。決して沈まず、生還し、それでいて勝つ。提督の言葉を守りつつ、俺自身の満足も追及していくために」

そんな目標らしき言葉を、木曾は勝気な笑みと共に延べた。『提督』という言葉を出した途端の、前向きさに満ちた言葉と表情。どうやら彼女の中で、提督の存在は中々のウエイトを占めているらしい。まだ半月と経っていない程度の付き合いに反しての態度に、提督の人心把握力は侮れぬものがあると、北上は木曾の全てからそれを感じ取る。「……それは私も同じか」

ふと呟き、北上はその口角を僅かに上げる。木曾に対しての感想が、そのまま自身にも返つてくると気付いたからだ。でもなければ、わざわざ提督に助言を求めたり、その言葉で一喜一憂したり、その後

の対応で気を揉んだりするはずもない。どういう形であれ、北上もまた提督に心を掴まれかけているようであった。

「そうだね、うん。私も、私なりに頑張ろうっと。『提督』も言っていたしね」

まずは、旗艦として間違った判断を下さないように。当面の目標を胸に刻み、北上はその視線を改めて前方——その先にある鎮守府へと向ける。帰る場所を見据える彼女の横顔には、もはや提督への気まぐさは感じられず、ただ道を定めたことによる喜色のみがあった。

木曾は初めての対空戦闘を経験しました

「ぬう……」

目の前に広げられた書類を前に、木曾は唸り声を上げた。そのまま少しばかり書類を睨みつけた後、木曾は持っている筆記具で記入を始める。しかし、それもすぐに止まってしまい、また彼女は唸り声を上げる。

「アンタ、本当に遅筆ねえ。はい、お茶よ」

木曾の隣に湯飲みを置きながら、叢雲が呆れの混じった声で言う。その言葉に腹立たしいと思わないのは、叢雲の口調に嫌味や馬鹿にしたものはないのと、何より木曾自身がそれを認めているからだろう。「ああ、悪いな……どうにも、こういうのは苦手だ。どう書けばいいかはまあ分かるんだが、実際にそう書こうとすると……なあ？」

「いや、知らないけれど。そもそも苦手なら、大人しく休んでいればいいじゃないの。小破して天龍と交代したって状態なんだから、それが普通でしょ」

「いやあ、臙装はともかく、俺自身はすぐ出られる程度の傷だったからなあ。最初から待機ならともかく、元気なのに大人しくしているのは微妙に性に合わん」

右手で頬杖を付き、左手を叢雲に向けながら木曾は言う。実際、木曾自身もこういったことに慣れていないのは自覚しているのだ。ただ、むざむざと損傷を受けてしまったというのが、どうにも罰の悪いものを彼女に感じさせているのも事実である。別に提督は気にしていない——どころか、その程度の被害で良くやったと褒めている——のだが、まあそこは木曾の側の問題であった。

「天龍だって、待機なのに仕事を手伝っていたんだらう？ だったら交代ついでに引き継ぐのはおかしなことでもないと思うんだが、どうだ？」

「能力が十分ならね」

と、からかうような口調で叢雲が言う。ただ、誤解されたらまずいでも思ったのか。彼女はすぐに真剣な表情になってこうも続け

た。

「実際、アンタの事務能力はそれなりにはあるほうよ。確かに筆は遅いけど、その前提となる判断能力なんかは十分に高いし。やる気は十分にあるみたいだから、数をこなせばそのうち形になるんじゃないかしら」

「そうか？」

「アイツ——司令官の受け売りだけどね。まあ、私も似た見解だけど」  
「提督が？ だったら、俺も期待が持てるし、やる気も出るな」

うむうむ、と木曾は満足そうに頷く。単純だが、やはり提督から期待されていると思われているというのは悪くない。叢雲の意見であつても嬉しいのは嬉しいが、提督のならば尚更嬉しいと思えるのだから、中々どうして不思議なものである。

「そういうわけだから、上手く頑張りなさいな」

微笑を残し、叢雲は木曾から離れる。もう二つの湯飲みを載せた盆を手に、提督の元に向かう彼女の後姿を見ながら、木曾は渡された茶を啜る。

「……美味しい」

何となしに呟いた木曾の視界の中で、渡された湯飲みを手にする提督と、空になった盆を脇に挟みつつ、湯飲みを両手で抱えた叢雲が話を始める。木曾が座っている秘書艦用の机と、提督が座る机の距離はそう遠くない。艤装からの補助を受けられる以上、その気になれば聞き耳を立てることも可能であつたが、あえて木曾は眺めるだけに留めた。卑しい、というわけではないが、まあそういう事をわざわざする場でもないだろう、と思つたからである。それに、備え付けのパソコンを指しているところから、話題が出撃中の第一艦隊のことであろうとおおよそ見当が付いたのも、まあ理由といえれば理由だろう。

「ああいうところは、まさしく秘書艦って感じだな……」

真剣に話し合っているらしい二人——特に叢雲の方を見ながら、しみじみと木曾は呟く。さして力量が見られる場面でもないのだが、その光景の自然さというのが、木曾にそのような言葉を紡がせた。同時に、自身が目標とするものが中々遠いものであるのだということも実



感ずる。

これはあくまで木曾自身の見立てではあるが、彼女の事務能力は七号鎮守府において最も低い。叢雲は例外としても、電はやや処理が遅い分非常に丁寧であり、逆に響は集中力があるのか極めて仕事が速い。そんな駆逐艦三人と比較するとやや落ちるが、木曾と同じ軽巡の二人も、中々どうして悪くない。天龍は口でこそ向いていない、性に合わないと言うものの、実際には駆逐組にそんな色ない仕事ぶりを見せている。北上もまた天龍とは違った方向で気の無い素振りを見せるのだが、任された仕事に関してはきっちり仕上げるし、変にやりすぎないという意味では分を弁えていると言えなくもない。そして最も重要なのは、彼女らは誰一人として、目に見えるほどに遅筆では無いという点だ。事が書類仕事である以上、これはいっそ致命的なまでの差と言えるだろう。コンプレックスとまでは流石に言わないが、木曾の顔を難しくするには十分な要素であった。

「やっぱり練習するしかないよなあ」

やる事がやることである以上、結局は書き慣れるしかない。自らの結論のため息をつきつつ、いい加減仕事に戻ろうとした木曾であったのだが、

「——ッ、何だ!?!」

緊急を告げるブザーが、耳に飛び込んできた。何事か、と音源を探れば、どうやら提督のパソコンがそうであるらしい。通常の連絡を告げるものとは違うその動作に、木曾は思わず立ち上がる。

「艦隊に何かあったのか!?!」

「北上、何だ!!」

『提督、マジで緊急！　上空十時の方向から、敵艦載機群を確認した！』

「艦載機だど!?!」

パソコン越しに放たれた北上の焦りの声に、提督の顔色が変わる。初めて見る提督の焦り姿だが、それに驚く余裕は木曾にない。提督と同じ、あるいはそれ以上に焦りながら、木曾は叢雲と競う様にしてパソコンを覗き込む。

「どういうことだ、北上姉！ 艦載機つてことはつまり、近くに敵空母がいるのか!？」

「哨戒航路なんて鎮守府からろくに離れていないってのに、こんな近海に何で空母系の敵が湧くのよ!？」

『そんなのこっちが聞きたいよ！ どうして出てくるのさ!？』

海であれば、例え人類が完全に制海権を取った場所でも現れる可能性がある。そんな特性を深海棲艦が持っているのは事実だが、かといってあらゆる艦があらゆる場所に出現するというわけではない。陸からの距離や、制海権の度合いにより、出現する艦種や個体ごとの強さに制限のようなものがあるのだ。

例外はあるものの、基本的には陸に近いほど、あるいは人類側が制海権を有しているほど、出現する艦種は軽いものになる。本土近海なら弱めの水雷戦隊、大海深くなら強力な大型艦の群れ、という感じだ。これは厳密なルールとして確立しているものではなく、あくまで過去の例からの推測——つまりは経験則だったが、おおよそは正しいものだとされている。

にもかかわらず、鎮守府から極めて近い海域に艦載機——つまりは空母が出現したという。この場の全員と、おそらくは第一艦隊の面々が驚愕や焦燥を覚えるのも無理からぬ話であった。

『とにかく迎撃行動に移るけれど、提督、いいよね!？』

「当然だ！ 敵艦隊の姿は見えるか!？」

『現状じゃさっぱり！ 目を割きたいけれど余裕は無いよ!』

「分かった、ならば後退しつつ敵艦載機を全力で撃墜しろ！ 敵戦力が不明なんだ、勢い込んで突っ込むなよ!」

『了解!』

力強い返答の後、通信が一度切られる。パソコンに表示される情報から、第一艦隊が本格的に艦載機との戦闘に入った事を確認した木曾は、提督の方に手を置きながら口を開く。

「提督、四隻しかいない水雷戦隊じゃ空母の相手はキツイ。俺達も出た方がいいんじゃないか？ 俺の機装も、もう修理は終わっているはずだ」

「私も同意するわ。焼け石に水かもしれないけれど、待機組とはこういう時に動くもののはず。幸か不幸か戦場はここから遠くない、全力航行ならすぐにでも着けるわ」

「そうだな……後追いだが、叢雲、木曾を第一艦隊に編入する。データリンクへの接続はこちらでやる、二隻は皆の援護に向かえ！」

『了解!!』

敬礼をし、木曾と叢雲はその場から走り出す。状況が状況である以上、一刻も早く応援に向かわなければならぬ。ここから先は、一分一秒が重要だ。

「木曾！ 前に出来た天龍型の機銃に、汎用機銃が付いていたはずだ！ ついでに持って行け！」

「おう！」

「頼むぞ！」

提督の言葉に後ろ手を上げつつ、木曾はドアを蹴破らんばかりの勢いで執務室を出る。途中で叢雲と分かれつつ、その勢いのまま工廠へと駆け抜けたところで、木曾は開口一番に尋ねる。

「俺の機銃は？」

木曾の言葉に、妖精たちは奥の作業台を示した。そこには修理が完了したらしい木曾の機銃と、更には一度見た覚えのある、7.7mm機銃が置かれている。

「提督の指示か、ありがたい！」

妖精たちに敬礼しつつ、木曾は置かれたそれらに触れる。次の瞬間、機銃と機銃がその場から消失したかと思うと、今度は木曾の背後に現れた。艦娘の、機銃を自由に出し入れできるという特性を生かした、いわば早着替えであった。

「機銃も付いたな、よし！」

頷き、応援する妖精たちの声に腕を上げて応えながら、木曾はまた駆け出す。そのまま埠頭まで走ると、そこには先行していた叢雲が、自身の機銃のあちらこちらを確認していた。おそらくは木曾を待っている間、手持ち無沙汰を解消するためにやっていたのだろう。

「待たせた！」

「行くわよ！」

言葉もそこそこに、木曾と叢雲は海に飛び降りる。無事に着海した二人は、主機の出力を一気に上げ、最大戦速で海を駆け出す。暖機もなしに初手から全力運転というのは、運用面から見ればあまり褒められたことではないことだが、そんな事を気にしていられるほどの余裕も無い。今は一刻も早く、北上達と合流しなければならぬ。

『叢雲、木曾、聞こえるか？』

「提督！」

湾内を出ようかという頃合に、提督からの通信が入った。提督との直接的な通信が出来ているということは、少なくとも木曾と叢雲は何かの艦隊の所属として処理されている証拠だ。問題は、それが第一艦隊であるかということだが、それもすぐに判明する。提督の通信と同時に、第一艦隊の皆の現在情報が確認できるようになったからだ。

『第一艦隊への編入作業は完了したはずだが、データリンクはどうか？』

「それは大丈夫だが……あつちの状況は大丈夫じゃないっぼいな……！」

提督に答えつつ、木曾は眉根を寄せる。データリンクにより知りえた北上達の状況、それが思ったよりも不味い。

「現時点での敵艦載機数、目算にて三十超。どうにか十弱は落としたものの、既に天龍、北上姉が小破……あまりよろしくないな、これは」「とはいえ、空母の姿は未だ見受けられていない。補給がない艦載機なんて、一発落としたらそこまでのはず」

「だが撃墜に時間かけて後退が遅れたら、その空母も来るかも知れねえ。それに艦載機の爆弾、魚雷は一発当たりでも致命傷になる可能性は十分だ。特にそれが水雷戦隊なら尚更な」

どちらにしろ急がないといけないのだ、と木曾は心の内で呟く。七号鎮守府の面々は、未だに一度として対空戦闘を行ったことがない。全く経験のない上に、北上たちはたった四隻でそれを行なっているのだ。あまり考えたくないことだが、このままでは轟沈すら視野に入ってくるだろう。

だからこそ、一刻も早く合流し、艦載機の撃墜に全力を尽くす。そうしなければ、手負いのまま敵空母を含めた艦隊と当たる可能性も出てくるし、最悪鎮守府まで敵を誘引してしまうことにもなりかねない。それだけはどうしても避けなければならぬだろう。

「とにかく、さっさと合流だ。提督、そつちから北上姉達に状況の説明を頼めるか？ いきなり俺らが話しかけるより、元々話していた提督が話しかけたほうが、向こうも変な動揺はしないと思うんだが」

『そうだな、そうしよう。再三になるが、木曾、叢雲、頼むぞ』

「おう」

「ええ」

提督からの通信が切れる。それを境にというわけではないが、木曾は主機の出力をギリギリまで上げ、更に航行速度を増す。後々を考えるとやや怖いのが、今は多少の無茶は許容するべき時だと判断したからだ。そんな木曾の意図を、叢雲もまた察してくれたのだろう。さして何を言うでもなく、ただ同じように増速し、木曾に追従する。

「——見えた！」

出力を上げてから三十分ほどの後、木曾の目に北上達の姿と、そしてその周囲を飛ぶ異形の艦載機の数々が映り始めた。何も使わない裸眼だとまだぼやける距離だが、艀装からのアシストがあれば十分に見える距離。それはつまり、艦娘達にとってそれは、射程範囲内に入ったということの意味している。

「叢雲！」

「私はもう少し！ 先に撃ちなさい！」

「応よ！」

主砲を構え、北上たちの頭上辺りを目標として、木曾は発砲を開始する。狙いは敵艦載機だが、当てるつもりで撃っているかという点、正確にはそうとも言えない。どちらかと言えば、北上たちの頭上を取らせないための牽制や壁の形成。当たるに越した事はないが、主としては艦載機を爆撃ないし雷撃コースから外させる為の、防御を主とした砲撃である。

「木曾？！」

「援護に来たぞ、北上姉！」

砲撃に振り向いた北上に、木曾は不敵な笑みを浮かべて返す。しかしそれもすぐに引っ込め、木曾は真剣な表情で空への砲撃を続行する。無論、前進も止めていなかったのも、少しすれば射程距離に入った叢雲もまた、彼女の隣で発砲を開始する。

「落とすわよ！」

「——皆、全速で後退！ 一秒でも早く合流するよ！」

二人の増援の到着に、旗艦である北上が第一艦隊の面々に対し命令を発する。これを受けた艦隊が後退速度を上げたことで、木曾達の登場から時を置かずして、二人と四人による第一艦隊がようやく形成される。

「私と天龍を中心に輪形陣！ 足を止めてでもここで落とすよ！ 腹にまだ抱えている奴だけを狙って全力攻撃、開始！」

北上の指揮の下、第一艦隊の面々はすぐさま、小破している彼女と天龍を内部においた輪形陣を取る。対空戦闘に最も適しているときされるその陣形でもって、雲海の下を悠々と飛ぶ深海棲艦の艦載機達に対し、第一艦隊はその火砲を叩き込み始める。

「墜ちなさいー！」

「墜ちろー！」

特にその中でも、木曾と叢雲の砲撃は苛烈であった。初の対空戦闘であったが、援軍として気力や弾薬が充足しているというのもあり、二人は絶え間なく砲撃を放っていく。

「対空なら弾幕が……！」

更に木曾は装備された機銃を用い、主砲の連射と合わせることで、可能な限りの弾幕も展開させる。持って来た7.7mm機銃は同種装備の中でも性能は低い方だが、それでも絶え間なくばら撒くようにして放てば、それ相応に敵艦載機の動きに制限をかけられているようであった。

「電、打ち漏らしを頼むよ」

「はー！」

そして、木曾達に劣らず、響と電もまたその活躍を見せている。響

は弾幕としてではなく狙撃、つまり一機一機を確実に落とすようにして撃ち、電はそのサポートとして響自身を狙ってくる機体に砲撃し、雷撃や爆撃のコースに乗せないようにしている。複数の敵機の行動を妨げることは出来ないが、確実に数を減らす二人のコンビネーションは、自分達の錬度を考えれば、見事と言うより他にないように木曾には思われた。

「くそっ……い！」

「ちよつと、前に出ようなんて思わないですよ？ 小破とはいえやられてるんだからさ」

「分かっているよ！」

対して、というのは酷だろうが、先の四人と比べると北上と天龍の動きはやや鈍く見える。輪形陣の内側であることと、そもそも小破しているということが、二人に突っ込んだ動きをさせることを躊躇わせているようであった。ただこれは、安全策という面から見れば、決して間違った選択ではないだろう。下手に損傷を受けて火砲を失うようなことにもなれば、個人の安全は元より艦隊自体の無事に関わってくる。それでも、元来の性質からか、天龍には前に出ようとすると素振りもあつたが、その辺りを北上が冷静に止めていた為に、無謀な突撃は防がれているようであった。

とはいえ、あくまでそれは他の四人と比べて動いていないというで、北上たちも対空砲火を緩めるような真似はしていない。特に天龍は木曾と同じ機銃を装備しているということもあり、それで可能な限りの弾幕を張っている。ただ主砲での砲撃自体は響寄り——つまり一機を狙う狙撃タイプの運用をしており、そのちぐはぐさがどうも、彼女の砲撃に『苛烈』の装飾をつけるのを躊躇わせている。

「天龍、無理に狙わないでばら撒いていけ！ 対空装備を持っているのは俺たちだけなんだぞ！」

「ああ!? だから、分かっているっての！」

木曾の助言に対する天龍からの返答からは、明らかな苛立ちが混じっていた。無理も無い、と木曾は気を悪くするでもなく、天龍の態度を受け止める。木曾と天龍も、攻撃型の性質ということで似通って

いる。そのため、自分もまた同じ立場だったら苛立つだろう事が想像できたからだ。

しかし、だからといって、天龍の行動を全肯定できるかということ、そうでもない。木曾からしてみると、見るからに効率の悪い対応をしているのを見てしまうと、どうしてもそこを指摘し、最善をつくさなければという思いがあった。

あるいは戦場に出る前に、書類仕事のこととはいえ、努力を重ねようと思ったことが原因なのかもしれない。天龍が自身の役割を十全に果たしていない——果たせていないように見える、というのが、どうにも木曾の心に引っかけかりを感じさせた。

「だったらまずは——」

故に、木曾は天龍に対し、自分なりの助言を投げかけようとした。それで少しでも、この場の効率を上げようと判断したからだ。

「——避けて、木曾!!」

だが、それを妨げたのは、焦燥感に満ちた北上の声であった。何か、と思ったのも一瞬。その言葉の意味はすぐに分かった。いつの間にか、対空砲火を抜けた艦載機の一機が、木曾への爆撃コースに乗っている。天龍との問答に気をとられ、データリンクの確認と自身の索敵を怠っていたのだ。

「しまっ——」

回避する暇がない。そう判断した木曾は、思わず顔の前で両の手を交差させる。だが、そんな彼女の前に、割り込む影が一つあった。

「させるかよっ!!」

叫びと共に、天龍の身体に爆弾が激突した。衝撃と爆音が撒き散らされ、爆炎と水柱が彼女の周囲を包み込む。

「天龍!？」

当たり所によつては一撃で沈むのが、航空爆撃という種の攻撃だ。その上、既に天龍は小破していた。万全の状態で受けるのと比べれば、その可能性は更に高まる。まさか、と最悪の想像をめぐらす木曾であったが、水柱と爆炎が収まった時に在ったのは、沈みゆくものではなく、しっかりと二本の足で立つ天龍の姿であった。



「天龍、大丈夫か！」

「心配すんな！ この程度、どうってことねえ！」

木曾の呼びかけに対し、天龍は気丈に言い放つことで返す。そのことに一瞬安堵した木曾であったが、すぐにその表情が曇る。データリシクによつて共有されている情報から、天龍が中破、しかも限りなく大破に近い中破であるということを知ったからである。ここまですると、火力のみならず足回りにも不調が出ているはず。長期戦は天龍の身を汽船にさらすということは、容易に知れることであった。

「マズイ、北上姉！」

「分かっている！ 全艦、残った艦載機を全力で落として！ これ以上誰も直撃を食らっちゃ駄目だからね！」

二十機近くもあつた艦載機も、既に半数以上は落としている。残った機にしても爆弾や魚雷を放つたものばかりで、未だに腹に危険物を抱えているものは更にその半数ほど。それらを落としてしまえばと、北上の命令の下、木曾達は火炮を空に集中させる。完全に狙つて撃つとはいかず、空荷の機も落とすこととなつたが、十分ほどの対空戦闘を経て、どうにか攻撃手段を持つ艦載機はもはや、という状況にまで至ることに成功する。

すると、突如として敵艦載機の動きが変わつた。先ほどまでは攻撃の機を狙おうと、艦娘たちの周囲を旋回していたのであるが、それが踵を返したように通常哨戒範囲外、つまり元来た方向へと帰つていく。攻撃手段が無くなった以上、もはや長居は無用ということなだろう。あるいは空母に戻つて補給を済ませ、再度の航空攻撃を図るつもりなのかもしれない。どうするのか、と木曾が北上に対し無言の視線を送つたのだが、それに対し北上が反応するよりも早く、提督からの通信が入つた。

『第一艦隊、聞こえるか？』

「提督！ 大丈夫、聞こえるよ。どうにか艦載機を追い返せたいみたいなんだけど、この後はどうすればいいかな？」

『逃げてくれたならそれでいい。対空警戒を厳としつつ撤退しろ』

良い指示だ。少なくとも木曾にはそう思われたので、彼女は安堵し

つつ頷く。しかし、そんな提督の指示に対し食って掛かったものもいた。

「どういうことだよ、提督！ アイツらを追えば敵艦隊を発見できるんだぞ?！」

『不服か、天龍』

「ああ、不服だ！ どうしてみすみす敵を逃がさなけりやならないんだ!！」

無然とした表情で、天龍が通信先の提督に告げる。戦闘の経緯を踏まえれば彼女の不満も分からないでもないのだが、流石に無謀だろうと木曾には思われた。それはどうやら提督も同じだったようで、彼は常と変わらぬ冷静な調子のまま、しかしやや諭すような口調で言う。『敵戦力が不明な現状、追跡は許可出来ない。制空権も取れない水雷戦隊を出すには、不安要素が多すぎる』

「俺達はその航空機を落としたんだ！ 今ならあっちの補給が間に合うよりは早く攻撃できるかもしれないし、何よりこっちには『夜戦弾』だってある！ 懐に入りさえすれば空母だってやれる!！」

『落ち着け、天龍。不明とはいえ、敵艦隊が空母のみとは考えづらい。駆逐だけならともかく、戦艦でも混じっていようものならば、貴官らだけではどうしようもない。たとえ『夜戦弾』があろうとも、だ』

道理だな、と木曾にはそう思えたのだが、どうにも天龍には未だに納得が出来ないらしい。好戦的、というよりは自重が足りないなど、木曾は天龍の肩に手を置き、説得に加担することにする。

「冷静になれよ、天龍。こっちだってそれなりに油も弾も消耗しているんだ。今から追撃しても上々となるかどうか分からねえ。第一、お前は中破しているんだ。庇ってもらった俺が言うのもなんだが、当たり所が悪ければ今度こそ沈んじまうぞ」

「ふざけんな！ 俺は艦娘だ、戦うためにこの姿を得ているんだ！

だから死ぬまで戦わせろ!!」

「おい——」

流石に、これは言いすぎだ。若干の怒りを覚えつつ、天龍をたしなめようとした木曾であったのだが、

『——天龍!!』

通信越しから、提督の怒声が響き渡った。今までに聞いた事のない音量と迫力で放たれた提督の声に、思わず先ほどまでの怒りも忘れ、木曾は思わず直立する。これは彼女だけではなく、天龍も含めた他の艦娘たちも、呆気に取られた、あるいは気圧されたような表情を浮かべている。

『死ぬまで戦わせろだ?! 貴様、私の指示を忘れたか! 我が鎮守府は生還こそを是とすると、そう言っただろうが!!』

「だ、だが」

『それを実行しようとしないう貴様を、これ以上戦闘に出す気はない!! 貴様が死ぬのは勝手かもしれないが、他の者達を貴様の自己満足に付き合わせてたまるか!!』

「——っ!」

提督の言葉に、天龍は言葉を詰まらせる。提督の言葉がよほど響いたのか、彼女は意気消沈とした表情を浮かべ、その顔を力なく伏せる。

『北上!』

「えっ、あつ、はい!」

『その馬鹿を曳航してでも鎮守府まで引きずって来い! いいな、急いで帰還しろ!』

「りよ、了解!!」

『余計な事を考えず、絶対生きて帰って来い! 以上だ!』

その言葉を最後に、提督からの通信が切れる。その後、たつぷり十秒は挟んでから、ようやくといった素振りで叢雲が口を開く。

「帰還、しましょうか。命令だもの、ね」

「ああ、うん。そう、だね、命令だし……天龍も、いいよね?」

「……………ああ」

消え入りそうなほどに小さな声で、天龍は了承の返事を口にする。その姿を見て、一度、大きく頭をかいた後、木曾はため息と共に呟く。「こりゃ、後を引きそうだな」

だから、と木曾は言葉に出さずに続ける。先ほど天龍から受けた借りもある。どうにかやってみようと、木曾は問題解決の手段を考え始

めるのであった。

天龍は一つの納得を得ました

「ふう……」

ため息をつき、天龍は緩慢な動作で頭上を仰ぎ見る。立ち上がれば手も届く程に低く、強烈な圧迫感を押し付けてくるその天井に、彼女は再度ため息を漏らす。

「……思ったよりもきついな、これは」

だが、それも仕方のないことだろう。ぼやきつつも、しかしそういう納得が彼女の中にはあった。先の、提督の命令に対しての、理もななく、ただ感情にのみ依った不服従。それに対しての罰則として今の状態——たかだが三日程度の営倉入りというのは、幸運なのか、あるいは不幸なのか。

「まあ……どっちでもいいわな」

自答し、天龍は不真面目を示すかのように頬杖をつく。しかし、その一動作にすら、どうにも気力というものが感じられない。ここに入ってから、まだ一日程度しか経っていないが、彼女の心は大きな負担を受けていた。

無論それは、彼女の肉体系からくるものではない。元々、艦娘というのとは物理的な頑丈さとは別に、生存という意味での頑強さも備えている。だからたった一日身動きをとれないだとか、その程度のことであれば、さして精神的な影響を受けるといふことはないだろう。それでもなお、天龍が精神的に消耗しているのは、ここに入ることになった原因、つまりは提督からの反応に起因していた。

『天龍!!』

あの時、提督は怒声でもって、彼女の名前を強く叩きつけた。まさしく怒りに満ちたと分かる、感情的な呼びかけ。天龍の脳内に焼き付いていたそれは、彼女が物思いに耽る度に、一つの問いを押し付けてくる。

「分からねえよ、提督。俺には、アンタが分からねえ」

何故、提督はああも怒ったのだろうか。その疑問が、天龍の脳裏をかける。いや、まったく心当たりがないというわけではない。仮にも

兵器である艦娘が、上位者である提督の命令に反しようとしたのだ。そこに提督が怒りを覚える、というのは当然のことだろう。軍隊における、艦娘の立ち位置を考えれば、むしろそれ以外に答えはないはずである

だが、本当にそうであるのだろうか。そんな、自身の出した結論に反する問いが、彼女の心から消えようとしなない。果たして、自分たちの提督が、そういう性質を備えた人物であるのだろうか。それ以外に何か、提督が怒声を発し、天龍たちにああいう形で感情をぶつける何かが、どこかにあるのではないか。そんな考えがどうにも、天龍の中から抜けていかない。

しかし、いくら考えてみても、それを証明するものが天龍の中に浮かんでこない。だが皮肉なことに、そのことに関してだけは、天龍にも納得できる答えがあった。

「所詮、艦娘の俺には、人間の感情なんて分からないってことか」

かつての軍艦の分霊とでも呼ぶべき存在、それが艦娘だ。見かけや頭の中身がいくら近しかろうとも、所詮は別の存在であり、異なる精神構造をしている。元が人ではない彼女たちの感情など、結局は人の猿真似でしかない。それなりに長く人と触れ合った古参の艦娘ならともかく、まだ受肉したばかりの天龍には、そういう人間の心というのは、深く理解できているものではないらしい。

「はっ……まあ、『兵器』としてもミスったのは事実。だとすれば、現状に文句なんてつけようがねえわな。お前もそう思うだろう？」

皮肉な笑みを浮かべながら、天龍は扉の外に声をかける。艦装とリンクしていないとはいえ、さして騒音もないような独房だ。外にいる誰かの気配を感じ取ることは、そう難しいことではなかった。

「……いや、急になんだよ。いきなり同意を求められても、反応に困るんだが」

言いつつ、扉に備え付けられた監視用の窓を開けたのは、困惑した表情の木曾であった。彼女の反応に、それもそうかと苦笑しつつ、天龍は不思議そうな口調で尋ねる。

「それで、一体何の用だ？ 夕飯はとつくのとうに済ませたはずなん

だが」

「ちよいと借りを返しに、な」

ちやりん、と木曾の手の中で音が鳴る。何だ、と思いい、窓越しに目を細めた天龍であったが、すぐさまにその表情が変わる。

「おまつ、それ、ここの鍵じゃねえか!? どうした、それ!」

「頑張つてちよろまかした」

「ちよろまかしたつて、お前……」

軽く放たれた木曾の言葉に、天龍は思わず絶句する。その辺の鍵ならともかく、この手の施設の鍵は提督の管理下にあるはず。それを無断で拝借してくるなど、実行時のリスクもそうだが、後に発覚した場合には、天龍以上の厳罰に処されても文句は言えないだろう。どうしてそこまでと、天龍としては木曾の正気を疑わざるを得ない。

しかし、そんな彼女の困惑とは裏腹に、木曾は何でもないように独房の戸を開け、寝台に座ったままの天龍に手を伸ばしながら、努めて明るい口調で言う。

「なあ、天龍。ちよいと、夜の散歩に付き合う気はねえか?」

「……ちよつとだけな」

僅かに悩みつつも、天龍は木曾の手を取り、ゆっくりと立ち上がった。確かに混乱や不安はあるが、木曾に対する少しばかりの好奇心と、何より外の空気への飢えとでも言うべきものが、彼女の背を後押しした。

「よつし、じゃあさつきと行くぞ。万一にもばれたら面倒だからな」

「そうだな」

木曾の先導の元、天龍は地下にある独房から、月光が照らす地上に出る。独房は工廠の裏——海側とは逆の内地側にあるので、自然と一日ぶりの地上の景色はそっけない鎮守府の塀となる。つまらない光景だな、とふと足を止めて眺めた天龍であったが、彼女がそうしている間にも、木曾は変わらず足を止めず、どこかへと向かって歩き続けている。置いて行かれては面倒だと足を速め、木曾の隣に並んでから、今更ながらの問いを投げる。

「それで、何処まで行くんだよ」

「んー……まあ、着いてからのお楽しみみて奴だ」

「はあ？」

はぐらかされたことに天龍は眉をひそめたが、木曾はさして気にしたそぶりもなく、その足を止める様子もない。そのあつきりとした態度に、むしろ追及する気も無くなり、天龍もそのまま木曾に着いて歩く。立場を考えればいつそ堂々としすぎな移動であったのだが、今の七号鎮守府には夜間警邏を行うだけのマンパワーがない。センサーなど最低限の警備はしているのだが、それもどちらかと言えば侵入者対策であり、内部での人の動きまではフォロワーできていない。そのため、比較的堂々と動いても、誰かに見られる心配はないだろう。

さて、何処が目的地なのだろうか。候補をつらつらと考えていた天龍であったのだが、結果としてその予想は全て外れることになった。それほどまでに、ついに木曾が立ち止まった場所は、天龍にとって予想外に過ぎた。

「……おい、木曾。お前、何を考えているんだ？　ここは本館だぞ」

酔いが覚めた、とでも言うべきか。先ほどまではいつそ他人事のようにも見える態度であった天龍が、突如としてそれを一変させ、木曾の肩を力強く掴む。その態度から感じられるのは、確かな焦りだ。

これほどまでに天龍が焦るのは、他の鎮守府はともかくとして、七号鎮守府における本館というのが、鎮守府の執務の中心であると同時に、提督が普段の寝泊まりをする場所だからだ。非常時の指揮を迅速に行うため、本館の二階に執務室その他を、一階に提督の私室その他、という造りになっているのだ。

今はもう月も高い時間である。暇つぶしや個人的な見回りなど外に出ていない限り、提督は間違いなくこの建物内にいる。会う可能性が『ある』徘徊と、会う可能性が『高い』侵入。仮にも営倉入り中の天龍を連れて入るには、いくら何でも冗談が過ぎる話だ。

「安心しろ、お前の姿が見られるようなへまはしねえ」

しかし、どうやら木曾は本気であるらしい。肩を掴み、振り向かせたことで露になった木曾の目には、一片たりとも冗談の色は見受けられてない。その予想以上に真剣な様に、天龍もまたそれに近い表情



になる。

「ああ、もう、分かったよ。つたく、ここまで来たら賭け続けるしかねえか」

ガリガリと頭をかいて、木曾の肩から手を外す。こうなれば、木曾を信じてみるしかないだろう。これほど真面目な表情をしているのだ。最後まで信じてみるかと、そう天龍は判断した。

「……からのこれかよ」

かくして、本館に入ってから数分後。天龍はすっかり気の抜けた口調で、壁にもたれかかりながら呟いていた。口調に比例するように、その表情もすっかり真剣みがない。そんな天龍に対し、木曾が不思議そうに首を傾げる。

「どうした？」

「どうした、じゃねえよ。どうなのかと真面目に考えていたつてのに、それがこれじゃ力も抜けるわ」

「ふん、分かっているいな、天龍。これこそが今、最も有効的な手なんだぜ？」

「何処がだよ……」

「古今東西、腹を割って話すにはここって相場が決まっているじゃないか」

「そりゃ、同性ならそうだが」

馬鹿だろう、と木曾を見上げながら、天龍は呆れの感情を抱く。しかし、そんな彼女の反応など気にも留めるそぶりもなく、木曾は自信満々に口角を上げる。

「まあ、そういうわけだ。俺が話している間、ばれねえように隠れておけよ」

「へいへい」

気だるげに手を振る天龍の傍を通り、『糸纏わぬ姿』の木曾は硝子

戸を開ける。提督専用として認知されている浴場の、その更衣室から奥に対し、木曾はあつけらかんとした口調で声をかける。

「よう、提督！ 裸の付き合いをしに来たぜ！」

風呂場ということもあり、その声は浴場内で反響しているのが聞こえる。そして、二拍ほどを遅れて、常よりもさらに低い声が返ってきた。

「……何のつもりだ、木曾」

「何って、今言っただろう？」

「普通、それは同性間で行うものだ。異性で、なおかつ上司と部下の関係でやるものじゃない」

「人間と艦娘は、厳密でなくとも別種族だろ？ だから、そういうのはあんまり気にしなくていいんじゃないかと思うんだ。上司と部下の方はまあ……気にしないってことで」

ここまで言ったところで、木曾は後ろ手に戸を閉める音が響いた。その動作に呆れたか、あるいは諦めたのだろう。壁越しであるが——今の状況で誇るべきかは怪しいが——艦装由来の強化された聴力をもって、提督がため息をついたのが天龍には聞こえた。その調子から、嬉々として、というのでは勿論ないが、どうやら木曾の無茶苦茶な申し入れを受諾したように感じられた。

『しっかし、広いなあ。寮の大浴場とは流石に比べられてないが、それでも提督一人が使うには、って感じた』

『鎮守府に外部の人間が来た場合、宿泊等を含め、基本的にはこの本館が用いられることになるからな。その辺りの配慮の結果だ』

『なるほどな』

ガラス越し、壁越しということもあり、二人の声はぼやけ、遠くに聞こえてくる。それでも十分に内容がわかる程度には聞こえるのは、やはり艦装からの強化のおかげだ。しかし、その有用性を実感するのが盗聴とは。今の状況も踏まえて、どうにも締まらない話だと、天龍は壁に背を預けながら情けなく思う。

そんな天龍の哀愁など知る由もなく、浴場からは木曾の馴れ馴れしい言葉と、提督の諦めの混じった返答が聞こえてくる。それは内装が

どうの、かけ湯がどうの、というまあ浴場には合った会話である。恥じらいも何もあつたものじゃないな、と思うくらいに色気の会話だ。木曾も木曾だが、提督も提督でちよつと変だ。そんなことをつらつらと思う天龍を他所に、湯につかつたような音が更に聞こえた。木曾が浴槽に身を預けたのだろう、ということとは容易に推測できた。

『ふう……良い湯だな。これを独り占め出来るつてのは、提督がうらやましい限りだ。今はともかく、将来的には寮の大浴場も狭くなるだろうし』

『限界数まで達すれば、増築等も考えることになるだろうよ。まあ、当分は先の話だろうが』

『そんな簡単にできるのか?』

『かつてはともかく、今やこの国は妖精由来の超技術を保持するようになったからな。単純な建築くらいならそう手間はかからんそうだ。何と言つても軍施設だ、それなりに優先はされる』

『ははあ……ところで、提督』

『なんだ』

『ちよいと質問なんだが、今日は妙にフランクじゃないか? いつもと比べて、なんか言葉尻が軽いというか、硬い感じがないように聞こえるんだが』

ああ、と天龍は納得の声を僅かに漏らした。先ほどから僅かに違和感があると思つていたのだが、今しがた木曾が語つたそれが、その正体であると気づいたからだ。シチュエーションのわりに落ち着きすぎているからだとかと思つていたのだが、言われてみれば確かに、こちらの方が違和感の正体だと納得できる。

そんな二人の疑問に対し、提督は何でもないように軽く答える。

『ああ、そんなことか。そんなもん、単に今がオフだからだ。公務中ならともかく、こんなプライベートの場でまで『私』だの『貴官』だの言う気にはなれん。『俺』に『お前』で十分だ』

『はあん、なるほどなあ』

またも、木曾の言葉と天龍の思考が合致した。確かに、言われてみれば道理のことだ。良くも悪くも社会と関連がない艦娘と違い、提督

は人間として生活をしてきているのだ。今の地位も踏まえれば、そういう『演じ分け』というのも身につけていることはおかしいことではない。

『だから、気に入らんというならさっさと出ていけ。というかさつきと出る』

『はっ、むしろそっちの方がいい。肩肘張って語るよりや、気を抜いて喋る方が性に合うってもんだ』

数秒、沈黙が流れた。雰囲気から察するに、意図的に後半の言葉を無視したのだろう木曾に対し、提督が無言で圧をかけていたのだろう。だが、柳に風と言わんばかりに、木曾はそれを受け流したらしい。ややして、深いため息の後、提督が呆れたように言葉を投げた。

『……それで？ 結局のところ、なんでここに突っ込んできた？ 裸の付き合い、などとほざいていたが』

『んー……まあ、ちよいと話をしたいと思ってな』

『天龍関連か』

『勘がいいな、流石提督』

『他に話題もあるまい。大方、どうしてああも怒ったのか、とかそういうことだろう』

『そういうことになるな。ああもアンタが感情的になった、そのバツクホーン。それを教えちゃくれないか？』

ついに来たか、と天龍は知らず、その身を固くする。この話題になることは、少し前から予想は出来ていた。そうでなければ、わざわざ、木曾が自分を連れ出し、提督と話をしようなどとするはずがないからだ。

あの時、怒られたこと自体はまあ、さして気にしてもいない。冷静に考えればあれは、提督の方に理がある、あるいは天龍が無茶を言ったと分かるからだ。だから、天龍が気になっっているのは、ただの一点。その答えを知りたいと、天龍は息をひそめ、提督の次の言葉を待つ。『……まあ、今からざっと、十年ほど前、『俺』がまだガキだった頃の話になるか』

宣言の通り、提督の口からその一人称が発せられた。分かっていた

にもかかわらず、何故かその瞬間、天龍の肩が僅かに跳ねる。そのことに気づき、天龍は動いた肩を見ながら眉根を寄せる。短い付き合いにもかかわらず、普段とのギャップに過剰な反応をってしまったのだろうか。そんな解析をした天龍であったが、どうにもしつくり来るものもない。では、と考えようとしたところで、提督の言葉が更に紡がれたため、自然と天龍はそちらに意識を向けなおした。

『当時、世界は出現したばかりの深海棲艦に対し、どのような対策をするべきか模索している最中だった。海沿いであれば、何時何処にでも現れてもおかしくない、異形の怪物。そんな基本とすら言えないことすら、まだ分かっていなかった頃だ』

水滴が落ちる音すらしない、無音。その中で提督は静かに語り始めた。

『防人家は代々、海軍で身を立ってきた家だ。だからつてわけでもないだろうが、俺の家は海に近い場所にあつてな。その海でよく、俺は幼馴染と共に遊んでいた。まあ流石に、十年前になると、俺の方は幼馴染に付き合う形でしか行っていなかったんだが……とにかく、当時は深海棲艦の出現に伴って、念のために疎開でもするべきかという話が出てきていた。ちょうどその頃だったよ。その海に、深海棲艦どもが現れたのは』

一つ、大きな呼吸が挟まれた。過去を振り返ったことによる、何かしらの負担なのだろうか。提督が生んだその『間』に、天龍はふとそんな感想を抱く。

『あの日、滅多にならないサイレンが鳴り響き、初めての言葉をスピーカーは吐き出していた。深海棲艦という名称すらも、まだ一般には広まり切っていなかった頃だ。おそらくは軍から渡された原稿のままを読んでいるのだろうその放送に、周囲の大人たちは危機よりも困惑の方を感じていたようだったよ。どうするべきか、そんな雰囲気は辺りに満ちていく中、俺は海へと走った。勿論、興味本位だからじゃない。俺は親父から多少、深海棲艦についても話を聞いていたし、もし来たらさっさと逃げろとも言われていたからな』

『だったら、なんで自分から向かったんだ？』

『幼馴染さ。アイツは海が好きで、その日も海に行くと言っていた。だからもし、深海棲艦どもが海にいるのなら、アイツがその被害に遭うんじゃないか。だったら、助けなければいけない。咄嗟に俺は、そんなことを考え、実行に移した。ガキの無茶無謀だが、当時の俺は自分を客観視できるほど大人じゃあなかったのさ』

大きく、水音が響いた。湯船から手を上げたことによるものではないか。音の感じから、天龍はそのように推測した。そして——こちらは完全に勘だが——提督が髪をかき上げたか、顔を撫でるようにしたのではないか、とも思った。何かを考えこんだり、思い出したり、悩んだり——とにかく自分の内にあるものをどうにか外に出そうとしている時にする動作を、今やったのではないか。そんな想像が、天龍の中にあつた。

『それで、行ってみりやあそこには異形どもがいて、もう少しで上陸しようかってところまで近づいていた。砂浜には怯えている幼馴染がいて、どう見てもすぐに動ける様子じゃなかった』

『助けに行ったのか?』

『ああ。そうしなければ、と思ったからな。幼馴染のところまで行って、肩を貸して、どうにかこっち側に向かって歩き出したところで……俺たちは吹き飛ばされた。奴らの砲撃によるものだった、と気づいたのは後のことだったか』

『深海棲艦の砲撃を受けたのか? そりゃ、よく無事だったな』

『駆逐艦だったのと、直撃じゃなくて爆発の端っこに引かかった形だったからだろう。それでも、まあそこそこ身体は吹っ飛んだし、何より俺は足をやられた。不思議と、痛みはそれほど感じなかったか。幼馴染は大丈夫そうだったが、完全に気絶していた。まさしく、詰みの状態だった』

だが、今こうして、提督は生きている。だったら、一体どうやってその詰みをひっくり返したのだろう。そんな天龍の疑問に、提督は間髪入れずにその答えを口にした。

『そこに、『彼女』が現れた。海上を横合いから現れ、迫る駆逐艦どもを瞬く間に撃破し、海に沈めていった』

『艦娘……だが、提督の言う時分だと』

『ああ、その時期はまだ、艦娘の建造技術は存在していなかった。妖精は既に現れていたが、彼らとコミュニケーションを取れる存在——提督がまだいなかったからな。だからそこに現れたのは、妖精によって建造された艦娘じゃなく、その妖精たちを人類の前に連れてきた、最初の艦娘達の一人だったのさ』

『最初の……!?』ということは、『始まりの第一艦隊』の一人か!?!』

木曾が驚きの声を上げ、天龍も思わず目を見開く。この大戦における初期において、何処からともなく現れ、人類に深海棲艦の存在を伝えた六人の艦娘。彼女らの与えた影響と、後に続く多大な貢献から、『始まりの第一艦隊』と呼ばれるようになった、言わば全ての艦娘達の最先達。徹底した機密保持から、どの艦娘の同位体がそれであったのかも秘匿されている、ある意味では伝説上の存在とも言える者たち。

その一人と、提督が過去に会っていた。まさかの告白に、天龍はより一層耳をそばだて、一言一句聞き逃さないようにする。

『その『彼女』は、俺に声をかけてきた。大丈夫か、歩けるかと、そういうことだった。駄目だ、とそれを否定しようとして、俺は気が付いた。『彼女』の後方から、更なる深海棲艦たちの増援が来ていることに。一見した限りでも、二桁はいたのが分かったし、今にして思えば重巡や戦艦らしき姿もあった』

またも、一拍ほどの間が生まれ、そしてまた提督が話を続ける。

『俺は『彼女』に、背後の奴らについて叫んだ。俺の声を受けて、『彼女』は一度振り返った。長い沈黙の後、『彼女』はこちらに向き直った。ああ、駄目なんだなと、その表情から俺は察したよ』

提督から、嘲笑じみた呼吸音が漏れた。過去の自分の行いに対するものだろうと、天龍はそんな風を感じ取る。

『こつちの状態を察したんだろう、『彼女』は俺に逃げろとは言わなかった。だから俺から、幼馴染を連れて逃げてくれないかと頼んだ。一人くらいなら抱えて逃げられるだろうと、自分はいいかと必死で頼み込んだ。そうしたら、『彼女』は小さく首を振った。自分の役目は、多くの人を救うことだ。避難もできていない町の人々を救わなけ

ればならない。何より、一人を犠牲にして一人を救うことはできないと、そういうことを『彼女』は俺に告げた』

気づけば、提督の声からは力が失われていた。かすれるように、絞り出すように、提督は力なく言葉を紡ぐ。

『……そして、『彼女』は笑いながら言ったよ。生きる、と。私の分まで生き延びろ、と。私が助けたのだと、胸を張って言えるくらい立派に生きる、とそう言った。笑いながら、彼女は俺に背を向けた。必死に叫んだが、『彼女』はもう振り返ってくれなかった。背を向けたまま、『彼女』は勇敢に戦った。敵を撃って、撃って、撃っていった。攻撃を受け、大小様々な傷を負って、血反吐を吐きながら『彼女』は敵を沈めていった。そうして、戦って、戦って、戦って、最後の一隻となった相手と刺し違えるようにして——ついには、沈んだ』

そして、沈黙が訪れた。数秒以上が経っても、提督は口を開こうとしない。だからか、途中から黙っていた木曾が、ようやくと言葉を発する。

『それで……どう、なったんだ？』

『………気づいた時には、俺は軍の病院のベッドの上だった。そこには家族や幼馴染がいて、そして改めて、『彼女』が沈んだことを知らされた。町を守るために、俺たちを守るために、その場にいた深海棲艦の全てを屠り、立派に沈んだと。最後まで彼女は、己が職分を全うしたと、軍人としての父がそう語っていた』

また、自嘲じみた吐息が提督の口から洩れる。

『あれから、何度も考えた。あの時、俺たちがいなかったら、『彼女』は沈まなかったんじゃないかと。町を守る必要があるとはいえ、その時点で見える範囲に人はいなかったわけだから、守るために足を止めず、倒すために動き続けていれば『彼女』は自身を犠牲にする必要はなかったんじゃないかと』

今も考えていると、小さな声で付け加え、今度は妙に、不自然なほどに明るい口調で、提督はさらに続ける。

『ふざけた話だが、俺は『彼女』の姿を覚えていない。『彼女』の言葉も、戦いも、最期も、全て見たはずなのに、何故か『彼女』が誰だっ



たのかが分からない。現存する全ての艦娘の資料を見ても、これと同位体であったと言うことが出来ない。医者曰く、『彼女』が沈んだ姿を見たことによる精神的な負担から、自分を守るためにそうなったのだろうと言われた。まったく、何と情けないことかと俺は自分を見下したよ。命を懸けて守ってもらっておきながら、その恩人の姿を覚えていないなど、何とふざけた男かと』

だが、と提督は言う。

『同時に、こころも思った。俺は臆病者であるのだと。一つの命すらも背負えず、そのことを受け止められないのだと。そう自覚した瞬間、俺はとても怖くなった。また、誰かの命を俺が失わせるようなことがあった場合、俺は一体どういう反応を見せるのだろう。また、その人のことを忘れるのか。そんな不義理を、二度も行うのではないか。それは果たして、『彼女』が胸を張って誇れるような生き様であるのか。俺は自分を侮蔑しながら、そうならぬ方法を考えた』

一息を挟み、言葉が続く。

『俺は決めた。今度は俺が、誰かを救おうと。生きていけば『彼女』が救えただろう数まで、誰かの命を守ろうと。これ以上誰の命も背負わずに、誰かの命を守ろうと、そんな都合の良い決心をした。その決心と、家の事情も合わせ、俺は軍人になった。ただの一兵卒として、誰の命も預かる立場にない状態で、誰かの命を救う努力をしようと思つた。後に地位が上がったとしても、その頃にはまた違った決意が生まれているだろうと思っていた』

そこまで聞いて、天龍は眉をひそめた。今の提督の言葉と、現状での立場の差異。それを比べると、明らかにひっかかるものがある。提督も当然、その不可思議は理解しているようで、さして間を空けずその答えを口に出す。

『ただ、な。一体全体、どういうわけか。今の俺は艦娘たちを指揮する提督となつてしまった。まさしく前線で命を張っている者たちの、その命を預かる立場になつてしまった。その覚悟もなかったのに、突然にそうなつてしまった。ただでさえ『一つの命の可能性』で手いっぱいだって言うのに、下手を打てばまたそれが増えていくことになる。』

はつきりと言って、そんなのは嫌だ。また俺のせいで誰かが死ぬのなんて御免だし、その命を背負うなんてそれ以上に無理な話だ』

『……だから戦果よりも、生き残ることを優先させるようにした、つてわけか』

『そういうことだ。これ以上背負いたくないから、お前たちに誰も死なせないことにした。独りよがりな、俺の身勝手だ』

ようやく、分かった。あれほどまでに提督が、天龍に対して怒ったわけ。命令を違反したからでも、天龍の身を案じたからでもない。提督は、背負いたくなかったのだ。天龍という、一つの命を。そうだったのだと、不思議と、天龍は深く納得した。意外なほどに、奇妙なほどに、まるで真理か何かのように受け入れることが出来た。その理由は、天龍にも分からない。ただ、納得できたのだ。

『纏めれば『嫌だから嫌』で済む割には無駄に長くなったが……聞きたがっていた問いの答えには、これで十分か？』

『ああ……まあ、そうだな。確かに、十分っちゃ十分だと、思う』

言つて、木曾が沈黙する。提督から語られた、彼の過去の断片。それを受け入れ、飲み込むために、発信を抑えているのだろう。すぐさまにどうこうと言えるほど、木曾も、そして天龍も、語られたそれを受け止められるほどの『時間』をまだ生きていない。語った言葉を納得は出来ても、そこから正しく、そしてあちらに納得してもらえない感想を述べるのは、決して簡単なことではない。これはあくまで天龍の考えであったが、沈黙を保っていることを踏まえると、おそらく木曾もまたこれに近いことを考えているのだろう。

ただ、現時点において言えば、天龍と木曾には決定的に違う部分がある。天龍は自身の考えに依らず沈黙を選ばなければならないが、木曾の方は提督に対し何かしらの言葉を投げることが出来るということだ。であれば、木曾がこのまま何も言わずに終わらせるということはないだろう。彼女の行動力の強さは、天龍が今ここにいることが証明している。

『……すまなかった、提督』

やはり、というべきか。数分の沈黙の後、木曾が言葉を発し始めた。

『正直、もうちよい軽いもんだらうと俺は思っていた。提督になる上で決意したとか、死なせたくなからとか、それこそ俺たちが女だからだとか、そういう理由かもと勝手に解釈して、突撃してみちまった』  
『別に、構わん。さして隠しているわけでもなし、知っている者は知っている話だ。細かいところまですべてを話した、というわけでもないしな』

『それでも、こっちが押し掛けたことだ。だから、それに関しては謝罪する』

その上で、と木曾は言葉を選ぶようにしながら、ゆつくりと続ける。

『俺は、提督の考えを支持することにした。正直、全部を理解したってわけじゃないが、それでも提督の決意は伝わった、と思う。だから、それに俺も応える。それが俺の、『七号鎮守府の木曾』の決意だ。提督が生きることを望むなら、俺もまたそれを望もう。生きて救えと言うならば、全力でこれを実現させよう。それが、俺が決めた意思だ』

『……そうか』

段々と力が入っていき、最後には誇らしげな声で木曾が宣言し、それを提督が短く、しかしはつきりと受け入れた。場所にはそぐわぬほど真摯で、どうにもシニールに思えるシチュエーションであったが、不思議と天龍の心には嫉妬に近い感情がある。

確かに、傍から見れば滑稽ですらあるだろう。だがそれでも、格好いいと思えた。ただ聞き耳を立てているだけの自分が、どうしても哀れに思えた。隣で聞いた木曾は堂々と言えるのに対し、盗み聞きをした自分は、おそらくずっと何を言うこともできないだろう。だからこそその嫉妬に、天龍は自らに対し鼻を鳴らす。そして、そんな自分の方が滑稽だと、自嘲しながら口を開く。

「つたく、なっさけねえ。あんだけ重い話を聞いておいて、これとはね」

まったく情けないと、そんな言葉を口の中で転ばせる。そんな天龍の独白を余所に、がらりと雰囲気を変えた口調で、提督が言葉を発する。

『——さて、そろそろ、出る。いい加減、のぼせそうになってきた』

『あん？ 別にいいじゃねえか。重い話も終わったってことで、背中の一つでも流してやるつもりだったんだが』

『いらん、もう済ませた。さっさと出んど、俺が先に出るぞ。その場合、困るのはお前の……いや、お前たちの方だと思うが』  
「なっ!?」

明らかにこちらに向けてのものだろう提督の言葉に、思わず天龍は腰を浮かせかける。何故ばれたのか。いや、状況の唐突さを鑑みればばれてもおかしくないが、しかし……

そんな思考を巡りと同時に、無意識に視線を動かした天龍であったが、その目が脱衣所と廊下を繋ぐ扉を捉えたところで、ピタリとその動きが止まる。

「……あつ」

四つほど、目が合った。扉の隙間、そこから縦に重なるように、見覚えのある顔が並んでいる。見つかった、と言うような声を漏らした北上に、ゆつくりと顔を横に反らす叢雲。あわあわとしている電に、無表情にこちらを見つめてくる響。

居たのか、と呑気な感想を抱くと同時、なるほど、と納得の感情も沸く。鍵を失敬し、ここまで人に会わず、提督は風呂にいるという色々と都合のいい展開だと思っていたが、提督以外の全員が協力していたのならばそうもなるだろう。むしろ今まで、自分も覗かれていたにも関わらず、まったく気づかなかったというのもあれかもしれない。

「えつと……じゃあ、そういうことで」

代表というわけでもないだろうが、すまなそうに言いながら片手で礼をし、北上が静かに扉を閉める。その後、こそこそその場を離れる気配がしたことから、四人が逃走を選んだというのがすぐに分かった。

『……ま、まあ、あれだ。何のことか分からんが、提督がそう言うなら俺も上がるかな、うん』

そんな四人の気配を察したのか、やや白々しい口調と共に木曾が立ち上がる音が聞こえる。そのまま、ひたひたとこちらに向かって歩い

てきて、がらりと扉を開け、脱衣所に入ってきた。後ろ手に扉を閉め、僅かに空いた廊下の扉と、壁に背を預けて座っている天龍に視線をやった後、ふうと安堵の息を吐いた。

「いやあ、焦った焦った。提督も結構侮れねえな、良い勘しているじゃねえか。お前とあいつら、一体どつちに気づいたんだか」

「ただの鎌かけだったりかもただけだな。というか、あいつらも居るなら最初に言っておけよ」

「万一の事を考えると、あんまり情報共有していない方がいいと思っただよ。提督が気付かなきゃ黙っているつもりだったんだが、どうにも締まらねえな、こりゃ」

ぼやくように言いながら、木曾は服を身に着けていく。さつさと離れた方がいいというのが無言の了解であったので、天龍も合わせて立ち上がり、軽く背筋を伸ばす。

「とにかく、見逃してもらっている間にさつさとずらかるぞ。お前もこれ以上俺を突き合わせることはねえよな？」

「ないない、これで全部だ。予想以上に重い結果になったが、まあ概ね予定通りだな」

「予定通りねえ……」

「ああ、予定通りだ。これでお前も、今後は『死ぬまで』なんて言えねえだろ？」

「言えるか。あんなのを聞いてまだそんなことを言えるなら、そいつは人の形をしている資格がねえよ。艦娘でもそれは変わらねえ」

「なら、まあ無茶した甲斐もあつたか。これで借りは返したからな」

「あん？」

「なんでもねえよ」

何のことだ、と怪訝な表情を浮かべた天龍に、木曾は軽く笑い、背を向けて部屋を出ていく。思わず見送り、一秒ほど固まった天龍であつたが、

「……つたく、こんなのはっかかりか」

最後までこの調子かと頭をかき、天龍も木曾の後に続き、外を出る。

「だからこそ、明日からは考えねえとな」

提督が望む、提督に応えられる振る舞い。提督が納得できる、背負わないでくれる戦い。それを考え、そして実行すること。それこそが、七号鎮守府の天龍がすべきことなのだ。木曾に追いつくように夜の廊下を歩きつつ、天龍はそう心に決めるのであった。

## 七号鎮守府が最初の難敵と相対しました・前編

七号鎮守府、執務室。他に誰もいないその空間で、防人は面倒ごとを聞いたというような表情を浮かべ、呟く。

「……なるほど、百十五号鎮守府の」

『はい、討ち漏らしがあったようで。件の艦載機も、その艦隊の空母が放ったものである可能性が高いかと』

防人の言葉に対し、スピーカーから涼やかな女性の声が響く。それを発したのは、パソコンの画面の中に顔を見せる、下縁の眼鏡を軽く弄る一人の女性だ。長い黒髪とヘアバンド、眼鏡の向こうで瞬く青い瞳。大本営直属、特殊任務担当艦、大淀と呼ばれる艦娘である。

枕言葉が他の艦娘と異なるのは、彼女の出自や役割が特殊だからに他ならない。そもそもとして、軽巡艦娘としての『大淀』は存在している。通常の建造では出現せず、特殊な戦闘や海域でのみドロップ現象が起こる可能性がある、いわゆるレア艦というものになる。一方で、特殊任務担当艦とついている方の『彼女』は、大本営において建造が行われた艦娘である。ただし戦闘用の艤装は付随していないため、艦娘としての真価を発揮することはどうやっても出来ない。そこだけを切り取ればただの欠陥艦だが、わざわざ特殊任務担当艦などと区切っている以上、勿論利点も存在している。それが情報や事務処理能力に関して、専門の人間と比較してもなお、一線を画す性能を持っているというところだ。提督と艦娘の関係性から、下手に人間を入れられない鎮守府の組織構造にとって、それは非常に有益な能力であった。

結果、多数が大本営付きとして建造され——普通の鎮守府と違い、大本営では同種の艦娘も同時に所属できるようになって——個々の鎮守府との橋渡しを主任務とする、特殊任務担当艦として配属されるようになった。一隻辺りおおよそ五つ前後の鎮守府を担当し、それぞれと大本営の橋渡しを主任務としている形である。なお、同じく特殊任務担当艦として、明石、伊良湖、間宮が存在しており、元が工作艦である明石は資源管理と供給量の調整、給糧艦である伊良湖と

間宮は鎮守府の糧食を担当している。加えて、ドロップが起こりうる大淀と明石は現場での混乱を防ぐために大本営に身を置き、現時点においてドロップが確認されていない伊良湖と間宮は鎮守府に直接身を置くという形になっていた。

「具体的に、敵戦力に関しての情報等は伝わっていないのか？」

『真正面から戦って逃がした、というわけでもないですから……おそらく散発的に逃げた空母が現地で他の深海棲艦を麾下としたものではないかと思われれます。そちらから送られてきた敵艦載機のデータを見る限り、軽母又級ではないか、という解析はできていますが』

「断言はできない、と」

『はい。先の戦力がイコールとしての敵の全戦力とも限りませんので』

「そう、その通りだ……」

厄介なことだと、防人は眉根を寄せ、こめかみの辺りをさする。ただでさえ戦力不足の第七鎮守府に、規模不明の敵空母艦隊。不用意に打って出るには、あまりにも不安材料が多すぎる。

「……百十五号の方に応援を頼むことは不可能だろうか」

『申し訳ありません。その打診は既に行ったのですが、その討ち漏らしが出た戦闘からの立て直し等々があり、軽々には動けないと』

「戦力の再編が必要なほどの激戦だったのか？ 百十五号は百番台でも特に戦力があると聞いているが」

弱小鎮守府とはいえ、最寄りのはずの七号に情報が回ってこないのも、変と言えば変だ。そういうことも付け加えると、画面の中の大淀は困ったように眉を下げる。

『そこは私も疑問に思いましたが、上からはそうであるとしたか。個人的に、百十五号の担当をしている『大淀』にも聞いていましたが、彼女もさしたる情報は知っていないようでした。あの辺りにはまだ二百番台の鎮守府がなく、百十五号が防衛ライン化している現状に要因があるのやもしれません』

「下手について穴を空けたくない上の配慮、ということか。ブラック鎮守府ならいざ知らず、真つ当に護国の任を果たしているとなると



突っ込みにくい……」

「いかな、と防人はそこで言葉を切り、軽く頭を振って画面越しの大淀に向き直る。」

「互いに、今の会話はなかったことにしよう。私も貴官も、無駄に睨まれることになりかねん。好奇心にしろ、貴官が集めてくれた情報には感謝しているが、これ以上はあまり動かないほうがいいだろう」

『そうですね。では、なかったということ……話を戻しますが、今回の件に関して、防人提督はどのように動かれるつもりですか？』

「率直に言えば、こちら主導で討伐はしたくない。水雷戦隊がギリギリ一艦隊分しかない現状で、空母機動部隊を相手取るのは難しいからな。通常哨戒ライン沿いに探知ブイを巻き、範囲外からの侵入に警戒こそしているものの、可能ならば他の鎮守府に対処してもらいたい……歯に衣着せぬ物言いをするならば、他所に行ってほしい、となるか」

『建前はともかく、その意見そのものは正しいかと私も思います。再稼働したばかりで戦力も整っていない鎮守府が当たるには、流石に分の悪い。無理をすれば勝てないこともないでしょうが、よほど上手くやらないと犠牲も出るでしょう』

「……そうなれば、七号の安定稼働は更に遠のくことになる。戦力が十の時に一の犠牲が出るのと、百の時に出るのはその後の立て直しに大きく影響してくる。それは大本営としても望むところではない、と思われるが」

適度に言葉を飾りながら、防人はそれらしい理屈を吐く。単に艦娘を死なせたくない、と言っても通じはするが、こういう道筋にしておいた方が文面上の受けは良くなる。実際には本音の方も伝わることになるだろうが、結果として同じことが起こるにしても、率直に本音を示すのと、言葉の裏に真意を込めるのでは、相手に与える印象というのは異なってくる。そして、今回において良い印象となる——少なくとも悪い印象にはならない——のは、どちらかといえば後者だろう。やや馬鹿馬鹿しさすら感じられるが、面倒なウィークポイントを作らないように小細工をするのも、提督としてやったほうがいい仕事

であった。

『まあ、表立って言わないでしようが、そういうことになるでしょうね。分かりました、百十五号は難しいでしょうが、近隣の十三号、二十八号には情報を回しておきます。確約は出来ませんが、哨戒範囲を広げてもらえるように要請を試みます……そういえば、二十八号の提督とは同期でしたよね?』

「ああ、知己でもあるし、後で個人的にも要請を試みるつもりだ。まあ、私情で公務を蔑ろにするようなことにはならないようにするつもりだが」

『それがよろしいかと。それと、七号への開発資材等の支給の件ですが、一応の目途がつかしました。一艦隊分前後ほどを、一週間以内に支給出来そうです』

「ありがたい、それだけあれば一息つけるな。ダブリも考慮して空母を狙って建造したいところだが」

『索敵や防空と考えると確かにそれが妥当でしょうね、こちらで把握している限り七号の備蓄資材にも余裕はあるようですし。後は戦艦……は流石に重いでしょうから、重巡か軽巡を作って数を揃えるべきと、個人的には思います』

「同感だ。哨戒の範囲や密度を上げるためにも、まずは何よりも数だ。何せ数がないと、給糧艦すら回ってこない」

『あー……確かに、そうですね』

冗談めかし、しかし結構本気で放った愚痴に、大淀が困ったように眉を下げる。大本営所属の彼女からしてみても、この辺りの取り決めには疑問があったのだろう。まあ彼女にあたっての意味はないのだが。そう思い、フォローの言葉をかけようとした防人であったが、

「——ちいっ」

防人が口を動かすよりも早く、執務室——いや、鎮守府全体にけたたましい警報音が響いた。それを耳にし、忌々しそうに舌打ちをして、防人はパソコンのキーボードを叩き出す。

『防人提督、まさか!?』

「そのまさかだ。件の空母部隊がこちらに来ている……!」

画面内、焦りの表情を見せる大淀の隣に、探知ブイからの情報が表示される。映されたのは、七号鎮守府に接近中である深海棲艦群について。熱源や映像から自動解析された結果によると、襲来してきているのは一艦隊全六隻。内訳は軽母又級二隻、軽巡ホ級一隻、駆逐イ級三隻。その情報を一目見て、防人は施設内放送用のマイクを操作する。

「防人より七号鎮守府全艦娘に下令。全艦出撃準備完了を確認次第直ちに抜錨、鎮守府正面海域にて集合し、敵空母艦隊との戦闘態勢に入れ。詳細はデータリンクに参加した艦より順次伝達する。繰り返す、全艦は直ちに抜錨、敵空母艦隊との戦闘態勢に入れ」

言い切り、次いで防人は大淀に視線を戻す。

「今、情報をそちらにも回した。彼我の戦力差を考慮の上、周辺鎮守府への救援要請を依頼したい」

『了解しました、ご武運を！』

最後に敬礼を残し、大淀との通信が終了する。尽力を期待できる相手への答礼もままならぬことに苛立ちながら、防人は各機器の操作を続ける。

「分の悪い賭けを……」

やるしか、ないのか。心の中でそう吐き捨てながら、防人は状況打破のために思考を巡らせる。そんな中、ノックも確認もなしに、執務室のドアが荒々しく開かれた。

「……何をしている」

執務室に飛び込んだ叢雲を出迎えたのは、眉を顰めながら放たれた、提督の怪訝そうな声であった。それはあの放送を考えれば無理か

らぬ反応であり、逆に叢雲にとっては予想した通りのものでもある。故に、あえて言い訳を口にせず、ただ単純に、提督に向かって手を伸ばす。

「鍵を、ちょうだい」

何処の、とは言わない。理由も、言わない。提督であれば、これだけで察するはず。そういう確信があつての、叢雲の端的な行動を一瞥して、提督は軽く鼻を鳴らす。

「……いいだろう。戦力を遊ばせる余裕もないのは事実だ」

言いながら、提督は一つの鍵をこちらに放り投げる。左手でそれを受け、確認もせずに握りこむ。提督の言葉と行動が、その鍵の正体を如実に表しているからだ。叢雲の要求を察し、その通りしてくれる。ただ、それだけの話である。

「罰則は、功績と相殺する。だから、必ず生きて帰ってこい」  
「了解！」

右の手での敬礼を残し、すぐさまに叢雲はその場を駆け出す。扉を閉める手間も、階段を降りる手間すらも惜しみ、廊下に出てすぐの窓から身を投げる。たかだが二階、元より高性能な艦娘の肉体に、展開こそしていかないがリンクする艦装からのアシストもある。猫のように軽く着地し、そのまま工廠裏に向かって駆け出す。

途中、海へと走る木曾の姿があり、こちらを伺う素振りがあつたが、それをハンドサインで軽く流す。足を止めないこちらに、あちらも何かしらを察したのか、特に追ってくる気配はない。上司にしろ同僚にしろ、察しがいいのは極めてやりやすい。そんなことを思いつつ、叢雲は工廠裏の地下、独房がある空間に飛び込む。

「——おい、さっきの警報はなんだ！」

叢雲が口を開くよりも早く、独房の奥から声が放たれた。未だに営倉入りの処分を受けていた、天龍の声である。警報系統は問答無用で鎮守府全体に響き渡るようにしているが、通常の放送に関しては一部例外となっている場所もある。その一つが独房であり、故に提督からの簡易説明が聞こえていなかったのだろう。ただ、反応速度からすると緊急事態と身構えてはいたらしい。ならば十分と、叢雲は天龍のい

る独房に走り寄り、鍵を使いながら口を開く。

「例の空母が攻めてきたから、司令官からは全力出撃の命令が下った。だから貴女も戦力に数えることにした、以上」

「……その声は、叢雲か。状況は何となくわかったが、本当にいいのか？」

「許可は出たわ、この後の戦いで功績と引き換えだけど。出し惜しみしている暇はないってことで、納得しなさい」

言い切り、閉じられていた扉を開く。狭い独房、その中央で立つ天龍の右目は爛々と輝いている。やる気は十分と、そう無言で訴えている。そのことに、叢雲は不敵な笑みを浮かべる。

「行けるわね？」

「言われずとも。さっさと前座は片つけて、提督に俺たちの姿を見せつけるぞ」

上等。そう口に出し、天龍を従えながら叢雲は再び駆け出す。暗い地下を出て、海に向かって走り出したところで、叢雲は脳裏に微かなノイズ——通信開始の兆候を感じ取った。各艦の第一艦隊への編入作業が完了して、通信可能な状態となつたらしい。となれば、次は状況の説明と、対応のための詳しい指示か。そう考えながら、ようやくと海に飛び込んだ叢雲の脳裏に、予想した通りの声が響いた。

『——各艦、聞こえるか』

『これより、状況を説明する』

海上、一先ずと前進を続けながら——後続との距離を考え、速度はやや抑えている——電は提督からの通信に耳を傾ける。

『確認した敵戦力は一艦隊、軽母又級二隻、軽巡ホ級一隻、駆逐イ級三隻。貴官らにはこれの撃破ないし撃退を行ってもらおう』

『うへえ、がつつり空母機動部隊じゃん。水雷の私らじやちよつち厳しくない？ 正面からぶつかするには装備も練度も厳しいっしょ』

提督の指示に対し、電に先行して航行中の北上が、何とも嫌そうな口調で通信に参加する。口調はともかくとして、その意見そのものには電も賛成だ。先の対空戦の経験を鑑みるに、今の七号の第一艦隊では航空機攻撃を防ぐことは出来ても、その後、あるいは並行して行われるだろう空母護衛艦隊との砲撃戦で勝利することは難しい。真正面から戦ったとして、轟沈と引き換えの撃退を手にするのが精々ではないか、というのが電の予想であり、おそらくは他の艦娘たちの予想でもあるだろう。

『無論、戦力差は重々承知している。あまりやりたくはないが、多少策を弄するしかないだろう』

『具体的にはどうするんだ？』

次いで、木曾が通信に参加した。現実でもちようど、電の探知範囲内に進入する彼女の姿を感じ取る。

『各艦の航行状況を踏まえ、艦隊を二分する。北上、電、木曾の先行部隊が迂回しつつ敵艦隊後方より突入。敵航空隊、並びに砲火力を誘引する』

『その際に、私たちが敵を討つ、ということか』

『そうだ。これに伴い、各部隊の指揮は、先行部隊を北上、本命部隊並びに第一艦隊旗艦を叢雲とする』

『了解したわ』

『ごつちも了解。艦隊を二分して密度を減らすことが、上手く回つてくれればいいけど……』

『軍艦前の頃と比べりゃ小回り利くんだ、どうにか避けまくるしかねえな』

中々、厳しい作戦であった。上手くいけば相手の隙をつけるだろうが、下手をすれば先行部隊は壊滅するだろうし、どころか各個撃破に追い込まれ、本命部隊すら撃滅される恐れがある。真正面から戦っても勝機はないが、これはこれで分が悪すぎる賭けだろう。

とはなれば、他の案も探りたいところだ。

「全艦で奇襲を仕掛ける、というのは駄目なのですか？ 後方より突入するのであれば、あるいはそのようにするのもありだと思うのですが」

思い浮かんだ疑問を電が口に出す。それに答えたのは、姉妹艦である響だった。

『たぶん無理だね。敵は航空部隊、偵察機なりは飛ばしているはずさ。『目』の数と距離を考えると、遮蔽物のないこの海上で奇襲は厳しいと思う。霧が出ているとかならまだともかく、今日は晴天だしね』

『私も同意見だ。奇襲で強引に、というのは確かに望ましい手段だが、生憎と現状では不可能と判断した』

「なるほど、分かりました」

残念ながら、そう都合良くもいかないらしい。分かっただけのものの、改めて厳しい現状を確認して、電は心から嘆息する。

『とはいえ、やれる手は打つ。先行部隊だが、迂回時はあからさまに動け。敵の予想探知範囲内で、しかし砲撃の射程限界線を円状に、なぞる様にだ。しびれを切らした空母が航空機を出すように誘導する』

『相手が馬鹿をやってくれることを祈ることになるね』

『まあ、警戒して動かない場合は包囲陣に移行すればいいわ。タイミングを計る必要があるけれど、上手くやればむしろそっちの方がやれるでしょうし』

『航空攻撃と砲雷撃をそれぞれに向けたとして、どっちか片方ならまあ、強引に突破もできないことはねえだろ。二分した分、こっちはスカスカになるわけだからな。対空は落ちているからアレだが、あつちもあつちで撃てば当たるとはならねえ。いや、むしろ対空砲撃ガン無視して強引に肉薄した方がいいのか。博打なのは変わらないが、虎穴に入らずんば虎子を得ずで行くしかねえな』

北上、叢雲に次いで聞こえたのは、謹慎中であるはずの天龍の声だ。流石に戦力を遊ばせていられないと、提督がそのように判断したのだろう。声をかけようかと電は思ったが、すぐさまに考え直す。今はまだ、彼女と言葉を重ねる時じゃない。やるならば、この戦いが終わった後だ。そのくらいの願掛けは、まあやっておいてもいい場面だろ

う。代わりにと、電は別のことを口に出す。

「作戦は分かりましたが、司令官さん、友軍に救援を要請することは無理なのですか？」

『結論から言うとう無理だ。直近である十三号、二十八号、百十五号の各鎮守府にはそれぞれ救援依頼を出したが、反応が芳しくない。仮に動いてくれたとしても、敵と接触する方がはるかに早いだろう』

「……間に合わない、ということですか」

『遅延戦闘に徹して、つてのは駄目なの？』

『この状況で後手に回って、いつ来るかも分からない援軍を待ちたいか？』

『まあ、最低でも半分は沈むでしょうね。下手に足を止めれば、そこから一気に押しつぶされることになる』

北上の問いを、提督と叢雲がばつさりと切り捨てる。ただ、二人としても認めがたい予測であるのだろう。その声には苦々しさが多分に感じられる。

『結局、独力でどうにかするしかないってことか。そういうわけだが、提督、あの時使えなかったアレ、今回は使っていいんだよな？』

『アレ……『夜戦弾』のことか』

『夜戦弾』というのは、艦娘が所持している基本装備の一つである。特徴としては通常弾頭と同じように使用できるが、直接火力は一切なく、炸裂地点を中心に特殊な空間異常を発生させることが出来る。端的に言えば、その空間を『夜』に変えることが出来るのだ。

より詳しく説明するならば、範囲内の明度を夜間のそれと同じ度合いまで落とした上、艦娘や深海棲艦の探知能力、データリンクへの負荷、そして障壁の動作効率に支障をきたす特殊なジャミングを生じさせるのである。結界の発生による空間干渉という妖精由来の謎技術であるが、特殊な作用を持った煙幕を発生させる、と考えればいくらかは納得しやすいだろうか。まあ、重要なのは理屈よりもその能力だろう。敵の目を潰し、大きく肉薄した上で全火力を叩きこむ。そんな水雷戦隊の本懐を果たす上で欠かせない装備だ。

無論、デメリットもある。前述の通り、この『夜』の作用は艦娘の



側にも生じてしまう。よって、逆に深海棲艦から致命傷を受ける可能性もあるのだ。実際、敵も同種の装備を使用していることが判明しており、これが艦娘の一方的な切り札というわけではないのは確かなことだ。また、データリンクへの負荷から、『夜戦』中の艦娘と提督の間で通信に制限がかかることがあるというのも使用を制限されている理由だ。肝心な時に指揮官と通信が出来ない、というのは艦娘にとって——精神的なものも含め——厳しい状況になりえるからである。

故に、一般的にはどの鎮守府であっても艦娘の独自判断では使用できず、提督からの使用許可があつて初めて『夜戦』を行うことが出来るようになってきている。だからこそ、事前にそのことについて言及する必要があるのだ。

『状況が状況だ、提督の権限でもって、夜戦弾の使用許可を今から出す。各艦、必要と判断すれば躊躇わずに使用せよ』

『出来りゃ、奴さんが航空機を出す前に使いたいところだが』

『無理だろうな。こつちが近づくよりも向こうの発艦の方が早い』

『分かっているよ。言ってみただけだ』

背後で、木曾が肩をすくめていている気配が感じられた。同時に、電はやや意外そうに目を見開く。木曾と問答をしていた天龍の雰囲気か、思ったよりも落ち着いていたからだ。謹慎時の騒動を見ても分かる通り、彼女はかなり好戦的な部類に入る。だからこそ謹慎となったのだし、多少は落ち着くのも当然の話だろう。ただ、それが予想以上に効いている、という感があった。

原因はやはり、あの時の提督の話だろうか。だとすれば、それを聞いた自分もまた、何か変わったのだろうか。

「……それを考えるためにも」

今は、戦う。それが今、駆逐艦『電』がすべきことだ。普段の彼女には合わぬ、覚悟を決めた顔をしながら、先行する北上に追いつくように、電はさらに加速するのだった。

はたして、勝てるのだろうか。叢雲、天龍と肩を並べて航行しながら、響はふとそんな問いを自身に投げた。

気概はあれど、練度は低い。数は同数であるが、敵方には航空戦力がある。策はあれど、勝利の道筋は限りなく細い。客観的に見て、不利も不利も不利。

「……でも、負けられない」

「そうだな、負けられねえ」

独り言として呟いたはずのそれに、天龍が言葉を返した。データリソク上での通信は一時切っており、肉声でも別に聞かせる気はなかったのだが、どうやら彼女の耳には入ってしまったらしい。いや、戦闘前で各感覚を鋭敏化させていることを考えれば、むしろ当然のことだったか。

「天龍さんは、勝てると思う？」

流れとして、響は天龍に問いかける。賢い質問、とはいえないそれだが、そうしてしまう程度には、不安というものがあつた。あるいは、本来であれば、これは提督にすべき質問だったのかもしれない。だが、その提督は現状として通信を切っており——あちらの処理と、何より響達の邪魔をしないためということで、音声なしのデータのやり取りのみを行っている——そうでないにしても聞くのを躊躇われる問いかけだ。そう考えてみれば、独り言を天龍に聞かれたのはさして悪いことでもないだろう。

「さあな。勝てると思つて戦いはするし、勝ちに行くつもりはあるが、実際どうだか分からねえ。勝てると思つて勝てるなら、努力も策もありやしねえしな」

意外な、と思える答えだつた。天龍にしては冷静というか、一步引いた物言いに感じられる。だが、それも別におかしいことではないかもしれないと、すぐさまにそう考え直す。でもなければ、あの夜に木曾に頼まれ、あの企みを起こした甲斐がない。そのはずだと、響はあ

の時のことを思い出しながら頷く。

「そうだね……絶対に、勝たないと」

「……面倒な会話をしているわね、アンタ達。というか、響はまたズレた決心をして」

「え？」

妙なことを言われた、と響は発言者の叢雲に対して思う。彼女の言葉の意味が、響には些か理解できなかった。おかしなことを言った覚えはないのだが、とそういう態度を表に出すと、叢雲は呆れたように肩をすくめた。

「勝つ、つてのはそう、まあ大事なことよ。それが艦娘の存在意義だし、そうしなければ誰も守れない。ええ、それは確かにそう」

でもね、と叢雲は表情を一転し、極めて真剣な口調で続ける。

「でも、『勝利』の定義は様々よ。時間稼ぎでいいこともあれば、完全殲滅もある。意図的な自爆も時にはあるし、ともすれば客観的な敗北を求められることもあるかもしれない。勝利なんてものは、立場や状況であっけなく変わるものよ」

「何が言いたいんだ、叢雲」

「簡単なことよ。この鎮守府における、『敗北の定義』って、なに？」

「敗北の定義？ それは当然…………」

言葉が途切れる。それは、理解が出来たからだ。叢雲の言う、『敗北』の言葉の意味が。そうだ、自分たちにとっての敗北は、既に提督から聞いていたのではないか。そのことを、響は改めて思い出した。

「……ハッ、なるほどな。確かに、絶対勝つつてのはまあ、ちよいと正確じゃないか」

天龍もまた、同じ答えに至ったらしい。口角を上げ、楽しげな笑みを浮かべている。いや、それは響も同じであるらしい。こちらを見つめる叢雲の、彼女が浮かべる微笑みが、響の状態を示していた。

「そう、だから私たちは——」

その瞬間であった。

「——電探に感！ 航空機接近!!」

脳裏を鳴らす警報に、響は大空を見上げて叫ぶ。その表情を瞬時に

戦闘用に切り替え、艦装から送られる情報をデータリンクに回す。

「ちつ、こつちに飛ばしてきやがったか！」

「肉眼で確認したわ！ 数約四十、艦攻、艦爆複合部隊と推定！」

響と同じく、叢雲たちもまたスイッチを切り替えた。もはやここは戦闘前の——あるいは最期となりえるかもしれない——和気あいあいとした確認の場ではない。生と死をかけた、命がけの戦場となっていた。

「大体又級一隻分……どうなるかな、これは」

「後続の影はねえが、今のところ向こうにもそのそぶりはねえ。温存しているのか、単に舐めているのか」

「今はどうでもいいわ！ 全艦、最大戦速！ 対空攻撃をかいぐり、敵空母機動部隊に突撃する！」

「おう！」

「了解！」

旗艦の指示の元、三隻はこれまで以上の速度で海を走り、滑り行く。狙うは敵空母機動部隊。無謀で無理な作戦だが、だからこそ、今度こそ、響は叫ぶ。

「——絶対に生きて帰る！」

その思いを胸に、響は敵意が飛ぶその戦場に足を踏み入れた。

## 七号鎮守府が最初の難敵と相対しました・後編

いきなりしくじったか。本命部隊からの航空機発見の報に、北上は大きく顔をしかめる。未だに敵艦隊が探知範囲に入っていない状態での、本命部隊の会敵。元よりスムーズにいくとは思っていないが、この段階からズレるといのは些か幸先が悪い。僅かとはいえ、軽巡と駆逐の比率を踏まえるならこちらで囹を務めたかったのだが、そうそう上手くもいかないということか。

「状況は分かっているよね？ これより、私たちも敵艦隊に突撃するよー！」

『了解！』

揃う二人の声を背後に、北上は機関出力を最大まで上げる。提督から送られていた敵予想進路を基に、現時点での最短航路を策定。それをリンクに乗せつつ、北上は全速で海を駆ける。

「木曾、電は対空警戒。対水上警戒は私がやる」

「了解。空は快晴、飛んでくりやすすぐ見つかると思いたいが」

飛んでこないに越したことはない、と言いかけ、そうでもないかと北上は発声を止める。先行部隊に関してだけ見るならともかく、本命部隊のことも考えると必ずしもそうではないかと考え直したからだ。強いて言えば、どちらの方面にも飛ばさず格納庫の中で持て余していれくれればいい。もっとも、流石にそれは都合の良い願いだろうが。

「……やっぱり向こうは厳しいか」

絶えず更新されるデータリンクの情報を確認し、北上は大きく顔をしかめる。現状、本命部隊の方に轟沈は出ていない。だが、既に響が小破状態にはなっているらしい。まだ本隊と交戦状態にも入っていないのにこれとは、やはり航空戦力というのは重要な存在だと再確認させられる。

「だからこそ、こっちにも欲しいんだけど……それは生き残ってからの話か」

今はそちらに割くりソースはない。思考は今の状況を分析するこ

と、そしてそれを受けてどう対応するかにのみ割り振るべきだ。性に合う、合わないはあるが、やらないと生き残れないというならやるしかない。それが、初めに提督から提示された通りの、七号鎮守府の方針に通じる以上はなおさらだ。

——かくして、全力航行を続けること、しばし。

「敵艦隊発見！」

ついに見つけた。水平線を超え、ようやくと黒い六隻の艦の姿を捉えたのだ。事前情報通り、軽空母二隻と軽巡一隻、そして駆逐艦が三隻。陣形が単縦陣であることを見ると、こちらに航空戦力がないことを察しているのだろう。ただ、それで油断しているのか、上空や周囲に直掩の航空機の姿はない。まだ北上達の存在に気づいていない風であるのも、偵察を疎かにしている証と見るべきか。そういう意味では『馬鹿な敵』ということになるが、果たしてどうなのか。

「北上さん、指示を！」

「……考えていてもしょうがないか。全艦、最大線速を維持したまま突撃！ 射撃もせず、ただただ突っ込むよ！」

「了解だ！」

思考を切り替え、北上は突撃の命令を電たちに告げ、自身もそれを実行する。どうせ今ここで撃つても射程範囲外であるし、撃てばそれだけ足も鈍る。いまはただ、ひたすらに距離を詰める番だ。

「出来れば向こうと連携、挟撃したかったけど、微妙にこっちの方が早

——全艦警戒!!」

ある程度近づいたところで、敵艦隊に動きが見えた。僅かに動きが見えた後、空母一隻と駆逐二隻がこちらへと転進し始めている。

「散開！ 敵砲火を分散させる！」

北上の端的な指示を受け、先行部隊が三方に分かれる。航空機に対しては弱くなるが、砲雷撃に対するのであればこちらの方が幾らかマシだ。少なくとも、北上はそのように判断し、そのように動く。

「敵が発砲を開始したら各個にランダム回避運動！ 発砲準備をしつつ、可能な限り足は止めないで！」

こうなれば、どれだけ早く懐に飛び込めるかの勝負だ。仮に敵航空

機の発艦を許しても、あちらとの相対距離を詰めてしまえば、航空機は友軍への誤射誤爆について考えなくてはならなくなる。その為にも、今だけは足を止めるわけにはいかない。

「夜戦弾の間合いに入れば……！」

自身を鼓舞するように眩きながら駆ける。右に左にと不規則に動きながら迫れば、ついに深海棲艦からの砲火が飛んできた。撃つてきたのは回頭を終え、こちらに接近を始めた二隻の駆逐艦。だが、その砲撃は北上達から見ではるか前方に着弾する。相対速度もあつたのだらうが、そもそも駆逐の射程としてはまだ遠い距離だ。その辺りの理解が浅いか、単に焦つたのか。どちらとも判断できないために、どう対応するべきか悩ましい。思考や知識の有無、本能と理性のどちらで動いているかなど、深海棲艦のことは知られていないことが多いのだ。

「ハッ、どうやら奴らはバカの方みたいだな！ これならガンガン行けるぞー！」

小馬鹿にするように木曾が叫ぶ。それが侮りによるものではなく、自分たちの士気を上げるためだということはすぐに察せられた。であれば、叱責する必要もない。本気で調子に乗りすぎた場合だけ止めれば十分だらう。それが指揮官であり、姉である北上の役割だ。

「まもなく、夜戦弾の射程範囲に突入します！」

「全艦、夜戦弾装填！ 合図とともに一斉射！」

ようやく、先行部隊の面々はその砲を敵艦に向ける。駆逐二隻の砲精度は悪く、他の艦も些か動きが鈍く、まだこちらへの攻撃態勢が整っている様子ではない。本命部隊の方に集中しすぎたかと、敵の迂闊に感謝しつつ、北上はようやくその合図を出す。

「——全艦、夜戦弾発射!!」

北上の指示を受け、木曾はついに夜戦弾を発射した。空を切り裂きながら飛ぶそれはたちまちに敵艦隊の付近に着弾し、そこから木曾達までの海を瞬時に黒く染め上げる。空は闇に染まり、太陽の光がまるで月の明かりのように変じる。本当の夜と同程度に暗く、更には各種探知能力を鈍らせる『ここ』こそ、木曾達が長く待ち望んだ場所。生き残るために、勝利を手繰り寄せられる唯一の戦場。

「我、夜戦に突入す……!!」

勝利を願うために、提督にそれを誓うために、木曾はあえてデータリンクに乗せながらその言葉を口に出す。夜戦弾によって生じた空間の影響で、もはや敵艦の姿は見えなくなっている。それは僚艦に対しても同じであり、今はまだ距離が近いから互いに把握しているが、もう少し離れば見失うこともあるだろう。

「木曾、悪いけど先行して！ 私と電が後詰をする！」  
「了解だ！」

性に合った命令を下してくれたことに感謝しながら、木曾は速度を上げて暗い夜の海を駆ける。数秒前の位置と動き方から敵の未来位置を予想し、決して直線的にならないように動く。

一拍の後、発砲音が響く。木曾達ではなく、『夜』に引きずり込まれた深海棲艦達が放っているものだ。だが、明らかに着弾地点が遠い。これでは当たらない、むしろ敵の発砲炎がいい目印になってくれる。目の端に捉えたそれを受け、木曾は僅かに軌道を修正する。無論、仲間との二人と共有することも忘れない。

敵は何処だ。敵予想地点近くまで来たところで、木曾は眼帯で隠されない方の目を凝らす。はやる気持ちを発散させるように、鋭い視線を忙しなく動かし続ける。

「——そこか！」

撃ってきた二隻の駆逐イ級が、周辺を伺っているのを発見する。見る限り、まだこちらに気づいている感じはない。それを受け、位置情報を瞬時にデータリンクで共有。先手を取りに行くことを告げながら、主砲、並びに魚雷発射管をチェック。未だに被弾のないそれらは、



期待通りに正常であることを告げてくる。安堵し、さらに距離を詰めつつも、未だに敵艦の動きは鈍い。状況も、装備も、自信も、その全てが木曾の側に向いている。

ならば、

「沈め!!」

射程突入と同時に、魚雷を発射する。自分ですべてを片付ける必要がなく、敵は必ず落とさなければならぬ以上、出し惜しみはしない。そして、その上でさらに距離を詰める。周辺の警戒も忘れてはいない。駆逐艦は見つかったが、近くにいたはずの空母の姿はないのだ。残りの三隻も含め、逆に奇襲を返されるような真似はされたくない。

まっすぐに魚雷が走る。敵の動きは、やはり鈍い。警戒しているのかも怪しいほどに、魚雷や木曾に気づいた気配が全くない。これは、と木曾が声を上げそうになった時、爆発音と水柱が暗い夜を叩く。木曾の放った魚雷群が見事敵艦に命中したのだ。

「よしー!」

歓声を上げつつ、迂回して戦果を確認する。反撃が来るか、と警戒しつつであったが、水柱が収まった時、そこには何の姿も存在していなかった。轟沈、しかも一度に二隻も。十分すぎるほどに誇れる戦果が確定したことで、自分たちが勝利を手繰り寄せつつあることに、木曾は小さくガッツポーズをとる。

「この調子で一気に——っ!」

先のそれよりも大きな発砲音が、木曾の耳を叩いた。かなりの近くから聞こえたそれに、木曾の背筋が冷たいものが走る。半ば本能的な反応として速度を下げると、数メートルほど先に着弾の証が立った。もし減速が遅れていれば、それは木曾に直撃していたかもしれない。冷や汗と共に発砲音がした辺りを見れば、そこにはこちらに向かつて砲を構えながら移動する軽巡水級の姿があった。見つかったのか、とあるいはその瞬間に初めて理解し、木曾は弾けるようにその場を離れる。

再度の発砲音と、着弾の水柱。そのどれもが近く、上手い、と言って差し支えないだろう。どうやら先の駆逐艦よりは『やる』らしいと、

木曾は少しばかりの焦燥と、ほんのわずかな興奮を得る。

さて、どう対応するか。ホ級の砲撃を回避するように大きく、ランダムな回避運動を続けながら、木曾は次の選択を思案する。魚雷はもうないが、砲弾は十分にある。問題はあちらに先手を取られ、それに対してまだ完全には立ち直れていないことだろう。おかげで、移動先やらを冷静に考える余裕もなく、ただ高速で海を駆けているだけだ。もう少しペースを取り戻さなければ、砲撃を開始したところで当たる気がしない。であれば一度、本格的に距離を取るべきか。あるいは、あえて距離を詰めるか。果たして、どちらが正解か。

木曾の思考が、僅かに揺れる。その隙をホ級は見逃さない。木曾が上手いと評した通りに、的確な砲撃が木曾を狙い、放たれる。

「しまっ——!?!」

直撃コース。避けられぬと悟った木曾は、眼前に半透明な光の壁——障壁を展開する。ある種のエネルギーフィールドであるそれは、艦娘にとって最大の防御だ。かつての軍艦の主砲と同格の威力を発するのが艦娘の主砲であるならば、障壁はかつての軍艦の装甲そのものにあたる。これが、生身の肉体を持つ艦娘たちが、戦火にその身をさらすことが出来る最大の防御装置であるのだ。

この、同じ軽巡にカテゴライズされる艦同士の攻防は、ホ級の側に軍配が上がった。一瞬の均衡を経た後、障壁が砕け、爆炎が木曾を飲み込む。

「——ちっ！　これくらい!!」

生じた爆炎を突き破り、傷ついた身体を木曾が見せる。自己診断の結果、判定は中破。軽巡からの攻撃と考えれば重いが、『夜戦』においては障壁の利が悪くなるということ踏まえれば、これでも幸運な方だ。一度の直撃が大破以上になりかねない、というのは先のイ級達の末路を見れば理解もできよう。魚雷と主砲という差はあるが、『夜戦』ではリスクが跳ねあがるというのはどちらにしても変わらない。たった一つのミスですら、『夜戦』においては致命傷となりえるのだ。

「っ、のっ！　調子に乗りやがって！」

一息つく暇もなく、ホ級からの追撃を回避しながら木曾が吐き捨て

る。中破する前よりも苛烈になったホ級の砲撃は、命中精度こそ悪いものの、連射速度が明らかに上がっている。至近弾でも落とせる、と判断し、とにかく撃つことを選んだのだろう。万全の状態ならともかく、今の木曾にはかなり危ない攻撃パターンだ。ただでさえ損傷から機動力が落ちてしまっているのに、こうも広範囲にばらまかれる攻撃をされては、冗談ではなく轟沈が見えてきてしまう。

「北上姉たちはまだかよ……」

夜戦弾の影響と艦装への損傷が相まって、データリンクの調子が悪い。そのため、北上達の現在位置や状況がようと知れない。こちらの状況だけでも送れていればいいが、もしそうでなければ、あるのは一つの可能性だけ。

「……流石に、ヤバいか」

初めて、木曾の口から弱気な言葉が漏れる。冷静に判断した結果ではなく、ただ悪い方に考えただけの呟き。自然と視線が落ちかける中、ホ級は揚々とこちらへの距離を詰めてくる。

その姿が、急にひん曲がった。突然のことに、木曾の表情が固まる。ホ級の側面に何かが高速で激突したのだと、とようやく理解した時、木曾の耳を力強い声が叩く。

『援軍登場、つてな！』

その声を、その正体に、自然と木曾の頬が上がる。落ちかけていた気力が戻り、自然と歓声じみた言葉が漏れた。

「つたく、良いタイミングだな——天龍！」

「たりめえだ！ 何せ俺は、天龍様なんだからよ！」

意気揚々と木曾へ返しながら、天龍は全速でホ級へと迫る。よほど混乱しているのか、ホ級の動きは随分と鈍い。その隙に接近し、あち

らに対応するよりも早く、その身体を蹴り上げる。同時に引き抜くのは、先ほど思い切り投げつけた、天龍の艦装の一つでもある刀。砲撃戦においては使われないが、しかしてただの飾りではなく、れっきとした艦娘の——深海棲艦に対する装備。それを構え直し、体勢を崩したホ級に振り下ろす。

「これで——仕舞いだ！」

勢いのままに放たれた一閃は、展開された障壁と共にホ級を切り捨てた。袈裟切りの状態となったホ級はぴたりと動きを止め、残心を取る天龍の前でゆつくりと沈んでいく。それを見届けて、ようやく天龍は安堵の息を吐きだす。

「やれやれ、どうにかなったか……木曾、大丈夫か？」

「一応な。ガチで助かった、礼を言う」

「おう、まあ偶然近くにいるって分かったから、とりあえず近づいてみたっただけなんだけどな。駆逐を沈めたことを称えるつもりが、軽巡と戦いだしたからどうするかってなって、ついには中破したもんだから、これはまずいと急いだわけだ。完全に探索要員化するつもりだったのに、まさかお前を助けることになるとはなあ」

やれやれ、と肩をすくめると、木曾が苦笑するように口角を歪める。しかし、その表情もすぐに切り替わり、呆れが混じったものとなった。

「しかしまあ、艦装の刀を投げるとか、よく当てたもんだ」

「出来っかな、と思ったら案外出来た。まあ当たんなくても距離は空けられるだろうし、それはそれで良かったからな」

「適当な……つうか、砲撃しろよ。そういうことも選択肢にはあるとはいえ、仮にも艦娘だぞ、俺たちは」

「空襲で主砲が死んだんだよ。魚雷も誘爆しそうで捨てる羽目になったし、やむを得ずって奴だ」

強行軍のツケ、という奴だろうか。幸いにも身体や主機等には何もないのだが、武装系統だけがピンポイントでやられてしまったのだ。そのため、総合評価的には小破なのだが、攻撃面に関しては中破どころか大破も同然の状態である。そういう事情があったため、わざわざ文字通りの近接戦闘しか選択肢がなかったのだ。

そこまで言ったところで思い出し、天龍はポンと手を叩く。

「ああ、そうだ。お前、データリンク使えているか？　北上とか電とかが今、結構な頻度で通信要求出しているんだが」

「いや、受信の方はたぶん駄目になっていると思う。発信は出来ているよな？」

「全部かは分からねえが、少なくとも現在位置と状況は送れているな。だからこそ俺も駆けつけられたわけだし。ああ、お前の無事はひとまず載せておいたから、そこは安心していいぜ」

「そりゃ助かる」

ついでに、北上が少しばかり怒っている、とも伝えようかと思ったものの、僅かに考えてそれを止める。北上達が木曾と合流できなかった理由が、木曾の回避運動がごとごとく二人から距離を取る動きだったためであり、そのせいで合流が出来なかったのだ、ということも併せて伝えるのが面倒だったからだ。余裕がなかったのは分かるが、離れながら現在位置を送られても受ける側の気が急ぐだけ、という北上の怒りも理解できるので、そう思った本人が説教をするのが筋だろうという判断だった。

「それで、他の皆は？　砲雷撃能力のないお前が単艦で、ってところを見るに、リスク覚悟で索敵しているみたいだが」

「とりあえず全員無事だ。お前が一番やられているって言えば、全体の被害は分かるな？」

「沈んだ奴はいないってことだな」

そう言つて、ホツとした素振りを木曾が見せる。自分のことが済めば、次に気になるのは仲間の無事だ。ただでさえ危ない橋を渡っていたのだから、無事が分かった時の喜びのひとしおであったことだろう。

「あと戦況の方だが、本命部隊で空母一隻と駆逐一隻を沈めた。ちようちよどこがちが夜戦範囲内に入ると向こうが出てくるのがかち合つて、遭遇戦みたいな形になったところを咄嗟に叢雲と響が魚雷で、という形だな」

「となると、後は空母一隻か。なるほど、夜戦弾の影響が切れる前に撃

沈させるために、単艦での索敵を選んだと」

「そういうことだ。『夜』の中に入つてすぐにお前の戦果が分かったからな。残りは空母と軽巡のみとなれば、まあ散開して探して呼んだ方が早いだろうと叢雲が判断したのさ」

そう天龍が告げれば、木曾は満足げに頷いた。最初は博打だと思つていた作戦が、結果としてはこれほどの戦果を上げることになった。何より、誰一人として沈んでいない。まだ、と付けなければならぬのが懸念ではあるが、大局としてはもう勝つたと見ていい状況だろう。あと少しで終わる、と前向きな意味で捉えることが出来るのは非常によろしいことであつた。

ここで、データリンクに新しい情報が載つた。動きがあつたか、と内容を一瞥する。

「……おお、マジか！」

思わず、天龍の口から興奮の声が漏れる。そのことに怪訝そうな表情を浮かべた木曾に対し、天龍はその内容を告げる。

「やったぞ、木曾！ 叢雲たちが残つた軽空母の撃沈に成功した！」

「本当か!? ということは」

「ああ、勝つたぞ！ 誰も沈まず、深海棲艦どもを倒したんだ！」

天龍の勝利宣言と同時に、周囲が一気に明るさを取り戻す。夜戦弾の効力が切れ、本来の昼へと戻つたのだ。空に輝き光る太陽を、眩しさを感じながら思わず見上げると、天龍の顔にわずかに影がさした。傍らに立つ木曾が、右手を軽く上げている。何だ、と一瞬だけ考えたが、すぐにその行動の意味を理解し、同じように右手を上げる。

「よっしゃあ！」

「ははっ！」

互いに笑いあい、快音と共にハイタッチを交わす。木曾越しに海を見れば、こちらに向かつてくる叢雲たちの姿も見える。細かく位置確認をしていなかったが、案外と近かつたらしい。皆のことを木曾に伝えてから、天龍は再び青空を見上げる。

「生き残つたぜ、提督」

万感の思いを乗せて、天龍はそう呟いた。

「……全艦健在、か」

たった一人の執務室で、パソコンの画面を見ながら防人はポツリと眩く。その声は不思議と平坦で、その目は妙に虚ろにも見える。

「敵空母機動部隊を、水雷戦隊でもって全艦を撃沈。上々、まさしく上々な戦果……………」

そこまでを口にしたところで、防人はキーボードを叩き始める。あつという間に、主に大淀に対しての結果報告を纏め上げ、送ろうとしたところでその手を止める。数秒の静寂を挟み、またキーボードを叩く。文末に付け加えた、少しの間連絡を控えてほしい、というような内容の文言をしばし確認し、改めて送る。そして、パソコンの通信機能を切った。

「上手く行ったもんだな、本当に」

きしむ音が聞こえるほど深く、椅子にその身体を預ける。ぼんやりと天井を見やり、また眩く。

「何人、救えたかな？」

当然、返答はない。防人自身、誰かに答えてほしかったわけではない。強いて言えば、自分に問いかけただけだ。

『彼女』が救えるはずだった命、俺を救ったことで救えなくなった命。その数には、まだ足りない——足りるはずが、ない」

段々と、言葉が熱を帯びていく。

「だから救う。もつとも、もつと、もつと多くの命を」

目に、狂気が映る。一人だからこそ、誰に指摘されることもなく、防人の言葉は止まらない。

「もつとだ。誰も死なせず、もつと、もつと多くの——」

カチャリ、と小さな音が鳴り響いた。それに、防人の言葉が止まる。

無意識に動かした防人の手が、机に立てかけていた軍刀を揺らしたようだった。ゆつくりと視線を軍刀に向け、しばしそれを眺めた後、防人は小さく頭を振る。

「勝利に酔いすぎた、か」

そう呟いた時の防人に、狂気や興奮は感じられない。いつしか常の、提督としての彼の雰囲気に戻っている。

ゆつくりと、防人が立ち上がる。傍らの制帽を被り直し、立てかけた軍刀を腰に佩く。軽く身だしなみを整えた後、防人はあえて音を立てて歩き、執務室のドアに手をかける。

「……どんな言葉をかけるか、悩みどころだな」

何処となく優しげな口調で呟きながら、第一艦隊の出迎えの為に、防人は執務室を後にした。



## 閑話 提督談義・一杯目

「——すまん、待たせたか？」

『おう、防人。お前が最後は珍しいな』

『といっても予定よりも早いけどね』

『そも、仁科君は人のことを揶揄できないでしょうに。前科何犯なのよ、貴方』

『うつせえ。俺が遅れるのは方向音痴だからであつて、こういうネット通話なら問題ないんだよ』

『どっちにしても褒められないと思うよ、それ。まあいいからさ、いい加減乾杯しようよ』

『だったら防人君に音頭を取ってもらいましようよ。実害はないけど遅れてきたお詫び、つてことで』

『まあ、そのくらいなら。では、提督として無事着任し、始まりから躓かずに済んだ我らに——乾杯』

『乾杯!!』

『……しかしまあ、本当に躓かなくて良かったね。特に防人君は』

『水雷で空母機動部隊と戦ったんですって？ 本当、練度も低いうちから大変だったわね』

『ずいぶん話が早いな』

『俺がちよいと話したからな。あの時は援護できなくて悪かった。ちようどごつちも逆側に部隊を出していたもんで、どうやってもそつちに間に合わせられなかった』

『気にするな。どつちも駆け出しなんだ、戦力がない以上どうしても対応は遅れる。俺だって、逆の立場なら手助けできたか分からんしな』

『そう言ってもらえると助かる。借り一つ、としておくぜ』

「覚えていたらどこかで返してもらおうかね」  
『忘れていなくてもあんまり使わなそうだけどねえ、防人君の場合』  
『ああ、それはちよつと納得ね。防人君と二宮君は意識しなさそう。逆に仁科君や私とかはどうでもいいところでパツと使うでしょうね』  
『俺への風評被害、つて言おうかと思つたら自分も巻き込みやがった』  
「そういうキャラだからな、清水は」  
『さっぱりしているのはいいこと、なのかなあ？』  
『それがチャームポイントだから』  
『よく言うぜ……』

『相変わらずペースが速いな、お前ら。パカパカ飲みやがって』  
『各個準備で良かったね。もし割り勘だつたら財布直撃だつたよ』  
「自分の分くらい自分で払うぞ、俺は」  
『私はたかるけど。その分肴はあんまり食べないし』  
『大体は酒の方が高いわ。特に清水は高いのを飲みやがるし、安酒でも気にしない防人を見習えや』  
「俺だつて飲むなら旨い方がいいがな。少なくともビールは飲まん」  
『仁科君はビールばかりだけどねー』  
『二宮だつてチューハイばかりじゃねえか。というか俺はビールじゃないとさっさと潰れるんだよ』  
「この中だとお前が一番弱いからな、アルコール」  
『言うわね、最強酒飲みさん』

『そういえば皆、初期艦って誰にした？ 私はなんとなく五月雨にしたんだけれど』

『僕は電だね。他だとなんかこう、二人から言われそうで……』

『あー、二宮は下手に大人っぽい子を選べないか。確かに、そうなるが一番ロリっぽい電がマシだな』

『そういうこと』

『大変だな。で、俺は漣な。ああいうノリの子の方がやりやすそうだったし、実際そうなったから万々歳。いやあ、上位七割には入れて良かったわ』

『あつ、そうか。初期艦の自由選択権を得られていない可能性があったのを失念していたわ。今にして思えば、その手の話って全然していなかったのね』

『どつちかという提督になれたこと自体——ちゃんと卒業できたことに会話が寄っていたからね。僕も民間出身の提督じゃなかったら、自由には選べなかっただろうなあ』

『座学と実技がそれぞれ苦手だったからなあ、お前ら。まあ両方駄目じゃなかっただけマシだが』

『防人君は割とそつなくこなしたというか、一部戦術面以外は強かったもんねえ』

『私もそこ以外勝てなかったし。それで、防人君は誰にしたのよ』

『俺は叢雲だった。理由はランダムだから特にならない』

『……え？ 防人君がランダム？』

『民間出身の提督の逆だから……軍人出身の提督は上位の三割が初期艦を選べるよな？ お前の普段の成績なら行けたと思うんだが』

『というか私、防人君に直接確認して、私より順位が高かったのを覚えているわよ。なんで同じ軍出身の提督で、上位の貴方がランダムなの？』

『辞退したんだよ。別に初期艦にこだわりはなかったし、だったら他

に回した方が健全だろ」

『勿体ねえなあ。結果として叢雲が来たんなら、それはそれで防人には合っている気がするけれど』

「俺としても、叢雲が来てくれて助かっているよ」

『……なんかただでさえ負けている上に、さらに負けた気分なんだけどー』

『まあまあ、防人君だし』

「小耳に挟んだんだが、二宮のところって前任の艦娘が残っていたんだって？」

『うん？ ああ、そうだよ。六人くらいだね』

『へえ、珍しいな。そういうのは滅多にないぜ』

『艦娘の異動って、基本的にはダブったせいで再配置くらいよね。提督じゃなくて鎮守府そのものに固執したでもしたの？』

『いや、通常とはちよつと違う処理っただけで、要はダブリ艦のそれと同じだよ。対象の子たちなんだけど、前任の提督が異動する直前にドロップしちゃった子みたいだね。あんまり提督への執着もないってことで、どうせなら後任——つまり僕に放り投げようっことにしたらしいよ。一々大本営に移動して、ってことをしなくて済むから、当人たちにとっても色々都合が良かったんだって』

「なるほど。ということは、練度はそうでもないのか？」

『ないね、ドロップしたばかり。ただ、そのドロップが起きた戦闘の中に強敵が混ざっていたらしくてね。おかげで最初から空母と戦艦をゲットすることになっちゃったよ』

『ますます珍しいな、ラッキーじゃないか』

『いや、提督としての経験値的にも鎮守府の資材的にも運用が厳しい』

から、それはそれで複雑なんだけどね。でもなんで急にこの話題？』  
「いや、最初から給糧艦がいたと聞いたから——うらやましいな、と」  
『ああ、そこなんだ……確かに間宮さんも残ってくれたけどさ。こっちはここが慣れてるって理由だったけれど』

『そっちは割と普通の異動、か？ まあそれはさておき、給糧艦はガチで重要だぞ。いないと飯が困るからな』

『おかげでうちはレトルト系を購入する羽目になったわ』

「自炊しろよ。艦娘たちもうまく手伝わせば、一先ずの分くらいはどうにかなるだろうが」

『私は料理できないのよ』

「堂々と言うな、情けない」

『そりゃ、清水は女子力低いからな』

『仁科君には言われたくないわよ。どうせそっちも似たようなもんでしょ』

『はん、俺はお前と違ってレトルトという発想が出てこなかったね。おかげでしつちやかめつちやかでマズ飯量産体制になっちゃった』

『駄目じゃなか』

『私以下じゃないの』

『今はどうにか出来ているからいいんだよ』

「まったく、家事能力の低い奴らめ」

『……僕は違うからね？』

『さっきの話にちよっと戻るんだけどさ、艦娘の異動ってダブリ艦の再配置以外にあったりするの？ 仁科君が珍しいだの普通だの言っていたけれど』

『大本営からの異動……がダブリ艦の再配置だったわね。他にあるの

？』

『異動ってか、まあ艦娘が鎮守府を離れるってことだが、これはダブリ艦の再配置以外だと他に二つばかりある』

「提督が異動させる場合と、艦娘から異動願いを出した場合だな。前者は大体大本営に行くが、後者だと特定の鎮守府にすることもあるそうだ。一応、仁科の場合は後者になるかもしれないん」

『念のために言っておくが、どっちも鎮守府から艦娘を出すことしかできないから注意な。最終的な配置権はあくまで大本営しか持っていないから。さつき珍しいって言ったのも、大本営が新人に対して、多数ないし強力な艦娘をほしいほい渡すってことが基本的にないからだ』

『なるほど、だから珍しいと。で、普通の異動は、追い出すことは出来ても招くのは無理ってことね。うちの間宮さんの場合は、まあぎりぎりこつちでいいのかなあ。微妙だけど』

『確かに微妙ね。あ、その普通の異動ってしよつちゅう起こるものなの？』

『ぼちぼちかなあ。どうしても特定の艦娘が受け付けなくて、ってことはまああるっぽいし。艦娘の方も、いまいちその鎮守府とは合わないから異動したい、ってパターンはなくはないとか』

「どうでもいいが、その合わない艦娘を移動させることの隠語が『解体』らしい。普通の解体は余った艦装をばらすことだが、一人の艦娘と一つの艦装しかない状態で『解体』となると」

『そういう意味、ってわけね』

『人当たりのきつい子もいるからねえ。確かに僕も『解体』しない自信はないかも。でもこれ、要望を出したら必ず通るの？』

『百じゃないがまあ大体通るらしい。特に艦娘からの方が確実だとか』

『なんで？』

『そりやそうでしょ。アンタの元にいたくないですって提督に示すよなものなんだから、通らなかつた場合は気まずいなんてもんじゃないでしょ』

「そういうことだな。秘書艦ならまだともかく、艦娘が大本営と直接話す機会はあるまりない。となればどうしてもその手の話は提督を介さんといかんわけで」

『あー、そういうことか。それは確かに異動させないと面倒くさそうだね。なまじ提督の艦娘に対する権限って大きいわけだし』

『ブラック鎮守府につながるようなことには大本営も敏感だからな。俺らが学校に通っていた辺りに元帥たちの面子が大きく変わって、そういう問題には厳正な態度を取るようになったんだと。防人のところの七号鎮守府も、それで閉鎖したんだったか？』

「らしいな。周辺脅威が減少していたつてのが前提にあって、それで一発アウトになったそうだな」

『そう考えると、結構ゲンが悪いわね。まあ、防人君がそういうことをするとは思えないけれど』

「そりやどうも」

『……流石にそろそろお開きにするか』

「もういい時間だからな。これ以上は明日に差し支える」

『学生時代もそうだったけれど、提督が二日酔いはいくらなんでもまらずいしね』

『こういう形だとまた新鮮だったわね。結構面白かったし、また画面越し飲み会やりましようか。今回は割と仕事関連が多かったし、今度は馬鹿話もしたいわ』

『だなあ。それぞれの提督業が軌道に乗ったら、その時はリアルで顔を合わせて飲みたいもんだ』

「それにはもう少しかかるだろうな。それまではまあ、この飲み会で我慢だ、我慢」

『そうだね。じゃあ皆、また今度』

『ええ、また』

『おう』

「それまで息災に、な」



## 二隻目 足場

加賀が鎮守府に着任していました

「……各機より入電、周辺海域に敵影なし。静かな海だと判断します」  
雲一つない青空を見上げながら、一人の艦娘が報告の声を上げる。  
凜としたたずまいと、涼やかな顔立ち。頭上の空よりもなお濃い  
青の道着に、僅かにギャップも感じさせる、黒髪を短くまとめたサイ  
ドテール。それらを覆うのは、手に軽く握られた弓と、背に担いだ矢  
筒、そして何よりも、その左肩に取り付けられた大きな飛行甲板だ。  
航空機母艦——正規空母艦娘、加賀。それが彼女の名前である。  
「加賀より鎮守府、想定した哨戒任務を達成したと判断。これより帰  
還したいと思いますが、構いませんか」  
『帰還を許可するわ。復路も油断のなきように』  
「了解」

鎮守府、秘書艦の叢雲との通信を終え、加賀は小さく息を吐きだす。  
その彼女に、僚艦である睦月型駆逐艦一番艦の睦月が声をかける。

「加賀さん、お疲れ様によしい」

「この程度、空母艦娘にとっては日常茶飯事よ」

何ということはない、と言外に告げれば、おお、と睦月が瞠目する。  
感心しているのだろう、と分かるその反応を見れば、加賀も悪い気は  
しない。その気分のまま、加賀は残りの随伴艦達に目を向ける。睦月  
と同じ駆逐艦の電と、川内型軽巡三番艦の那珂の二人だ。

「一応確認しますが、全艦、支障はありませんね？」

「はい、問題ありません」

「那珂ちゃんも、ばっちりだよ。このままコンサートを開けちゃうく  
らいー」

「そうですか」

戦闘もしていないのに——あるいはしていないから発散できてい  
ないのか——テンションの高い那珂を加賀は軽くスルーする。物静  
かな加賀にとって、自身をアイドルと称し、常に明るく振る舞う那珂

はややとつつきにくい相手だった。悪い相手ではないのだが、と思っ  
ている。しかし、残念ながら、このテンションに合わせられるほど、加  
賀という艦娘は器用ではない。そのため、結果としてこのような対応  
が常となっていた。

もつとも、このような対応をしているのは別に加賀だけではない。  
むしろ、那珂の姉妹艦を含めても、彼女のテンションに完全に付き合  
える者はそういない。良い悪いではなく、単に適性の話だからだ。そ  
れは那珂自身も理解しているらしいが、特に気にはならないとのこ  
と。やりたいからやっているだけで、無理に合わせてもらおうとは思  
わないらしい。実際、彼女のテンションに首を傾げることはあれど、  
それで迷惑を被ったもない。アイドルとしての誇りがあると、そうい  
うことなのだろう。だから、あまり口には出さないものの、加賀も彼  
女のことを尊重していた。

「これより第一艦隊は鎮守府に帰還します。艦隊の帰還と艦載機の帰  
還を並行して行うため、着艦が完了するまで私は直近の警戒が疎かに  
なりません。その間は貴女達に任せて構いませんね？」

周辺の安全は確認済みだが、万一ということもある。念のためにと  
改めて尋ねれば、三人はそれぞれに頷きを示す。それに僅かな満足感  
を覚えながら、加賀は自分の鎮守府——七号鎮守府への帰還の途に就  
いた。

「お疲れ様、皆」

帰還した加賀達を出迎えたのは、先ほどまで通信していた叢雲で  
あった。彼女に対して敬礼と答礼を交わしあいながら、加賀は海から  
地上に上がる。

「貴女の出迎えは、どうにも慣れませんね」

「いつもはアイツの仕事だからね。提督代理も楽じゃないわ」

やれやれ、と叢雲が肩をすくめる。秘書艦としての業務を行うもの  
は多数いたが、その中でも叢雲は重用されることが多い。特に、提督

が不在時に代理として指揮を任せるのは、今のところ彼女だけだ。そのことに、羨ましい、という子供っぽい嫉妬心を、加賀は少しばかり感じずにはいられなかった。

「提督と神通ちゃんはまだ帰ってきていない感じ？」

「ええ、戻るのはヒトゴーマルマル以降になるそうよ」

加賀達の提督は今、七号鎮守府を離れていた。鎮守府の隣町である、水崎という町の行政関係者と会談をするため、そちらに赴いているからだ。平時での付き合い方や非常時の対応等を話し合うのが主な目的だ、と聞いている。なんでも七号鎮守府が再始動した時から要請はあったそうだが、鎮守府の運営が軌道に乗るまで延期していたらしい。

現在、鎮守府には加賀を含めて十八隻の艦娘が着任している。艦娘全体の数を見ればまだまだ少ないが、提督が鎮守府を離れられる程度には揃ったということで、ようやく会談の場をセッティングしたという流れのようだった。

また護衛として——那珂の姉でもある——川内型軽巡二番艦の神通も提督に同行していた。鎮守府の外に出る以上は必要だと、加賀を含めた数名が主張し、結果として神通がその護衛役に選ばれたのだ。人選は出撃予定の兼ね合いと、外見的な適正が重なったからである。睦月のように幼い外見をしているわけでも、那珂のように常に主張の強い雰囲気を持っているわけでもなく、静かに、しかしその時には強く威圧も出来る神通が、今回は適任であったということだ。

「ところで叢雲ちゃん、提督たちの会談って何が目的なの？ 知っているなら教えてほしいにゃしい」

「別にいいけれど、そのまえにやることを片付けなさい」

叢雲が工廠の方を指さす。出撃後の艦装の整備を済ませてこい、という意味だろう。それもそうだ、と加賀は頷く。

「分かりました。では後ほど……そうですね、時間もいいですし、昼食を取りながら、というのはどうかしら」

「じゃあ、それで。出撃後の書類もついでに準備しておいてね」

言い残し、叢雲は本館へと歩いていく。数秒ほどその後姿を見送つ

だが、いつまでもそうしているほどの理由もない。加賀は他の面々を連れ、工廠へと向かう。

「よろしくお願ひします」

待機していた妖精たちに挨拶をし、加賀達はそれぞれの艀装を彼らに渡す。そうすると妖精たちは大きく頷き、さつそくその小さな身体を使つて艀装をいじり始めた。損傷も何もない艀装だが、それでも整備となれば相応に時間もかかる。適当なところで見物を切り上げ、加賀は騒々しくなった工廠から出る。

「私は書類を取つてくるので、貴女たちは先に食堂へ行つておいてください」

「はい、那珂ちゃんたちがぼつちり席取りをしているから、安心してねっ」

「席取りするほど艀娘いないにやしい」

「まだ十八隻しかいませんからね。たぶん、徐々に増えていくとは思うのですが」

「その時には那珂ちゃんの方ファンクラブも増えるといいなあ、きやはっ！」

増える以前に誰もいないだろう、というツツコミは口に出さず、加賀は静かに一人で艀娘寮へと向かう。そうするのは、出撃後に出す報告書類がそこに置かれているからだ。実際は寮の方は予備として置かれているものであり、本来は本館の執務室においてあるものを使うことになっている。だが、工廠との位置関係などから、加賀達は寮の方を優先して使うことが多かった。些か微妙な対応だったが、提督たちからは黙認されている。提督がいれば執務室で書いて提出するというのが、ままた心理的にありだったが、そうでないならこちらの方が手取り早い。何より今回は食堂で渡す手はずとなつている。寮の方でいいだろう、と加賀が考えたのは自然の流れであつた。

「……こんなものですか」

加賀による報告書類の執筆は、正規書類という割にはあつさりと終了した。元々が完全にテンプレートが出来上がっている上に、今回の出撃では一隻の深海棲艦とも出会わず、ただの一度も問題行動が起こっていない。ただ行つて、艦載機で偵察して、そして戻ってきただけ。『何もありませんでした』をテンプレにのっとりて装飾し、悪筆にならないように清書しただけとなれば、そう時間も経つはずがなかった。

インクが乾いたことを確認してから書類をクリアファイルに収納し、小脇に抱える。執筆の舞台としていた寮の自室を一瞥し、特に持ち出すものもないことを確認してから、加賀は足早に部屋を出る。そのまま寮を出て食堂を目指して歩いていると、ふと背後から声がかけられた。

「あら、加賀さん。今からお昼？」

「足柄ですか。ええ、その通りです」

振り返つた先に立っていたのは、大人びつつも勝気な表情をした一人の女性だ。妙高型重巡三番艦の足柄である。現在の七号鎮守府において唯一の重巡であり、加賀にとつてはその初出撃でドロップした、ある種の『戦果』でもある艦娘だ。それもあつて加賀と足柄の仲はかなり良好で、空き時間には何かと話すことも多い。

加賀は一度足を止め、足柄が隣にまで来たところでまた歩き始める。当然、歩調は先ほどまでよりも緩やかだ。

「どうだった？」

「特に何も。凧いだ海でした」

「やっぱり近海じゃあんまり敵も出てこないか。もうちよつと沖に出たいわね」

「同意しますが、当分は現状維持でしょう。提督は艦娘の数がまだ不足しているとお考えのようですから」

艦娘を入手する方法の一つに、資材を消費して行かう建造がある。それには開発資材と呼称される特殊な資材は必要となるが、その余りが七号にはない。元は一艦隊分ほどあつたそうだが、加賀を含めた何隻

かを作るのに消費しきつたらしい。結果として加賀や、飛鷹型軽空母二番艦の隼鷹といった航空戦力が二隻も建造された以上、そこに不満や追及が生まれる余地はない。

であれば、次に考えるべきは、もう一つの入手方法であるドロップになる。加賀の言葉に対し、足柄が反論として持ち出したのも、やはりドロップのことであった。

「だからこそ、ドロップ狙いで敵を倒しに行くのは良い案だと思うのよ。戦力は増えるし、近隣も平和になるんだから」

「敵を倒した結果として戦力が増強される、というのが道理では？」

戦力を増強するために敵を倒しに——探しに行くというのは本末転倒の感があります」

「まあ……それも確かに」

一拍の後、足柄が首肯する。その素直な態度に、分かっている駄々をこねているだけだなと、加賀は当たりをつける。

「やるならまず戦力の底上げ、つまり全体的な練度上げでしょう。今いる艦娘の全員が『改造』を受けるくらいにまでなれば、と提督は以前に仰っていました」

ここで言う練度とは、艦娘の艀装内で処理される、艦娘の経験値の積み重なりを数値的に示したものだ。艦娘の戦闘の経験を通し、艦娘として艀装をどの程度扱えているかの指標であり、基本的に一から十九までの数値で段階的に示される。これが九十九にまで達した時、その艦娘は自身の艀装を十全に扱えているということになる。

また、この練度は各艦娘が『改造』を受ける上での目安ともなっている。改造というのは艦娘の艀装や艦娘自身の肉体を強化できる処理だ。これは一定の練度に達した艀装を依り代に、新たに艦娘を『降ろし直す』というものであり、これによって艦娘は新たな肉体と艀装を手にすることになる。勿論、記憶や経験はそのまま引き継いでおり、基本的には艀装が変化しただけ——場合によっては外見にも変化が出るが——と考えて支障はない。艦娘や艀装に損傷が出ている状況で改造を行い、降ろし直した影響で身体的な損傷が消えた場合のみ、そのことを意識することもあるだろう。

現在、七号鎮守府での改造を受けているのは第一陣——つまり叢雲、電、木曾、天龍、北上、響の六隻と、それに加えて、要求練度が他より低い、水上機母艦娘の千歳だけである。加賀や足柄は今の鎮守府の主力ではあったが、まだ改造に至るほどには練度が溜まっていなかった。

「それまでは演習やら小勢相手やらでちまちまやるしかないか。同じ接敵なら私の時に出てほしいけど、どうかしらね」

「そこは運かと。幸運なのか悪運なのかは知りませんが」

そう加賀が返せば、足柄は薄く笑って肩をすくめる。楽しそうだとそんな感想が加賀の中に生まれる。同時、加賀は自身の表情が動いていることを察する。おそらく、目の前の足柄と同じような、楽しそうな笑みだろう。『加賀』の相棒と言えば同じ『一航戦』の『赤城』だが、今の加賀にとっては、目の前の艦娘もそうだと見なしてもいいのかもしれない。

つまり、

「類は友を呼ぶ、ですか」

「その方が楽しいでしょ。違う？」

違わない、と加賀は小さく苦笑する。そんな彼女の肩をポンと叩き、足柄が指を伸ばす。向けたのは、いつの間にか目の前にまで来ていた食堂だ。

「ご一緒、してもいいかしらっ？」

「ええ、喜んで」

そう返し、加賀は表情を一度戻してから、食堂のドアを開ける。一度に百名は利用可能な広さがあるが、埋まっているのは端のわずかなスペースのみで、そこには待ち合わせていた叢雲たちが座っている。こちらに気づいた彼女らに軽く合図をしつつ、加賀は奥の注文カウンターに歩く。

「あら、加賀さんに足柄さん、いらっしやいませ」

そこに立っていたのは、給糧艦の間宮であった。見れば、奥で同じく給糧艦の伊良湖が鍋を見ているのも分かる。七号鎮守府の艦娘の数が十を超えたところに大本営から異動してきた特殊な艦娘で、主に糧

食関係を担当している。簡潔に言えば、鎮守府のコックさんであった。

「日替わり大盛り、それときつねうどんを一つお願いします」

「私は……とんかつ定食を貰おうかしら」

掲示されていた簡易メニュー表から、加賀は今日の昼食を選択する。中々の量に見えるが、どうしても艦娘は出撃等でエネルギーをいやすく、一般的な女性よりも多く食べる必要がある。たとえ短い哨戒任務であれ、海を走り、水平線を見張る以上、それ相応に身体も頭も動かすことになるからだ。だから体躯の小さな駆逐艦娘であつても、出撃すれば成人男性の一人前くらいは食べる。軽巡や重巡だとそれが大盛りになり、加賀のような正規空母となればさらにもう一人前は摂取する必要がある。艦載機の発着艦とその後の制御、送られてくる情報の精査。こう色々やる都合、この程度は食べないとも身体が持たないからだ。

ただし、足柄のように非番の場合は、運動量が減るので食べる量が一段階は減る。訓練をしていたとか、秘書艦業務で動き回っていた場合はともかく、艦娘も普段から大食いというわけでは決してない。欲望からではなく、あくまで必要にかられての大食。少なくとも、七号の艦娘たちはそうであつた。

「分かりました、じゃあ出来たらお持ちしますので」

「ありがとうございます」

笑顔を浮かべた間宮に軽く一礼し、叢雲たちが座るテーブルに向かう。食堂の中央<sup>センター</sup>ではないことから、場所を選んだのは那珂ではないのだろう。そんなどうでもいい推測を頭の隅で行いつつ、加賀は先ほどの面々に声をかける。

「お待たせしました」

「たいして待つてもないわよ、お昼もまだ来ていないしね。というか、足柄も一緒に来たのね」

「ええ、ばったり会ったから」

そういえば、足柄には叢雲たちのことを言っていなかった。『報・連・相』が微妙に欠如していたことに、加賀は今更ながらに気づいた



ものの、別にいいかと席に座る。仕事ならともかく、こういうところまできつちりする必要もないと思ったからである。

六人掛けのテーブルをぴったりと埋めたところで、加賀は抱えていた書類を叢雲に渡す。

「出撃報告書です」

「ん……うん、受諾したわ」

一瞥し、叢雲は書類を傍らに置く。間違うようなところもない書類だから、受け取ってもらえたことに特別な感情はない。それよりも、と加賀は目的の話を叢雲に振る。

「それで、提督は何を話すために隣町に？」

「大雑把に言えば防衛関係と食糧関係ね、今回は」

「防衛関係つてのは、避難経路とかの話にやしい？」

考え込むそぶりを見せながら、睦月が尋ねる。言動や容姿、それに特徴的な語尾などから幼く見られやすい彼女だが、中身は加賀達と同じ立派な艦娘だ。だからこういう話題に関しては、彼女もまた積極的な方だった。故に今回も、同じような要素を持つ電と共に、二人して真剣な面持ちを浮かべているのが見える。

「それもあるし、非常時には鎮守府が独断で避難警報とかを出せるようにするのもあるわ。一々上で話し合つて、とやっている暇がないかもしれないから。軍として出す警報な以上、かなり強制力のあるものになるわけだし」

「守らないと罰則、とかですか？」

「最悪の場合は見捨てる、ということでしょう。無論、そうしない前提では動くのが基本でしょうが、いざとなつたら固執はしないし、文句も言わせない。表向きはともかく、裏としてはそういう感じかと」

叢雲への問いかけも兼ねつつ、加賀は電の疑問に答える。そんな加賀の言葉に対し、叢雲も小さく頷き、特に否定するそぶりもない。見当違い、というわけではないようだが、さして当たって嬉しい予想でもない。無言のまま、加賀は叢雲に先を促す。

「それで、食糧関係の方だけと……まあアレ、地産地消って奴をしましようってこと。一次産業がある地域だと、大本営からそれを推奨さ

れることになるのよ。その方が輸送面でも効率的なわけだし」

「輸送トラックの便は減らしたいよねー、ってことなのかな?」

「そういうこと。あと、政府の思惑とかもあるわね。ほら、内陸部への疎開とかもあるから」

「……ああ、食べる人がそこらになくなっていくから、代わりに鎮守府で消費して経済も回しなさいと」

「正解」

足柄の言葉を叢雲が肯定する。

「それに、そういうこともしておけば、行政や住民が鎮守府に対して好感情を抱いてくれやすくなるし。何かがあるか分からない情勢なんだから、上としても国民にマイナスイメージを持たれるのは困るってわけ」

なるほど、と加賀を含めた全員が頷く。そういうことであるならば、提督が出張する理由として納得がいく。物質的な利益も纏めつつ、国民の生活も真摯に考えていますよというアピールも出来る。鎮守府が落ち着くまで、つまりは腰を据えて話が出来るとタイミングまで延長したのも分かる話だ。

「しかしそうになると、水崎町は何かしらの一次産業があるってことですよね。何かあるのです?」

「えーつと……」  
「農業と畜産、あとは漁業もやっているといえればやっているそうですよ」

思い出そうとするそぶりを見せた叢雲に代わって、いつの間にか来ていた伊良湖が答えた。台車を押しながら来ていた彼女は、そこに置かれていた昼食を各自の前に配りながら続ける。

「といっても、規模としてはそう大きなものではないらしいですね。元々、近隣か町内で消費できる程度のものだったとか。まあそれでも疎開で需要は減っていますし、従事していた方たちはほとんど外に出していないとかで、供給量は変わらないらしいです」

「そこをうちでカバーしたい、ってわけかあ。そこは分かったけれど、なんで伊良湖ちゃんがそれを知っているの?」

「私と間宮さんがダイレクトに関係あるお話ですから、提督さんと事前に打ち合わせをしたんですよ。大体は問題ないですが、万一にも扱えないような食材だと困りますし。叢雲ちゃんもパツと出てこなかったのは、提督がまずこちらに話を持ってきたからだと思います」

「まあ、そうね。私はむしろ、こつちの実働に関わる方を確認していたから」

「こつちの、ってなんなのですか？」

「護衛よ、その水崎町の漁船の。今回の話が上手くいったら、その辺のことも話し合うつもり予定らしいから」

「哨戒任務に組み込む、といったところですか。でも、今まではどうしていたの？ 私が知る限り、七号鎮守府はそういう任務をしていなかったはずですが」

確認も改めて見渡せば、そういうえば、と言うような表情が返ってくる。唯一違ったのは、困ったように眉尻を下げた叢雲であった。

「その辺はまあ、護衛抜きで海に出ていたらしいわ。あんまり褒められたことじゃないけれど、この辺りは比較的敵も湧きにくいし、そもそも七号自体が閉鎖されていたから……」

「それはまた……なんともコメントに困るわね」

思わず漏れた、という風な足柄の返答に、加賀も心の内で同意する。確かに、どう反応すればいいか困る内容だ。再開した七号鎮守府に所属する艦娘としては、どうとも言い難いものがある。強いて言うならば、今までよく無事だったものだ、という感嘆とも呆れとも定まらぬ感想くらいか。

「なににせよ、それが通っていた状況で改めて護衛を、というのは話もまとまらなさそうですが……提督は大丈夫でしょうか」

「それがアイツの仕事よ。私たちは私たちの仕事をするだけ、ってね」

そう言つて、叢雲はトレイの上の箸を取った。既にそれぞれの昼食は配られていて、温かい湯気と美味しそうな香りを漂わせている。それを配膳していた伊良湖も、加賀達の会話の途中で静かに去っている。

確かに、タイミングとしてはちようどいいか。同じく箸を取り、小

気味よい音と共に割る。

「ならば、私たちの仕事を片付けるとしましょう。腹が減っては何とやら、ですから」

午後にも、哨戒任務は入っている。それが仕事である以上、加賀たちがやるべきことは一つしかない。

「いただきます」

手を合わせ、加賀は昼食を取り始める。やりがいのある仕事、尊敬できる上司、気の合う同僚に、美味しい食事。小難しいことは多いが、一先ずは充実している生活。それで十分だと、加賀はそう思うのであった。

川内型姉妹はそれぞれの職務を全うしていました

「——むう」

不満だ、と水平線を眺めながら、川内型軽巡の一番艦、川内はつまらなそうにぼやく。そんな彼女に話しかけるのは、随伴艦である千歳型水母一番艦の千歳だ。

「そう不満そうな顔をしないでよ。安全に敵を倒せたんだからいいじゃない」

「そりやそうだけどさあ。これは流石に思うところがあるつていうか」

そう言いながら、じとりと川内は千歳を見やる。

水上機母艦、千歳。川内たち巡洋艦と比べ、彼女の艤装は単純な火力こそ劣るものの、その装備は実に多彩だ。水上爆撃機の種類である瑞雲を用いた航空戦と、これに次いで艦隊から先行した甲標的——小型潜水艇による雷撃。結果として両大な射程を持つそれらは、両艦隊が砲雷撃を始めるより早く、一方的に敵艦隊を攻撃することが出来る。細かい装備や練度にもよるものの、うまくかみ合えば駆逐の一隻や二隻は簡単に落とすことも可能だ。

つまりは、そういうことである。

「哨戒だけど旗艦だ、そして久々の戦闘だ、つてその気になつてさ。実態は偵察していた瑞雲の爆撃と、発見と同時に出撃した甲標的であったさり終了。夜戦をやれないはまあ、まあまあ分かっていたけどさ。いたけどさあー……」

敵の姿を見る前に終わるのは、どうなのか。そんな思いを、ため息に乗せて吐き出す。高まったやる気の行き場がない、と川内が肩を落とす中、まあまあとなだめる声上がる。

「こっちの被害なく一方的に敵を倒せるつてのは、戦闘での理想形みたいなものじゃないですか。相性が良かった、つてまず喜びましようよ」

「うちの提督の考え的に、こういうのこそ望まれていることだろうし、あんまり気にしないほうがいいんじゃないかなー。動き足りないっ

てんなら、帰ってから鎮守府内を走ればいいわけだし！」

陽炎型駆逐艦一番艦の陽炎と、長良型軽巡一番艦の長良。二人の慰めの言葉に、それもそうなのだが、と頭をかく。

「理屈はそうだってわかっているんだけどね。こういうのは艦娘としての本能みたいなもんだし。それと目的なく走るのは面倒だからなしで」

「えー、割とよく走っているじゃん」

「あれは訓練として走っているものであって、走るために走っているわけじゃないから」

「走る云々は置いておいて、川内さんの話は確かに分かるんですけどね。なんというか、こう、どうせなら仕事をしたい、的なの？」

「そう、それ。ある程度は戦いたいんだよね、出たからには。存在意義つてのと、提督の役に立ちたいつてのと、半々で。いや、どっちかというと、褒められたいのかな？」

そう、川内が言うと、その場にいた全員が苦笑する。否定やそれに近い意味の笑み、ではなく、言われてみると否定できないものがある、という感じの、消極的肯定を示すものだ。同じ穴の貉、という言葉が浮かぶような、そんな表情だった。

「ただ、まあ、役に立っつてのと、褒められるのは別なんだよね。それこそ、さつき長良が言ったみたいに、うちの提督が褒めてくれるのはこういうのだし」

「沈まない、が前提だもんね」

「かといって、過保護つてわけでもないのよね。戦うこと自体には肯定的で、忌避はしていないみたいだし」

「軍人で戦うのが嫌、って方が変じゃないです？ まあ、今の世の価値観って良く分かっていないから、あれかもしれないけど」

どっちでもいいんじゃない、と陽炎の発言に対し、川内は頭の後ろで手を組みながら言う。

「戦うことを望まれて、沈まないことも望まれて。そのどっちもが、私たちにとっては都合の良いことなんだから、さ。そこに提督に褒められることも加えて、それらを目的として頑張ればいいんだよ」

「自分が戦うことも含めて？」

にやり、と千歳が付け加えた言葉に、川内は思わず苦笑する。お前が言うのは卑怯だろう、と視線で語れば、向こうはどうだと言わんばかりの笑みを返してくる。これは自分の負けだな、と降参の印として両手を挙げる。

「分かったよ。これからは自分の番が回ってこなくても不貞腐れないうって約束する。そんなの、誰に望まれていることでもないしね」

「うんうん、それでいいんじゃないかな。私たちが活躍する場もいざれ来るよ」

「——あ、それ今かもです」

ぼつり、とつぶやいた陽炎の一言に、弛緩していた空気が一気に引き締まる。反射的に陽炎を見ると、彼女は海の向こうをじつと見ているのが分かる。

「何か見えた？」

「たぶん。まだ不明瞭ですけど」

「千歳、艦載機は？」

「現在帰還中。ちなみに甲標的も同じく」

「どうする、川内？ 進むか、待つか」

長良の問いに、川内は次の行動を思案する。より早く状況を見るために距離を詰めるか、あるいはこの場にとどまって状況が動くのを見るか。先手を取るなら前者だし、哨戒範囲外ということを考えれば後者だろう。

「そうだね……」

奇しくも、ネームシップばかりが集まった艦隊。その旗艦に任じられた身としては、それなりに功績も立てておきたい気持ちがある。だが、だからと言って、無理無茶無謀な行動をとるのはナンセンスだ。それが必要な場もあるが、今はそうじゃない。敵戦力を不明なままに突っ込む場面ではないはずだ。

ならば、

「現地点で待機しつつ、状況を見る。陽炎はそのまま判別続行。千歳は鎮守府に連絡を回して。長良は私と周囲警戒。それと全艦、いつで

も動けるように準備。もちろん、全方向にだよ」

旗艦として、そのように指示を出した。全員が従っているのを確認してから、自身もまたその通りにする。

いざとなれば引く、それが旗艦としてすべきことだ。そう思いながら周囲を見渡すこと、数分。

「——確認！ 敵艦、駆逐イ級二隻！」

「周囲に艦影なし。敵増援の気配はないかな？」

「鎮守府、秘書艦の響からはこちらの判断を尊重すると来たわ。これからどうする？」

三人の顔が、こちらに向く。どうする、と聞いておきながら、しかし、彼女らが浮かべているのは、好戦的な勝気な笑みだ。それに、川内もまた同じ表情を浮かべながら、決まっていると声を上げる。

「——私を先頭に、長良、陽炎で敵に砲雷撃戦を仕掛ける！ 千歳は現地点から周辺警戒を続行！」

『了解！』

弾けるように、三人で前に出る。長良、陽炎を率いての突撃。首筋を焦がすような緊張感に、川内は思わず笑みを浮かべる。こんな状況だが、妙に楽しい。あるいは、嬉しい。艦娘川内の身体が、戦いを望んでいると深く理解できる。

「さあ、仕掛けるよ！」

さて、土産話にできるだろうか。相対の前の一瞬。自分とは違う仕事をしているだろう、二人の妹に対して、川内はふとそんなことを思うのだった。

「——それでは、このように」

どうやら纏まったらしい。提督が握手をする姿に、川内型軽巡二番



艦である神通は内心でホッと息を吐いた。七号鎮守府に隣接している、水崎町の役所で開かれた二度目の会議。漁業組合との連携を主題に、前回の補足を副題として小一時間ほど続けられた打合せの間、護衛として気を張っていた反動だ。危険性は限りなく低いとはいえ、まだ二度目かつ単独での護衛となると、流石に緊張するものがあつた。

「では、私はこれで。神通」

「はい」

一礼、そして退室。小さな役所の廊下に出てすぐ、提督は煩わしげに襟元を軽く弄る。それをちらりと見て、神通はそつと小声で話しかける。

「お疲れ様でした、提督」

「ああ。反発もあるかと危惧していたが、一応は想定通りで済んでよかった。前回からこの調子なら、どうにか信頼関係は築けて行けそうだな……貴官も、また一人で護衛をさせて悪かったな。やはり、今度こそもう一人くらい連れてくるべきだったか」

「いえ、現状の七号では仕方ないかと」

総勢で十八名にまでなつたとはいえ、今の七号はまだまだ人手が足りない状況だ。特に、提督の護衛として外に出られるのはほとんどいない。能力的なものもそうだが、選定において特に問題となつたのが、それぞれの艦娘の外見だった。如何に艦娘が特異な存在とはいえ、それですべてを納得できる、あるいは飲み込めるかは別だ。つまり、艦娘だから問題ないといくら言つたところで、普通の駆逐艦娘などを護衛としてしまうと、提督が好印象を抱かれる可能性は低いという話である。多少は言い訳の聞く駆逐艦娘がいなくてもないが、生憎と良くて叢雲か陽炎しかないというのが、今の七号鎮守府の面子だ。

ただ駆逐艦以外なら大丈夫かと言うと、中々そう単純な話でもない。現時点では加賀と隼鷹しかない空母勢や、重巡の足柄や水母の千歳といった同じ艦種の仲間がない面子は、どうしても外に出にくいものがある。そうした縛りのない軽巡艦娘にしても、また別の外見上の問題が出てくる。軽巡に限った話ではないが、この国において、赤やら緑やらの髪は奇抜すぎるのだ。黒か、あるいは茶色くらい

でない、こういう真面目な場には出しにくいものがある。軍主体ならともかく、あくまで一般の組織に出向くならなおさらだ。それこそ、光の加減によつてはどちらにも見える、という神通の髪くらいが境界だろう。

その上で、護衛としての適性や能力の問題もあつた。神通の姉妹である川内や那珂がここでは分かりやすい例だろう。前者は性格的にこの手の仕事に向いておらず、後者は護衛にしては目立ちすぎる。このようにふるいをかけていき、危険度が低い案件であることと、第一印象も大事しておくべき、という前提も踏まえた上で残ったのが、神通だけだった。これが前回、そして今回の護衛として神通が選ばれた事情である。

「貴官の能力は信用しているが、それでも限界はあるだろう」

疲れも多少見えるぞ、という提督の言葉に、神通は僅かにほほを赤らめる。見透かされていた、と思わず気恥ずかしさを覚える彼女に、提督は軽く咳払いをしてから続ける。

「やはり、次は北上か長良も同行させるべきだな。性格的にはどちらも少々問題があるが、どうにか出来ない範疇でもあるまい。その間にまた適性の高い新規艦が来ればそれでいいが」

「……その場合はまだ、北上さんの方が適任かと。長時間個室で立ちっぱなしと考えると、動的な長良さんにはやや酷かもしれません」

自分なりに適性を見た上での考えを、提督に対し具申する。参考にならないかもしれないが、とやや後ろ向きに構えた発言であつたが、そんな彼女の予想とは裏腹に、提督は納得したように顎を撫でる。

「まだ覇気のない北上の方がいい、と。確かに、秘書艦的な業務も兼任させるならそれもやはりか。むしろ、貴官と北上で護衛と秘書を最初から分けるのもありかもしれん……いや、これだと結局護衛が増えていないな。やはり人を増やすのが一番早いのか」

「しかし、このくらいの規模の会議であまりに同行者が多いのは、相手方に威圧感を与えないでしょうか？」

「それも一理あるな。その辺りは貴官らの容姿で緩和されると思うが、それも樂觀か」

「男性よりは、ということですか」

「そんなところだ」

ああだこうだ、と正面を向いて歩きながら——当然、周囲の警戒も続けながら——二人で互いに小声で囁きあう。まだ二度目の護衛だったため、その内容は反省と改善ばかりだ。むしろ、気を張りすぎ、そういう余裕が互いにあまりなかった一回目よりも、対策として語ることは多い。

しかし、そんな会話に対して、神通は不思議と心地の良いものを感じていた。性に合っている、とでも言えばいいのだろうか。未熟なれど提督の護衛を全うした結果だ、という充実感があるのだ。

思いのほか意見が聞き遂げられている、ということに対する満足感もあるのだろう。提督が真摯に、真剣に話を聞いてくれている。部下と上司、という前提は当然だが、その上で対等な話し合いにしている。部下えている。そこに、認められているという安堵を覚えるのだ。

「……細かいところは帰ってから叢雲達と詰める必要があるが、大枠はこれでいくか。次回以降の会談も踏まえて、また任務のローテーションを見直さないと」

「その際は、私のお手伝いいたします」

「助かる。貴官は秘書艦適性も高いからな。無理をさせない程度には働いてもらう」

「はい。それが私の、私たちの仕事ですから」  
「そうだな。それが我らの仕事だ」

神通の言葉に、提督が同じ、そして少し意味の変わる言葉を重ねる。そのことに、神通は思わず微笑を浮かべる。共に進んでいる、というその実感は、彼女の心に安堵を感じさせえる。

ああ、なんと幸せなことだろうか。ふと、そんな言葉が神通の中に生まれる。

不公平に使い潰されもせず、一方的に愛玩もされない。今回のように本分と違う時もあるが、全体として丁度よい、充足感を覚える仕事。鉄の船から人の身に変わり、提督の下で働くことになってから、神通の日々に不満はない。上を目指せばまだあるのかもしれないが、それ

も、さらにより良くできるといふ意味で捉えている。これを、幸せな日々と言わずなんというか。

もし、これをさらに幸せにできるとするならば——思わず提督の横顔を見てしまい、神通はまたほほを染める。不遜だ、と思いつつも、どうしても止められない、暖かな想い。これもまた、人の身を得た結果なのだろうか。

帰ったら、それとなく相談してみるのもいいかもしれない。自分と同じくように、それぞれの仕事をしているだろう姉と妹のことを思い浮かべながら、神通はそんなことを思案するのだった。

「……うん、うん。分かった、じゃあ待っているからねー」

それで締め、受話器を置く。ふむ、と人差し指を口元にあてながら、川内型軽巡三番艦の那珂はついと視線をずらす。見やるのは、七号鎮守府執務室において、陸側に備えられた窓の外だ。

雲一つない晴天と、都会ではない程度の町の景色。なんとなしに、それらを数瞬ほど眺めた後、視線を正面に戻してから、那珂は再度口を開く。

「提督と神通ちゃん、もうすぐ帰ってくるって。会議の内容自体は、予定通り終わったみたいだよ」

「了解。第一艦隊の方も、もうすぐ帰還するみたいだ。タイミングが被るかもしれないね」

そう、那珂の発言に返したのは、秘書艦席に座る響だった。手元に暇でも感じているのか、『秘書艦』と書かれた名札を弾いている彼女に、那珂は小首をかしげながら問いかける、

「その時はどっちを出迎えに行こうか？　ここの習慣的には第一艦隊だけど、秘書艦……補佐、としては提督のお出迎えもしたいし」

言いながら、那珂も自身の机の上の、『秘書艦補佐』と書かれた名札

を軽くこつく。文字通りの役割として、少し前から設置されたその役職が、七号鎮守府における今日的那珂の立場である。文字通り、秘書艦の仕事を補佐したり、秘書艦が不在の場合は代わりを担ったり、というのが仕事だ。また、将来的に秘書艦をより広範囲なローテーション制にする際、スムーズな引継ぎが出来るよう、秘書艦になる前の予行演習的な意味合いも持っていると聞いている。半人前か控え、というのが那珂の解釈だ。

故に、基本的には秘書艦の判断優先、と思いながら問いかけると、響は無表情のまま、また真似を返すかのようには、コテンと首を傾げる。「分かれればいいんじゃないかな。私と、那珂ちゃんの二人で。一時的に執務室は空になるけど、短時間なら大丈夫だろうし」

「ああ、それがいいかも！」

響の提案に、那珂はやや大仰なしぐさで手を叩いた。演技っぽくも見えるだろうが、これでも那珂にとっては自然体な動作だ。艦隊のアイドルを自称している——那珂本人としては真剣な主張である——から、というのも多少あるが、単にこういう仕草が性に合うというのが大きい。まあつまり、好きだからやっていることである。人によっては多少引かれる時もあるが、それはそれ。大人しめの神通も含め、割と我が強い川内型の三女としては、アイドルのことも含めて自重する気はない。

そういう意味では、実のところ、目の前にいる響などは那珂にとって好ましい人物の一人であった。那珂ちゃん、と那珂を『ちゃん』づくで呼んでくれる艦娘はあまり多くない中、彼女は那珂のことを希望する通りの呼び方で呼んでくれるからだ。どうも、見た目こそクール系なのだが、割とノリの良い性格をしているようらしい。いつか彼女をアイドル活動に引き込めないか、というのが那珂のひそかな野望である。

「んー、でもそれだと那珂ちゃん的にはどっちに行くべきかな？ 川内ちゃんのいる第一艦隊か、神通ちゃんのいる提督の出迎えか。これはなかなか重要な問題かも！」

「そうだね——」

「なんなら、提督の方は私が行ってやってもいいよー」

突如、第三の声が響の言葉を遮った。何とも重さのないその言葉を受け、心なしか無表情に拍車がかかった響と共に、那珂は入り口の方を見る。

「暇だし、提督にちよつと相談したいこともあるしね」

壁に背を預けた体勢のまま、やはり軽い口調で続けたのは、軽空母艦娘の隼鷹であった。もう一人の秘書艦補佐、というわけではない。将来的にはともかく、現状では秘書艦も秘書艦補佐も椅子は一つずつしかない。彼女がここにいるのは、後学のために見学——という名の冷やかしだと那珂は見ているが——をしたいと、少し前から勝手に執務室にとどまり、那珂たちの仕事の観察をしていたからだ。非番ではないものの、特に仕事を抱えているわけでもないということ、静かにすることを条件に秘書艦組としては黙認していた形である。

そういうわけで、要請通り今の今まで黙っていたため、意識の外に追いやっていた彼女だが、流石に会話に割り込まれば再認識せざるをえない。どうしたのだろう、と思いながら那珂は頬に指をあてながら口を開く。

「暇つてのは置いておくとして、相談つて何があったの?」

「あった、というか、これからある奴についてだよ。ほら、漁船の護衛の話さ」

「航空戦力をどっちに振るか、つて話かい?」

心当たりがあったのか、隼鷹の返答に響が素早く確認を投げる。

「そう、それ。あたしか加賀さんのどっちかと、千歳と足柄のセット。どっちを軸の護衛艦隊を組むかって奴」

そこまで言われ、那珂もようやく納得する。近日中にまとまるだろう、水崎町での漁業における、七号鎮守府からの護衛艦隊の派遣。その編成に関して、早めに提督と相談をしたい。それが隼鷹の相談の内容であるようだった。

「航空戦力で一気に薙ぎ払い、万一残った場合は駆逐艦で処理をするパターンと、水母の豊富な偵察機による広範囲索敵からの、重巡軸の砲雷撃で叩くパターン。どっちがよりいいのかってのを、出来るだけ

提督と詰めておきたいんだよね。まあ他の面々の言い分もあるだろうから、あくまで個人的意見を提出つて形になるだろうけど」

「どっちもどっちで理があるからね。確かに、早めに突っ込んでおきたい議題ではある」

「提督はそっち系得意でもないみたいだしねー。まあ、その分艦娘の意見を尊重してくれるんだからありがたいんだけど」

「そういうこと。たぶん遠からず加賀さんと足柄がそれぞれの意見を出しに来るだろうから、先にあたしの意見を出して参考にしてもらおうかなってね。あんまりいっぺんに言っても邪魔になるだろうから」

なるほど、と那珂は数度頷く。どちらかと言えばふざけ目の、響などとは明らかに真逆な態度を見せることが多い隼鷹だが、やはりこういうところに関しては真剣であるらしい。普段はそういうキャラだが、艦娘としては職務に忠実という意味では、那珂とも似通うところもあるかもしれない。

はて、では彼女もアイドルに誘えばワンチャンあるのではないだろうか。客観的に見ればかなり不可思議な意見が那珂の脳裏をよぎる中、目の前の響と隼鷹はさらに言葉を交わしていく。聞く限り、実際にどちらの意見がいいのか、というのを議論始めてしまったみたいである。今ではないとも思うが、つい火がついてしまったのだろう。口調は常のまま、二人とも案外と真剣な調子で言葉を投げ合い始めている。

「……あれ？　これ、那珂ちゃん一人で迎えに行くパターン？」

さて、どうしたものか。白熱する議論を聞き流しながら、那珂は二人の姉のどちらを先に迎えに行くかを悩み始めるのであった。

## 足柄は護衛任務に就きました

「……ふむ」

順調のようだ、と妙高型重巡洋艦三番艦足柄は、口元に指を当てながら頷く。彼女の視線の先にあるのは水崎町の漁師たち——若干名、応援として他所の人間も加わっているらしいが——が乗る、数隻からなる漁船団だ。七号鎮守府と水崎町の漁業組合の間で結ばれた約定に基づき、彼らの護衛をする。それが今回の足柄たちの任務であった。

彼らを一瞥し、視線を軽く動かす。日の昇り始めた大海、そして段々と明るみ始めた陸地。それらの何処にも、深海棲艦が現れる気配は見受けられない。まさしく順調、と戻した視線の先にあった、活気良く漁をする男たちを見ながら、足柄はまた頷く。

「交流もいい感じ、でいいのかしらね」

眩きの対象は、漁船の周りでゆらりと動いている二隻の艦娘——天龍型軽巡艦二番艦の龍田、そして睦月型駆逐艦二番艦の如月であった。二人は手の空いている漁師たちと、何やら会話などをしている。艀装からのアシストにより強化された足柄の聴覚は、それが深刻な雰囲気のない、いわゆる世間話の類であることを把握していた。

一見するときぼっているようにも見える彼女らの行動だが、これは提督から並行して命じられた、『可能ならば水崎町の住人と仲良くなるように』という任務からの交流だ。無論、そういう思惑の下、表面的な付き合いをしているのではない。あくまでも、自然な流れとして行い、そうなったら僅かに頭の端に置いておく、くらいのことだ。足柄から見ると、対応している二人の顔には、義務感からくる作り笑いは浮かんでいない……まあ、如月はともかくとして、日常的に微笑を浮かべているタイプの龍田に関しては、いささか断言もしにくいのだが。

そんな二隻であったが、彼女らと話している——彼女ら『に』話しかけてきている相手は、二者で微妙に異なっている。大人びた容姿をしている龍田は本職の漁師たちに、ませた子供という感じの如月は漁



師の子供たちから、というのが多く見えた。外見年齢を考えれば、まあそうなるだろうという面子だ。

ただ、どちらも割と如才なく会話できるタイプであるためか、もう片方の面子から話しかけられることも決して少ないわけではない。その場合、龍田はきれいな大人のお姉さんとして、如月はかわいらしい小さな子供として、という風な形であるらしい。艦娘である以上、年齢云々はあまり変わらない——というのは言わずが花だろう。肉体年齢は同じでも、外見年齢に精神年齢が引っ張られる傾向にある、というのは事実なのだから。

そんな二人と対照的に、足柄は漁船——漁師たちからは一步引いた位置をキープしていた。ちらちらと見られることがあるのは自覚しているのだが、護衛任務の方を優先しているのと、交流よりも戦いに備える方が好みであるというのがその理由だ。彼女にしてみれば、一番であればそれもいいが、という感覚だった。

まあもつとも、非番などで会う機会もそうそうないだろうが……などと思いつつ、足柄は同じく漁船と距離を取っている、もう一隻の艦娘に話しかける。

「隼鷹、異常はありそう?」

「いんや、今のところは全く」

そう応えた隼鷹は、両眼をじつと閉じ、腕を胸の前で組んだ姿勢を取っていた。意識してのものではないが、まるでモデルのように決まった立ち姿を取る足柄と比べると、忙しい仕事の間に休息をとっている、という風にも見える。

しかし、実際には、彼女はこれ以上なく職務を全うしている最中であつた。広域に発艦させた各艦載機から、リアルタイムにもたらされる情報を見定め、周辺海域に深海棲艦の陰がないかの調査——つまりは索敵任務を、隼鷹は行っていた。彼女が視覚を閉じているのも、集中を高めつつ、余計な情報を省くことで、艦載機からの情報を正しく処理する、というリソース管理の結果だった。

「索敵範囲内に敵影なし。まあ、漁船が発見されない程度の範囲だからそう広くも深くもないけど」

「浅めで横にずらつと、って感じ?」

「そんな感じ。とはいえ、やっぱり合わないかもね、これ。少なくとも、爆装、雷装済みの機体でやるこっちゃないよ。燃費が悪いし、変に広げにくい」

姿勢を変えぬまま、隼鷹は軽く肩を上げる。それを『お手上げ』に類似した所作——とはいっても、冗談めかしてのものだろうが——と判じて足柄は考え込むように顎元を撫でる。

「発見からの即時攻撃が利点、とはならない?」

「どこに敵がいるって分かつて状態で、そこに殴り込みをかけに行く場合ならいいかもだけど、護衛中にやるには全体的に半端かな。先手取って殲滅できるならともかく、残してこっちに気づかれたら意味ないし」

「この状況で敵を見つけたとして、まずやるのは漁船の退避になるだろうし、下手に振り分けてもしょうがないでしょうね。手数を増やして……とするなら、素直に護衛艦隊と哨戒艦隊を同時に運用した方が早い、か」

「それでもやるなら、装備なしの軽い機体で、だね。発見、被発見から、いったん視界を切つて——とするなら、その方がいいってのはまあ、言うまでもないっしょ?」

「その場で攻撃しないなら、そうね」

「一番いいのは、素直に専用の偵察機を飛ばすことだろうね。もつとも、艦上偵察機の類はうちにないんだけど。提督にも確認したけど、そっちの開発発に向けてるリソースはないって断言されちゃったし」

「ということは、電探も?」

「あ、それもあつたか。まあ、たぶんそっちも同じじゃないかな」

「ふうむ……改装で装備として持つてくる子つて、誰がいたかしら」

「さあて。見つけて育てるにしても、今は機会が作れないだろうね」

「つまり……」

「まあ、先送りだねえ」

どうにもならん、とばかりに隼鷹が息を吐く。結局のところ、今ある大体の問題はそこに行きついてしまうようだ。当面は無理か、と隼

鷹の言葉に対して、足柄もまた心の中で同意する。

「確かに、それなら水上偵察機を用いるやり方がよさそうだけど……」

言って、足柄は自身が飛ばしている偵察機に意識を向ける。多数の艦載機を備える隼鷹と違い、足柄が装備しているのはたったの二機しかない。そのため、隼鷹のように脳のリソースを多く振り割る必要もなく、少し視線を空に向ける程度の集中で情報を受け取ることができる。逆に言えば、その程度の情報しかない。

「二機とその十倍以上じゃ、まったく範囲が違うってのがネックね。なまじ上を知っていると、中々決めかねるといふか」

「いやあ、索敵範囲が決まっているならどうにかなるんじゃない？」

「というか、そもそも言うほど飛ばしてもいいし」

「そうなの？」

「戦闘機は全部直掩に回している上、他にもそこそこ手元に残しているからね。実は事前の申告ほど飛ばしていないんだよ」

目を閉じたまま、隼鷹が軽く空を指さす。足柄がそちらに目を向けると、それなりの高度で旋回飛行を続けている、九六式艦戦の姿が見受けられた。防衛用と反撃用——こちらは攻撃機のことだろう——と付け加える隼鷹に、足柄はなるほどと頷く。

「下手に多く出すと誘引しかねない、つてのもあるしね。護衛任務で本隊に呼び寄せるのはダメダメじゃん？」

「本末転倒ってこと……というか、これって提督と話し合い済みよね？」

流れから察したことを、足柄は隼鷹に質した。事前申告の分を無視していることもそうだが、それ以上にここまでの会話に淀みがなさすぎる。最初から想定しての行動、と考えた方が自然だ。

「ああ、うん。そうだろう、と分かりつつ、実際にやってみたって感じかな、今回は。どうせやるなら何も無いうちがいいからね」

「何も無い……って、何かある時もあるの？」

「アタシもよく知らない、というか提督もそう詳しいわけじゃないみたいだけど、年に数回ほど、深海棲艦の動きが活発になる時期があるみたいなんだよね。数艦隊程度じゃきかないほどの数が組織的に集

まあって、どこぞの海域を支配したりするんだとか。これ、よっぽど遠くのことでもない限り、多少なりとこつちにも影響は出るらしくてね。傾向的に今はまだその時じゃないらしいけど、いずれは来るだろうから、その前に試せる物は試しておこうと」

「なるほどね。その時は、うちもそれに対応することになったりするのかしら」

頷きつつ、何処か喜色を混ぜながら足柄は呟く。大規模戦闘と、そこから得られるかもしれない勝利。半ば無意識のものだったが、戦いへの欲求から漏れたものだった。

「さてね。大本営の号令の下、複数の鎮守府が対応に当たるとは、いいだし、上から指示が来ればそうなるんじゃない？ まあ結局は、海域の総旗艦を潰せるかどうか、って話になると思うけど」

「複数の艦隊が集まった場合、それらの旗艦を束ねる艦——総旗艦と呼ばれる深海棲艦を倒せば、後は統率を失って散り散りになる……か。数が増えてもそこは変わらないのね」

「基本ルール、ってことなんだろうね。何のルールか知らないけどさ」「こつちも旗艦がやられるとデータリンクに不具合が出る仕様だし、それとか？」

「一艦隊ならともかく、複数まとまった場合もそうなるもんなのかね」「連合艦隊だって、第一艦隊の旗艦がやられたらそうなるはずだし、そうなんじゃない」

なるほどね、と隼鷹がどうでもよさそうに頷く。次いで、これ以上この話を広げる必要はないと判じたのか、ともかく、と彼女は話を戻す。

「とりあえず、基本は偵察機で対応の方がいいってことにしよう。数にしてはまあ、巡洋艦を並べる感じで。数にしたって、空からなら案外遠くまで見えるもんだし、少数でもどうにかなるって」

「んー、まあそうかもしれないけど……じゃあ水母、つまりは千歳を組み込む形はどう？」

「いやあ、それもどうか。千歳型は改装で軽空母になるみたいだし、今のうちの懐事情なら、航空戦力の拡充を優先するんじゃない？ 偵

察も大事とはいえ、火力と手数も大事だし」

「うちはまだ打撃力ないものねえ。暫定的にはともかく、永続的にそれは無理か」

「まあ、空母に改装するまでは、ってならそれもいいとは思うけどね」  
結局のところ、と隼鷹は軽く頭を掻きながら言う。

「向こうが射程内に入る前に、漁船団を逃がす程度の時間的余裕があればいいわけだ。そのくらいなら、艦娘が直接認知できる範囲でもどうにかなるって。なんだかんだ、今のあたしらのスペックって結構優秀だよ」

「まあ……確かに」

一理ある、と隼鷹の指摘に足柄も同意する。彼女の言う通り、なんだかんだといっても、艦娘の探知能力というのはそれなりに高い。リンクした艦装からのアシストにより、結果的に視力や聴力が強化されている——つまり、目や耳で見つけられる範囲が広いからだ。流石に偵察機や電探といった索敵装備には劣るが、それでも普通の人間と比べれば、圧倒的に広範囲を認識できる。十分に満足できるか、といえば全肯定は出来ないが、ひとまずは、という意味では肯定も出来る。そんな具合だ。

「……そう、ね。最適解を探るのはいいけど、求めるのはまだ難しい。そう認識しておきましょうか。今やるべきは、今の状況での最善を見つけることであって、最終的な最善ではない、と」

「そんな感じでいいんじゃない？　そも、二人ばかりでああだこうだと言いつつあつたところで、完璧なもんなんて出来やしないよ。もつと多く……というか、提督とじっくり話し合うべきだろうね。提督、結構アタシらの話を聞いてくれるタイプみたいだし」

結局はそこだよ、と隼鷹は数度頷きながら言う。その言い方は諦めや達観のそれではなく、それが自然、あるいはそうすべき、という肯定的なものだ。これも信頼関係によるものだな、と自身もそう思ったことを踏まえ、足柄もまた深く頷く。

「つまり、何か案があるなら提督に直接具申すればいいってことね」

「そう、そういうことだよ」

そうか、そうだ、と最後に言い合い、足柄はようやく納得の表情を浮かべた。先送り、というのは結局変わらないのかもしれないが、少なくとも、意味のある『待ち』にはなるはず。そんな信頼感と安心感が、確信と共に足柄の中にあつた。

「……まあとりあえず、アンタは一つ提督に意見具申、というか要望を出すべきだろうね」

「ん？」

なんだろう、と首を傾げる足柄に、ようやくと目を開けながら、隼鷹はからかうような笑みを向ける。

「演習でもいいから、がつつり暴れる機会を頂戴、つてな。欲求不満なんすー、つて言ってみても、たぶんバチは当たらないさ」

「……なるほど」

風のない海と、良い活気に満ちた漁船団を見ながら、

「それもそうね」

つまりは暇だったのか、と足柄は男勝りな表情で小さく笑った。

## 如月が演習の実施について学びました

「……あら？」

なにやら、見慣れないものがあつた。執務室の前で、如月は首を傾げる。

【通話中 静かに入ること ノックは不要】

執務室の途に貼られた、一枚のメモ。丸みはないが、なんとなく小さくまとまった文字。見覚えのあるその文字は、おそらくは叢雲が書いたものだろう。確か、今日の秘書艦も彼女であつたはずだ。

全体的な簡素さを見るに、突発的に準備したものだろうか。元々なかつたものを急遽準備したということは、よほど重要で、しかも長電話になるようなものということになる。十中八九、軍関係と見ていいだろう。

「ともかく静かに……」

なんとなしに呟いてから、そつと戸を開ける。静かに、しかし隠れるようなものでもない、堂々として入ってみると、すぐさまに三つの視線が向けられた。内訳は、秘書艦席に座る叢雲と、補佐席に座る睦月で二つ。そして、パソコンを広げ、ヘッドセットをつけた提督で一つだ。どうやら長電話ではなく、ウェブ会議か何かであつたらしい。確かに、その方が自然だ、と提督の様相に納得を覚える。

誰が入ったかを認識できたからか、叢雲は手元に、提督は画面へと、それぞれに視線を移した。必然、如月はこちらを見続けている姉の下に近寄る。

「報告書を出しに来ただけ、大丈夫？」

「大丈夫にゃしい」

静かにしていれば、と付け足す睦月に頷きつつ、如月は携帯していた哨戒任務の報告書を提出する。艦隊旗艦——単にローテーションで回ってきたものだ——としての締めの仕事だった。深海棲艦と遭遇してないため、きわめて簡素な文面しか記されていないが、区切りやはじめ、そして仕事に慣れるという意味では大事なものである。「……うん、オッケー。確かに受け取りました」

報告書を一読して、睦月が頷く。秘書艦補佐という立場にあるからか、その口調、ないし語尾は微妙に真面目だ。そんな姉の姿に少し笑みを浮かべつつ、如月は彼女に顔を近づける。

「それで、司令官はどなたとお話し中なの？」

流れるには自然だが、ややぶしつけな質問。姉妹だからという甘えと、秘匿事項なら入室も許されないと、という冷静な判断の複合に、睦月はなんでもなさそうに答える。

「二十八号鎮守府の、仁科提督にやしい。なんでも、提督の友達とか」「そうなんだ。お仕事関係、よね？」

「うん、演習の打ち合わせだって」

「演習？　また突然ねえ」

「要望があつたからな」

「あら、司令官。お話は終わりですか？」

突如混じった三つ目の声に、如月は視線を姉から提督に移す。彼女からの確認に、提督は邪魔そうにヘッドセットを外しながら、ああ、と同意を返す。

「とりあえず大枠は決まった。あとは向こうに要望書を送って、細かいところを詰めてやる」

「演習一つでも結構面倒ですねえ。もっとパパッとできないのにな？」

「互いに出す艦隊を決めて、どちらかの鎮守府に集合させて、だからな。日帰りか泊まりかで準備しなければいけないものが変わるし、泊りなら相手の側の補給を用意しないといかん。物資が書類上の値と実数で違う、などというのは組織としてよいものではない以上、面倒でもきっちり決めないと駄目ということだ。ものによってはその辺りをざっくりとも出来るんだが、これはな」

「例のシステムがあればまた変わるんでしょうけどねえ」

「例の？」

思わず疑問の声を漏らした如月に、叢雲が指を一つ立てながら答える。

「仮想演習システム、というのがあるのよ。装備中の艦装と接続させ



ることで、対象の艦娘に疑似体験をさせられるって代物でね。目の前には誰もいないんだけど、そこに誰かがいるように見せられるの。古い言い方をすれば、意図的な蜃気楼を作るって感じかしら。視覚以外の感覚も偽装するから、撃たれたらこっちも撃たれたと思うし、当たればやられたと思うわ」

「VR——仮想現実って奴にやしい？」

古いという例えに、新しいらしい——艦娘という存在の元が元故、艦娘は基本的に最新技術の類に疎いか、知識だけで実感があまりない——単語を睦月が返す。すると、提督は僅かに眉をひそめた後、どうだかなと軽く顔を振る。

「どっちかというとARやMR——拡張現実や複合現実とやらの方が近いのかもしれないが、正直私も詳しくは知らん。ともかく、これを使うことで、こちらの海にいながら他所の鎮守府——つまり遠くの海の相手と演習が出来るようになる。目の前に相手がいるという景色を見ながら、水上戦闘を行うというわけだ。傍から見れば何も無い空間に向かつて砲雷撃を仕掛けるわけだから、まあシミュールと言えバシミュールなんだが」

「虚像も含めて可視化できる装置もあるから、観戦する際はそっちを見ればいいしね。まあ便利なのは確かよ。処理の都合上どうしても発砲やらなんやらはするし、艦載機も飛ばさないといけないから、どうしても補給がいるって問題もあるけど。基本は演習用のそれだけどね」

「ほえー、すごい機械なんですね」

提督の説明に、感心の声を睦月が上げる。如月も、姉と同じような表情を浮かべつつ、すごいものだと頷く。

「そんなものまで開発されているなんて、この国の技術もだいぶ進んだのねえ」

「ああいや、確かに妖精たちの協力もあって、この国の技術は飛躍的に進歩しているが、仮想演習システムに関しては艦娘が使用することが前提だ。人間には使えない、という意味では汎用性は欠片もないぞ」  
「あら、そうなの？」

「艦娘の艦装システムを利用したものだからね。私たちって戦闘中——正確には艦装からアシストがある状態だと、より遠くが見えたり、聞こえたりするわよね？ あれって便宜上五感を強化している、って表現しているけど、実際には艦装が観測した情報を五感に乗せているのよ」

「……どういう意味にやしい？」

「実際の目で見る代わりに、艦装越しで見た光景を脳に直接出している、ということだ。双眼鏡越しに遠くを見る場合、目を通してレンズ越しの景色を見ることになるが、そのレンズと脳が直結しているといえれば分かるか？」

「何となくは分かるけど……私たちってそんな風になっているの？」

意外、と如月は首を傾げる。言うまでもなく、艦娘というのはかなり不可思議な存在だ。現代技術から見ても当然そうだし、なんなら如月達艦娘自身ですら、自分たちがどういう理屈で動いている、あるいは超常的な力を発揮しているのかというのは把握していない。あくまでそれが出来る、あるいはそれをしなければならぬ、ということを生まれながらに知っているというだけであるため、こういう細かい理屈や技術に関してはさっぱりなこと多い。

「所詮は人間なりに艦娘を研究し、解釈した結果、でしかないかもしれないがな。とはいえ、それならそれで納得が出来ることもある。木曾や天龍が良い例だ。あの二隻は眼帯をつけているが、それで戦闘含め何かしらの支障をきたしたことはない。普通ならまず遠近感がつかめないはずなのにな」

「言われてみれば、確かにそうにやしい。それを艦装でサポートしている」と

「天龍さん——と龍田さんや叢雲ちゃんは普段から頭に艦装をつけているけど、あれがそうなのね」

「たぶんな。木曾のこともあるし、実際は眼帯の方に何かあるのかもしれないが。あれ含め、艦娘は服も艦装の一種のようなものだからな」

「あ、それも初耳にやしい」

「艦装とリンクしていないときはほぼ普通の服だから、自覚がなくて仕方がない。戦闘関係もそうだが、あれもあれで季節によって特殊な衣服に変化するとかいう、妙な特性を持つているからな。まとめて艦娘独自の技術と見ないと説明がつかないそうだし」

「実際、妖精さんたちが艦娘ごとに同じ服を何着も見繕ってくれているしねえ。やったことないけど、普通の服を着た状態で艦装を召喚すると、服が普段のそれに変わるそうだし」

へえ、と睦月型の二人が、感心の声を漏らす。初めて知る情報がいくつも現れて、驚き疲れるかと思うほどだ。

「まあ、こういうことを調べる過程で、さっきの仮想演習システムのよなものが出来たわけだ。艦装から情報を受け取っているなら、艦装に好きな情報を入力すれば艦娘はそれを元に現実を見るのではないか、とかそういうアプローチだったのだろうか」

「……なんというか、よからぬことも出来そうね。変な映像を見せて混乱させるとか」

「艦装側のプロテクトを抜けられるならね。少なくとも、そこらの機械やプログラムじゃ無理よ」

「まったくないでもないらしいがな。過去にはその手のものが研究されていたことがあると聞いた覚えがある。仮想演習システムの構築の過程で出来たとかなんとか。人間で同様の経験をするために開発していた、なんてのも聞いたか」

「艦装の技術をもとに、人間もVRやらARやらを体験するためってことね」

「結局できなかつたそうだがな。あくまで艦娘の機構前提のシステムだから、人間が同じ経験をするのは無理だったとか。研究が進んでいるとはいえ、艦娘そのものの再現なんかはさっぱり出来ていないそうだから、無理からぬ話だろう。まあ、それ以外の技術に関しては完全に他国を置き去りにしているのだから、個人的にはそれで十分だと思うが」

なるほど、と提督の補足に対し、また姉妹で頷きを合わせる。

「……でも、そんなに凄いものには、何でうちにはないにやしい？」

思い出した、とばかりに睦月が問いを投げる。確かに、どんなシステムで、どういう風に動くのかというのは分かったが、どうしてここにはないのか、というのはまだ聞いていない。

「まだコストがそれなりにあるし、そもそも七号が出来てしばらく経った後に確立した技術だからな。量産に入ったところには、ここはもう封鎖されていたから、置かれる理由がなかった」

「そういえばここって一度閉まっていたんだっけ。じゃあうち以外には結構あるのかしら？」

「いや、確かに仮想演習システムは遠くの鎮守府の艦隊と演習できる利点があるが、単に経験を積みただけなら、今回みたいに近くの鎮守府と示し合わせればいい。だから他の鎮守府と距離が近い一桁台と二桁台、それに百番台の鎮守府はないことの方が多い。一二百番台、三百番台の鎮守府にはそれなりの割合であるらしいが、こっちはそもそも鎮守府の数自体がそこまで多くないから、総数で見ればそう多くは設置されていない、と聞いた覚えがある」

「はい、質問！ 百とか二百とか、鎮守府ってそんなに数があるの？」  
元氣よく手を上げながら、睦月が提督に問いを投げる。直前の会話から同じ疑問を感じた如月も、彼女にならうように首を傾げる。

「細かくは流石に覚えていないが、確か二百幾らかだったはずだ。だからまあ、多いと言えば多いだろうな」

「三百まであるのに、数としては二百なの？」

「……ああ、そっちな。ここで言う百だの二百だのは区分や種類のためのものであって、別に一から順々に鎮守府を作っていった結果、そこまで数が増えたという意味ではないぞ。Aの1とか、Bの2とか、そういう言い方なら分かりやすいか？」

「あ、そういうことなのね。じゃあ、頭の数字が違ふとどう変わるにゃしい？」

「ぎっくりという立地が違うのよ。うち含めた一桁、つまり一から九号までと、十号以降の二桁が本土沿岸。百号から始まる百番台が本国領海内、二百からが領海外、そして三百番台が他国領地沿岸。つまり全部で四種類あることになるわね。本土沿岸から始まって、領海

内、領海外、つて感じて段々と前線を押し上げていった感じ。だから今は二百と三百番、そして一部の百番台が主戦場になっていて、前線をさらに押し上げたり、深海棲艦たちの主力を封じ込めにかかったり、とやってみるみたいね」

「そして、うちみたいに沿岸にある鎮守府は、本土防衛に専念していると……でも、領海外に設置とかって、それ大丈夫なの？」

「基本的には他国、特に三百番台は対象国の許可を取って設置されているから問題ない。まあ、対深海棲艦戦において、我が国が大きな戦力を有しているから出来ることでもあるんだが」

「二部同盟国を除いて、他国にはまだ独自の艦娘がいないからね。その分、艦娘保有数が多いこの国が大きな力を持つていてるってわけ。まったく不可能ではないとはいえ、通常兵器で深海棲艦を倒すのは難しいから」

「まあ、もはやそこは政治の話だな。一介の軍人が考えることでもない」

そういうものだ、と提督が疲れたように背を椅子に預ける。ギシリ、と軽くきしむ音が響き、艦娘たちもそれぞれに脱力する。いささか、しゃべり過ぎた。そんな雰囲気、執務室を満たしている。

そんな静寂も、そう長くは続かなかつた。ゆっくりと、そして小さく、執務室の戸が開かれる音がしたからだ。

「あらっ？」

反射的に、その場の全員がそちらを向く。そこには、おそろおそろとばかりに覗き込んでいる長良の姿があった。

「あのー……今大丈夫ですか？」

「……ああ、メモが貼りっぱなしだったな。問題ない、ついでに戸のメモをはがしておいてくれ」

「はい、了解です」

一度引つ込んだ後、改めて長良が室内に足を踏み入れる。彼女はまっすぐに提督の前まで来て、小脇に抱えていた書類を手渡す。

「演習用の一次編成案です。神通や北上さんたちとまとめました。相手の編成に応じて変えられるように、いくつかパターンを決めていま

す」

「うむ」

「つて、長良さんたちで決めたの？ 司令官じゃなく？」

「私には細かな戦力計算は分からん。最終決定はするが、そこまでの筋道は本職の方が確かだ」

それでいいのだろうか、と色々な意味で突っ込みを入れたくなる発言に、如月は首を傾げる。そんな彼女をよそに、提督はマイペースに視線を上下させ、書類に目を通していく。

「……足柄軸の編成が多いわね」

提督の横合いから覗き込みながら、叢雲がそうこぼす。それに対し、提督は一つ頷きつつも、視線はそのままに答える。

「そもそも意見具申をしてきたのが足柄だからな。彼女が特に暴れられる編成でないと悪いだろう。中途半端に不満が残っても困る」

「だけど、空母なしじゃ演習で明らかに不利よ？ 相手も同じ条件ならいいでしょうけど、それはそれで相手に悪くないかしら」

「それはそうだが……」

ふと、提督の言葉が途切れた。何事か、と周囲が見守る中、彼はしばし思案するように口元を撫でた後、

「……やってみるか」

「と、いうと？」

叢雲の問いかけに、提督は大きく頷いてから口を開く。

「二十八号との演習の前に、まず七号所属の艦娘のみで演習を行おう」

「……本番前に身内同士で、つてことですか？」

「そうだ。貴官らが定めた演習案もこちらに流用する。可能だな？」

「念のために被りのない編成を二つ作ったりもしているので、それをいじれば出来ます」

「よし、では頼む」

「でもいいんですか？ そんなことやって」

時間とか規定とか、と睦月が首を傾げながら問う。それに答えたのは、思案から納得に表情を変え始めている叢雲だ。

「訓練とかの一環って形で処理できるから、鎮守府の規定的には問題

ないわ。普段は大枠でやっていることを、内側で細かく定めてやるっ  
てだけだし。時間に関しても、向こうもこちらも互いに初演習つての  
もあって、まとめるのにそこそこかかるだろうから、余裕はまあある  
のよね」

「そのラグを利用した『試し』という風になるか。バツサリと言ってし  
まうと、ここで水雷軸の編成を消費し、本番で航空戦力交じりの編成  
を当てる。あちらも私の知人とはいえ、やるならそれなりに『魅せて』  
おいた方が都合はいいからな」

「二応、他の鎮守府との演習は公式記録に残るしね。やれるなら確か  
に、本気の編成のほうが万一の際の受けはいいか。本番含めて二回、  
場合によっては三回くらいやれば、全体的な欲求不満も解消できるは  
ず、と」

叢雲の補足に、なるほどと如月は頷く。最初こそ突然のことに面食  
らったが、こうして説明されれば納得も行った。

「それで、そのお試し演習はいつやるんですか？」

その上で、大事な確認を提督に当てる。そんな如月からの問いに対  
し、提督は、

「――本日、準備が出来次第すぐにだ」

間髪入れることもなく、そう宣言した。

## 長良が演習の開始を宣言しました

中々に壮観な光景だ。海上に整列する二艦隊を見ながら、長良は素直にそう思う。ディスプレイ越し、大型艦なしの水雷戦隊とはいえ、十一隻もの艦娘が相対する様子は、言葉以上に見事なものがあつた。

「――防人だ。全艦、聞こえるか」

長良の隣に立つ提督が、手持ちのマイクから呼びかける。その声に、埠頭よりさらに遠く、湾外に並ぶ艦娘たちが、それぞれに反応を見せる。

「これより、演習開始にあたっての最終確認を行う。第一艦隊は旗艦足柄、随伴に那珂、龍田、叢雲、響。第二艦隊は旗艦川内、随伴に神通、天龍、陽炎、睦月、如月。勝利条件は片方の艦隊の全滅、夜戦なしの昼戦のみで決着とする。全艦、艀装、砲弾、魚雷が演習仕様であることを確認！」

『――確認完了！』

一拍、確認の時間を挟んだ後、十一の声が一斉に返る。艦娘の演習において、実戦と同じ装備が使われることはない。艀装そのものこそ同じであるものの、内部のシステム、並びに砲弾や魚雷が演習用のそれに置き換えられている。非殺傷用――少なくとも、艦娘や深海棲艦にとつては――に調整されたそれらは、攻撃が当たってもダメージは発生せず、しかし艦娘に対して実弾が当たった場合と同じ挙動をさせることができる。つまり、その直撃の度合いに応じ、小破や中破相当などと計算したうえで、主機の出力や障壁の強度に下方修正をかける形だ。これで相手を大破ないし轟沈判定まで追い込むことが、艦娘の演習における一般的な勝利条件である。

「よろしい。では全艦とも、悔いのない戦いを行うように」

返答に深く頷き、そして、提督が長良の方を見やる。それを受け、長良もまた自身のマイクを手に持ち、大きく息を吸う。

「――演習、開始!!」

一拍を挟んで放たれた、力強い彼女の宣言と共に、十一隻の艦娘が動き出した。二艦隊による艦隊運動はそれなりの速度を保ったもの



であったが、開始地点の距離は距離の都合、砲戦が始まるまでには、まだ多少の余裕がある。その隙に、長良たちも直前の会話を始める。

「始まりましたね」

「突貫だったが、なんとか形になるものだ。加賀、艦載機の制御は問題ないか？」

「はい、全機正常に飛行中。状況を見て距離を取ります」

提督の確認に、加賀が目を閉じたまま頷く。目の前のディスプレイ群——戦場を俯瞰、あるいは多方向から映しているそれらは、彼女の艦載機から送られてきた映像を元に行っている。艦娘たちであれば直接見る、あるいはデータリンクで情報を受け取る、ということが出来るが、提督にはそれが出来ない。この解消、ならびに演習の内容を記録として正式に残すために、わざわざ用意された出力装置だ。まあもつとも、今回は長良を始め待機している艦娘たちもまた、このディスプレイを主に見ている形なのだが。

「さて、どう動くかね？」

「素直に砲雷撃戦をする、となると、足柄のいる第一艦隊の方が有利そうだけど」

隼鷹、それに千歳が興味深げにつぶやく。次いで口を開いたのは、こんな時でもゆるりとした表情を崩さない北上だ。

「とはいえ、第一艦隊は第二艦隊より一隻少ないしね。長良、この数の差って何から決めたの？」

「重巡を三、軽巡を二、駆逐艦を一と戦闘能力をざっくり定め、それが釣り合うように、つてとこ。数を同数にしなかったのは、戦力では互角でも数としては劣る、あるいは勝るって状況にしたかったから」

「そういう経験は、負けてもいい演習のうちをやっておきたかったかな。それに多少数で負けているくらいのほうが、足柄も燃えるだろう。それに釣られて第二艦隊の方も——と、なれば理想か」

「なるほどね」

納得した、と北上が頷く。なお、彼女は改装を経て軽巡洋艦から重雷装巡洋艦に艦種が代わり、千歳と同じく甲標的を装備できるようになっている。これで特性ががらりと変わり、戦力として単純比較も出

来なかったため、今回は見学組に回された形になっていた。

「各艦の選定理由はあるのか？」

次いで問うたのは、姉と同じく見学組の木曾だ。この二人と長良、それに電が、現状の七号の水雷戦隊のなかで、今回留守番になった面子だった。

「特に大きいのはないかな。睦月と如月は一緒の方が効率いいかな、とか、天龍と龍田は敵同士の方が乗るかも、とか、そんな感じでざっくりと」

「練度とかは見なかったのか？」

「見たけど、初期の六隻以外大差ないから。正直、割合を決めた後は半分くじだよ」

とは言ったものの、実際にはもう少しの配慮をしている。例えば、今回の編成を決めた長良や神通、北上等に特別有利になるようなものを作らない、というのがそうだ。北上が艦種変更の都合で初戦自体、というのもここに当たるだろう。ただ、あまり意識して言及しておくことでもないので、長良もこの場で特に説明する気はない。

「それに、最終的には全員とも一回以上やる予定だしね。だったら別に良いかなって」

「……ならいいか」

適当だな、と言いたげな表情ではあったが、木曾は納得したような姿勢を取る。自分が今回出られなかった理由に、一応は納得できたからなのだろう。

「——そろそろ、第二艦隊が足柄さんの射程に入るのです」

じつと、ディスプレイを見つめていた電がつぶやく。その声に視線を正面に戻せば、確かにその通りの状況になっていた。第一艦隊は足柄を先頭とした単縦陣、第二艦隊は川内、神通をそれぞれ先頭に置いた複縦陣を取り、各艦隊で足並みを揃えられるほぼ上限の速度を出して接近している。これならばあと数秒もすれば、彼我の距離が足柄の有効射程範囲に収まるはずだ。

「さて、どう動くか」

見させてもらおう。そんな風に提督が声を漏らした直後、足柄が動

いた。他の艦娘が航行に注力する中、一人だけ主砲を前方に向け、砲撃を開始したのだ。

「撃ちだした。やっぱり先制攻撃するよな」

「とはいえ、まだ当たらないでしょう。安定性があまり良くない」

木曾の言葉に、加賀が否定を付け加える。彼女の言う通り、足柄の第一射は第二艦隊の中央、あるいは左右に着弾し、水柱を作る。直撃弾はおろか、至近弾も見受けられない。こちらでモニタリングしている、各艦娘の艤装の状態を見ても、それは明らかだ。その結果に、思わず長良は目を細める。

「角度がずれている。複縦陣に惑わされたかな」

「だけど、相対距離と速度の計算はいいんじゃないかね？」

そんな隼鷹の言葉を肯定するように、足柄の第二射が第二艦隊を襲う。やはり至近弾こそないが、先ほどのそれと比べ、より艦娘たちに近い位置に弾着していく。何隻か障壁を展開している者もいることから、第二艦隊の視点でも、中々危ない射撃だったようだ。

「やっぱり。次は当たるかな？」

「いや、この距離なら足柄が修正を適用するよりも、第二の射程に入るほうが早い。距離の利は生かせなかったか」

難しいものだ、と言いたげに提督が腕組みをする。直後、両艦隊の軽巡組が、ほぼ同時に発砲を開始する。このまま互いに直進し、全力での殴り合いになるか、と思う長良だったが、彼女の予想は大きく裏切られた。第一艦隊の方は確かに、砲撃と共に前進を続けたものの、第二艦隊の方は、第一射を撃ち放った後、第二射の気配もさせることなく、左右に大きく艦隊を分けたのである。

「第二が割れた!？」

「第一艦隊を挟むつもりの方です！」

千歳が声を上げ、電が補足する。二人の説明の通り、三対三に分かれた第二艦隊はそれぞれ、その勢いのまま、大きく弧を描いて外に回り、第一艦隊の左右を取るような艦隊運動を取っていた。これに虚を突かれたのか、あるいは左右どちらに撃つかを決めかねたのか、第一艦隊から砲弾が飛ぶ様子はない。第二艦隊の方も、移動に注力してい

るのか、発砲の気配はない。そのため、数十秒前が嘘のように、海上にはつかの間の静寂が訪れていた。

「複縦陣を取ったのはこれが理由か。だが、ここからどうするつもりだ……？」

「ひよつとして——」

包囲陣でも敷くつもりなのか。木曾の疑問に対し、そんなことを言いかけた長良だったが、それを遮るように突如として第二艦隊が発砲を再開する。位置取りは第一から見て斜め左右、両側を取って有利、とは判断しがたいタイミングだ。

「ここで発砲？」

「——そういうことか」

加賀の疑問の直後、提督が納得したように眉を動かす。何を、と彼に確認を取るよりも早く、砲撃が第一艦隊を襲う。二方向から放たれたそれらは、足柄の背後、二番艦の那珂との間に水柱を作った。自身への攻撃と察した那珂が、急ブレーキをかけることで回避した結果だ。いくつもの水柱が立つその光景に、長良もまた第二艦隊の思惑に気づく。

「分断狙い……！」

咄嗟に速度を下げた那珂以下五艦と、そのまま直進を続けた足柄。旗艦と随伴艦たちが、見事に分断されていた。状況に気づいた足柄が振り向き、おそらくは再合流を試みたのだろうが、それよりも第二艦隊の追撃の方が早い。

二つに分かれた六隻が、それぞれに第一艦隊へと殺到する。砲撃を織り交ぜながら近づく中、まず目を引いたのは天龍の動きだ。唯一砲撃を行わず、ただひたすらに直進を——突撃を続けた彼女は、その勢いそのままに突出し、三番艦の龍田にぶつかる。姉妹艦であるこの二隻は、砲雷撃用の艦装の他に、天龍は刀型、龍田は薙刀型の、近接用と分類されている武装を所持している。この二振りでの罅迫り合いを見せながら、維持していた加速と、その気迫をもって天龍が龍田を隊列から押し出した。

次いで——正確には天龍の突撃の途中から——今度はその逆サイ

ドから、川内が突出する。流石に二度目ということで、第一艦隊も砲撃を川内へと集中させようとしたが、残った第二艦隊からの砲撃支援がこれを阻害し、足並みを乱させる。

速度との併用ぎりぎり、というほどに上体を下げ、それでもなお迫る砲撃を障壁で強引に防ぎながら、川内が那珂に組み付く。肩口を那珂の腰元にぶち当てた彼女は、天龍よろしくその勢いを生かす形で、妹を無理やりに隊列から引きはがす。

そうして、その二隻がこじ開けた隙間に、神通と陽炎が飛び込んだ。前者は響と叢雲に、後者は足柄へと向き直り、そちらへと舵を取る。そのうえで、足柄の側には、左右から睦月と如月の砲撃が襲う。神通が古参駆逐艦二隻と等しく相対し、三隻の駆逐艦が足柄を包囲する形だった。

「また見事に分断されたな。完全に第二艦隊のペースだ」

やるなあ、と隼鷹が口笛を吹く。天龍と龍田、川内と那珂という、姉妹艦同士による一対一が二つ。神通と響、叢雲による一対二が一つ。そして陽炎、睦月、如月と足柄という三対一が一つ。どういう形になるか、と見守っていた演習は、第二艦隊の思惑の下、四つの戦場へと分かたれていた。

「単純な艦隊同士での正面戦闘ではなく、分断からの各個撃破を狙う形か。ガチの近接戦闘も混ぜてくるあたり、初戦から面白いもんを見せてくるじゃないか。一応、長良の戦力計算的にも釣り合っているから、そう分が悪いもんでもない……よな？」

「でしようね。足柄に駆逐組を当てたのも、軽巡で下手に重巡と砲撃戦をやるよりも、小回りの利く駆逐に雷撃を狙わせる方がいい、と判断じゃないかしら。上手く決まれば、三方からの魚雷で仕留められる」

「うーん……その戦法ならいつそ、当てるのは駆逐二隻でもいい気もするけどねえ。下手に拮抗状態を並べるより、何処かを偏らせて勝負をかけた方が良さそうに思える」

「そうですね。少なくとも、私ならばそのようにします」

軽巡級二隻と航空母艦二隻が、交互に状況を評価する。四隻の言葉

に領きながら、長良も自分の考えを述べる。

「あくまで予想だけど、その辺は川内たちの自負とか自信から来ているんじゃないかな。たぶん、自分なら相手を倒せる、あるいは抑え込める、つて見積もったんだと思う。その上で、第一艦隊の最大戦力である足柄を確実に落とすため、そこに陽炎たち全員を突っ込ませた」  
「足柄さんをまず落とす、そこから戦況を一気に取る、つてことですか？」

たぶん、と電からの確認に対し、肯定の言葉を投げる。その上で、更に指摘しておかなければならない点にも目を向ける。

「ただ、それが上手く行かなかつたら、負けるのは第二艦隊の方だろうね。足柄さんが三隻を翻弄し、更なる各個撃破の形にでも持ち込まれれば、第二艦隊の戦略は一気に瓦解する。たぶん、他の三つの戦場のどれでやられても、同じようなことになると思う」

「最初にどの組み合わせが決着をつけるか。それが勝敗に直結すると見て間違いないな。唯一覆せるとしたら、足柄が奮闘した場合のみくらいだが、流石に難しいだろう。このまま第二が流れを維持して勝つか、あるいは第一が逆転するか……」

そこまでまとめたところで、しかし、と提督は目を細め、デイスプレイを見つめる。こちらでの会話の合間に、あちらの戦況もほぼ最適化されている。その四つの戦場のうち、彼が視線を向けていたのは、天龍と龍田が作り出しているものだ。先ほどのからの継続か、何故か未だに格闘戦を繰り返している二隻を見ながら、提督は鼻を鳴らす。

「司令官さん、どうかしたのですか？」

「天龍と龍田の動きが、どうにも気にいらん。人の形をとっていることの強みを生かせていない」

「……えつと？」

「どうということだろう、と首を傾げた電に、提督はデイスプレイを軽く指しながら答える。

「間合いの取り方と得物の振り方が悪い。先ほどのものと言えば、天龍はもう少し踏み込んでから当たっても良かったし、龍田も龍田で内側に入り込まれ過ぎている。今にしても、互いの間合いを完全に把握

しきれていない。得物の振り方、それに身体の動かし方を理解しきれ  
ていないのが丸分かりだ」

「そこはまあ……そもそも、艦娘の戦闘で文字通りの近接戦を行うつ  
てことが珍しいですし」

真正面からの砲撃戦を『殴り合い』などと表現することはあるが、そ  
れはあくまでも比喻。実際に肉弾戦を行う、などということが艦娘と  
深海棲艦の戦いで起こることは、ほぼほぼありえないと言っているだ  
ろう。そんなことをするくらいなら砲雷撃の一つでも放った方が得  
だし、何よりもまず、相手方の深海棲艦がこれに乗ってくるわけがな  
いからだ。

だから、そういうことが不慣れでも仕方がない。そういうことを長  
良が擁護するものの、しかしと提督は納得を見せてはくれない。腰に  
下げた軍刀と、普段の身のこなしから察するに、提督はそれなりの使  
い手であるはず。その辺りの知識や経験が、提督の中に不満を生じさ  
せているのだろう。

「ああいう戦法を自分たちから取ってきたんだ。ならばそれ相応の振  
る舞いをしてくれねば、戦いを任せている側としても困る。不慣れな  
ことを軸に戦法を立てられても、ではそれだと指揮は取れんよ」

「まあ、確かにそれはそうかもしれないけどね。この演習然り、提案し  
たことを出来るようにするのが、日々の鍛錬なわけだし」

「そうだ。そもそも、不意打ち以降も近接戦を続けているというのも  
良くない。せめて合間に砲戦の一つも混ぜなければ、艦娘の強みすら  
消してしまうだろう。砲戦の合間に近接を入れない、ならそれでいい  
が、逆はあまりに勿体ない」

それに、と腕を組みながら、提督は続ける。

「最初の接触にしても、龍田や那珂は障壁を張るべきだっただろう。  
そうすれば、ああも上手く押し出されはしなかったはずだ。特に那珂  
は、ダメージを抑えるという意味でも、そうするべきだった」

そう言って、提督が目で那珂を示す。確かに、改めて見ると、デイ  
スプレイ越しの那珂には違和感がある。普段はどういう状況であれ、  
大体は笑みを浮かべている彼女が、今はよく見れば分かる程度には、

その顔にひきつりが浮かべている。おそらく、先ほどの激突の際にダメージを受けたのだろう。流石にタツクルに演習仕様も何もないから、見たままのそれが通ったのだろう。相對する川内にそのそぶりが見えないのは、攻撃した側と不意打ちを受けた側の違いか、あるいは直前の彼女だけ張っていた障壁の違いか。どちらにしても、提督の指摘は確かに一理ある。

「だけどき、それって難しくない？ そりや障壁そのものは瞬時に展開できるけどき、それってあくまで本人がそうしようと思つて張るもんで、自動でそうなるつてもんじゃないじゃん。高速で迫る砲弾に反応できているのは、あくまでそれが艦娘の本能みたいなもんだからで、その本能に引つかからない、砲撃も雷撃でもないただの突撃に、意識して障壁張るのは、慣れていないとちよつと厳しいよ。基本的に想定されていない上、完全に不意打ちでもあるわけだし。そもそも今回食らった二人は、実戦経験自体があまりないんだから、分かつていても面食らうつて」

「……む」

北上の反論に、提督は口元を隠しながら考え込む。さらなる反論がないのは、彼女の言葉に一定の納得を得たからだろう。それを援護するように、今度は加賀が口を開く。

「人の形をしているとはいえ、我々艦娘の本質はあくまで艦船。一口に近接戦と言つても、それは格闘技術の発揮の場というよりも、いわゆるラムアタックの延長線という方が近いでしょう。その認識の中では、障壁を張るにしても、格闘を行うにしても、適切な選択を取るのには確かに難しいかと。まあ、川内のアレを『ラムアタック』とするならば、那珂への言も正しいとは思いますが」

「いやあ、あれは無理だよ。そもそも、アタシらがただの軍艦だったかつての大戦を『ひと昔』とするならば、ラムアタック前提の戦闘なんて、それこそ『大昔』の話だ。そうそう上手くは出来ない、つて考える方が自然だよ。そりや、あくまで不慣れなだけだから、訓練を重ねれば出来るようになるんだろうけどさ」

艦娘にとつての、近接格闘という戦い方の立ち位置。加賀と隼鷹が



語ったそれに、提督しばしの沈黙の後、仕方ないとばかりに吐息を漏らす。

「……そうだな。自力での最適化は難しい以上、そこまで言うのは高望みか」

理解した、と提督はゆつくりと頷く。残念、あるいは無念というような動作の後、しかしすぐに、となれば、と彼は気を取り直したように続ける。

「二度目がないと言えない以上、何処かで本格的に覚えさせる必要があるな。武器持ちの天龍と龍田、それに叢雲辺りは半強制。後は希望者に……いや、川内の件もあるし、装備に限らずやる者はやるな。だとすれば全員に教導するべきか」

武器持ちどころか、しれつと全艦娘を対象にして、提督が一つの決定を下す。その言葉に、妙な圧のようなもの——出来るまでしごとく、とでも言いたげな迫力を感じ取り、思わず長良の頬がひきつる。訓練の類を苦にしない彼女ですら嫌な予感を覚えるくらいには、提督の言葉からは何やら尋常ではないものが感じられた。

「あはは……お手柔らかにお願いしますね」

「うむ、半端はせん」

……果たして、意図は通じているのだろうか。内心でそんな疑問を抱くものの、まあいいかと気持ちを切り替えて、長良は改めてディスプレイの方に目を向ける。

「……とりあえず、ここまでは完全に第二艦隊のペース。このまま第二が流れを取るか、第一艦隊が取り戻して逆転するか」

どっちになるかな、と長良——今回の演習の審判役は、楽しげに戦況を見守るのだった。

## 陽炎が演習を行いました

——ここまでは予定通り。事前の想定ピタリに状況が進んでいることに、第二艦隊の一人、陽炎は細く息を吐く。

現在、七号鎮守府における初の演習は、四つの戦場に分かれている。川内と那珂、天龍と龍田による、姉が妹を抑える二つの戦場。響、叢雲という古参駆逐艦二隻に挑む、神通の戦場。そして、第一艦隊の主力たる足柄と、睦月、如月を率いる陽炎の戦場だ。

その、四分割された海の一つで、陽炎は受け持ち相手である足柄を睨む。睦月、如月を加えた三対一という状況でありながら、彼女の顔には緊張の色はない。浮かべているのは、常と同じ勝気な笑み。元的好戦的な性格と、互いの実力——いや、性能の差が、足柄に気負いを感じさせないのだろう。

「ッー」

観察していたこちらに対し、抜き打ちのように放たれた砲弾を、陽炎は咄嗟に回避する。演習弾とはいえ、着弾の衝撃が完全に消えるわけではない。砲弾が海面に叩きつけられ、余波として生まれた大気の揺れが、展開した障壁越しに陽炎の全身を揺さぶる。直撃はしていないのに、という反射的な思考と、直撃を受けたら、という危惧が、彼女の肝を僅かに冷やす。

「このー」

そんな怖気と、波の揺れを受け止めながら、陽炎も反撃の一発を放つ。体勢が悪かったか、その一撃は足柄に回避を考慮させることもなく、その近くの海面に着弾した。先の、陽炎が受けた方と比べて、明らかに小さな水柱。足柄の足元を軽く揺らす程度の影響しか与えられないそれに、重巡と駆逐艦の間にある圧倒的な差を感じ、陽炎は思わず歯噛みする。

これでは——砲撃では有効打にならない。既に分かっていたはずのことを、陽炎は改めて理解する。

ならば、やることは一つ。水雷戦隊らしく——至近距離に入り込ん

で、必殺の雷撃を放つのみ。

「——行くわよ！」

『了解！』

陽炎の号令に、睦月型の二人が呼応する。三隻による、足柄を中心とした円運動。直線には動かず、曲線の航跡を作りながら、駆逐艦たちは少しずつ足柄へと迫る。的を絞られないようにしながら懐に入り込み、回避不能な一撃を叩きこむ。それこそが、水雷戦隊が本分とする、格上を屠るための戦法だ。

「そうよね！ そう来るわよねっ!!」

楽しげな声と共に、足柄が両手を広げ、周囲に砲撃を放つ。誰を、と狙いすませたものではない、大雑把な攻撃。直撃させる気配のないそれは、ここから改めて、三対一の戦いが始まるのだという区切りをつけるための、足柄からのメッセージだ。

そんな仕切り直しの初弾を回避したと同時に、睦月と如月が足柄に砲撃を放った。データリンクでの意思疎通なしの、無言での連携。一切の合図もなく発砲が重なったのは、姉妹艦のそれ故か。

とはいえ、足柄の防御を抜けるほどのものでもない。彼女が張った障壁により、あっさりとは防がれてしまう。だが、隙は出来た。そう思い、陽炎は魚雷を放つ。

当然、これで決まると思つてのものではない。まったく期待していなかったわけではないが、流石にタイミングが素直すぎる上、距離がまだ遠い。だから、足柄がその雷撃を躲すのを見ても、そう動揺はなかった。これでは、と思つていた冷静な思考が、そのまま続行された形だ。まあ、反射的な舌打ちは漏れたのだが。

「お返しー！」

そんな言葉と共に、こちらに対して足柄が雷撃を放つ。意趣返し、とばかりの攻撃だが、流石に見え見えだ。陽炎の時のように機を見て放ったわけでもない以上、いくら正確な雷撃でも、距離の差がそのまま回避の容易さに繋がる。

故に、これくらいならと、素直に雷撃を避けようとして、

「陽炎ちゃん、ストップ！」

突如としてぶつけられた如月の言葉に、陽炎は咄嗟に、半ばつんのめるように止まる。

直後、陽炎の正面に砲弾が飛び込み、新たな水柱を生み出す。何が、と思うまでもない。足柄が陽炎の回避方向を読み、予想位置に砲撃を打ち込んできたのだ。

「くっ!？」

このままではまずい。巻き上げられた海水を浴びながら、陽炎は飛びのくように大きく後ろに下がる。その数秒後、眼下を魚雷が抜けた。回避できた危機に肝を冷やししながら、発射点の方を見る。するとそこには、残念とばかりに首を傾げる足柄の姿があった。

「これだから重巡は……!？」

余裕ある敵の姿に、顔を吐き捨てるようにつぶやく。砲撃も雷撃も、どちらも必殺の一撃となりえるが故の同時攻撃。駆逐艦では真似できない戦法に、思わず口からもれたものだった。

そんな悪態が聞こえたわけでもないだろうが、眉を下げていた足柄が、ふとその表情を常に戻す。勝気、あるいは不敵と評するべき笑顔。顔を顰めるこちらとは対照的な、自分の勝利を信じているのだろうその表情は、艦種による性能的優位と、そこから来る精神的余裕が生んだものか。

それを直視した陽炎に、一つの感情が浮かぶ。それは、自分たちは所詮挑戦者なのだ、というような、反骨心とも言うようなもの。彼私の能力と全体的な戦略から見れば、陽炎たちが挑む側なのは当然であるのに、何故か、その感情を抑え込むことが出来ない。始まりは小さかったそれは、瞬く間に激情へと変じ、ついには――

「――やってやろうじゃないの!？」

叫び、前に出る。睦月と如月の驚愕を受けながら、胸の内に浮かんだ感情そのままに、陽炎は一直線に足柄へと迫る。

「いい、実にいいわ!？」

面食らった、という表情を見せたのも一瞬。凜猛な笑みと、心底染しげな声を上げながら、足柄がこちらに砲を向ける。だが、それが放たれるよりも早く、陽炎は自前の砲を撃つ。

「効かないわよ！」

「それでいいのよ！」

砲撃を障壁で防いだ足柄に、陽炎は声を張り上げて言い返す。その間も、陽炎からの砲撃は止まらない。そのどれもが直撃し、しかしただの一発も有効打となりえない。それでも、陽炎は進撃と砲撃を止めることはない。いつの間にか陽炎の後方に回っていた二隻も便乗し、駆逐艦たちの砲撃が足柄へと集中する。

「これなら見えないでしょ……！」

着弾の煙——演習弾ではこれも再現される——に包まれた足柄を見ながら、陽炎はその口角を上げる。いくら駆逐艦の砲撃が弱かろうとも、当たれば衝撃は生まれるし、煙なりなんなりも立つ。巨大で、全方位に『目』があつた、かつての軍艦であつたころならともかく、人の身を得た今となつては、それは大きな障害となる。それくらい、艦娘というのは小さく、そして軽い。

今や、足柄は完全に陽炎たちの砲撃に飲み込まれていた。煙と炎で視界は塞がれ、衝撃に砲撃姿勢を取り続けることもままならない。それが、今の足柄の状態だ。彼女はもはや、まっすぐ撃つということすら出来ていない。陽炎が直撃を受けていないのがその証拠だ。こちらの射撃から予想しているのか、確かに足柄の砲撃は陽炎のいる辺りを狙えているが、しかし、そのどれもが中心から外れている。故に、最短距離での前進しかしていないにも関わらず、陽炎は未だに健在であつた。

——何故、足柄は動かない？

感情のままに迫りつつ、しかし幾らか冷静さを取りもどした陽炎の理性が、足柄の対応に疑問を抱く。

動けば見失う、というのは分かる。下手に移動してしまえば、再度視界に収めるまでに距離を詰められる、と危惧するのはそうだろう。だが、動かなければそもそも見えないはずだ。大まかでも射線は合っているからよし、という判断だろうか。いや、それでもやはりおかしい。

何故、彼女は動かない。砲撃も、雷撃も、移動すらせず、何故に攻

撃を受け続けているのか。そんなことが出来るほど、今の状態は甘くないはずなのに、一体何故。

おかしい、と思いつつ陽炎は進む。ここまで来てしまおうともう止まらない。解消できない違和感を抱きつつ、そのまま突き抜けるしかないのだ。たとえば、その先に罠が待ち受けていようとも。

そして、

「——そこねー!」

陽炎が雷撃に最適なポイントにたどり着く、まさにその直前。一切の前触れなく、煙の中から足柄が飛び出した。前ではなく横、突っ込んでいる陽炎から見て、斜め前方の位置。その場所で足柄が、こちらに向かって主砲を構える。

「っ!?!」

思わず、息をのむ。読まれていたのだ。水雷戦隊の戦法を、陽炎が至近まで来ることを。だから、どうしようとも視野を塞がれると判断し、後の先を取ることに決めた。そして、目を捨てた状態で、耳で音を聞き、皮膚で揺れを感じ、陽炎が近づいてくるのを待ち、ついに機を生かした。まさしく彼女は賭けに勝ったのだ。

なんという度胸だろう。ほんの少しでもタイミングを計り間違えれば、そのまま沈められるというのに。性能面で格上の相手が普通は取らない、捨て身の戦法。まったくもって感服するほかにない。

だが——陽炎にも意地がある。

「だったらー!」

こと度胸勝負となれば、水雷戦隊に負けは許されない。身を低くし、なおも突撃をする。足柄の射線を読み、その下をくぐるように接近し、至近距離で雷撃を放つ。数秒前よりもさらに危険で、だからこそ、この場での唯一の勝ち筋を取りに行く。

『っ!!』

言葉なく、二隻の艦娘がぶつかる。砲撃音と雷撃音が生まれ、直後に大きな爆発音を導いた。これまでと比べても、ひととき大きな水柱が上がり、二人を完全に飲み込む。

一瞬の静寂。そして、海水が水面を叩く音と共に、水柱が収まった

時、

「……くっ」

「はあ、はあ、はあ……」

立っていたのは、二隻。中破の判定を受けた足柄と、大きく肩を上  
下させながらも、いまだ無傷の陽炎。極限の状態で水雷戦隊の——陽  
炎型ネームシップの意地を見せた、そんな結果であった。

「これで——」

本当に勝ち。そんな言葉を紡ぎながら、陽炎は最後の魚雷を放とう  
とする。演習仕様の疑似損傷による影響か、足柄の動きは鈍い。間違  
いなくこれでトドメ、と勝利を確信し——

『——陽炎さん、回避してください!!』

「えっ——ぐわっ!!?」

突然の指示と、背後からの衝撃。神通より通信越しに声をかけられ  
た直後、勝利を得かけていた陽炎の全身が、大きく揺さぶられる。何  
事、と混乱する陽炎に、艀装からの報告が走る。

「轟沈判定……!?! どういうこと?!?」

沈められた、という事実には、陽炎は困惑しつつデータリンクに収集  
されているログを探る。そして、数秒の検索の末、

「——叢雲からの魚雷?!? 神通さんを狙ったものに当たった!?!」

不慮の事故、としか言いようがない事象に、陽炎は大きく目を見開  
く。まさか、他の戦場からの流れ弾が、このタイミングでこちらに直  
撃するなどは。ありえない、と否定しても、しかし、今の自身の状  
況が、その不運が起こったと告げている。

『陽炎、轟沈判定。即時撤収してください』

「……………了解」

追い打ちのように、審判役の長良から撤退の指示が出る。どうにも  
納得がいかないが、なつてしまった以上はしようがないのだろう。こ  
ちらと同じ心境か、惘然とした表情を見せる足柄に対し、同じような  
顔を返した後、艀装を演習仕様から通常のそれに切り替えて移動を開  
始する。

「はあ……」

ある程度距離を取り、背後から戦闘音が再び発せられ始めた頃合いで、陽炎は大きいためいきをついた。せめて、足柄に負けていたのなら、もう少し納得も出来たのだが。なんとも言えぬ結末に、どうにも肩が落ちる。

『——陽炎、聞こえるか?』

「司令?」

落ち込む陽炎に、提督からの通信が入った。小言でも、と一瞬思い、そういう性格でもないか、とすぐに考え直す。

『初の演習、どうだったか』

「ん……まあ、見ての通りってところ。もう少し上手くやりたかったんだけど」

『運が悪かったと言ってはやりたいのだが……他の戦況も見ていれば防げたことだ、と言わざるを得ないか』

「そこは立場もあるし、そうだよ。これが実戦だったら、そんなの意味ないわけだし」

慰めてはくれぬ提督に、むしろその方がいいと陽炎は小さく笑う。ここで下手に運のせいにされる方が、より傷をえぐられたことだろう。納得の有無とは関係ない、ある種の矜持だった。

「……ねえ、司令からは、私の行動はどう見えた?」

『戦場を分断するまでは文句がない、少なくとも貴官にはな。砲撃戦から雷撃戦までの移行も、まあ大きな問題はない。良くないのは、一人で突っ込んだ辺りか』

「うん、ちよつと頭に血が上っちゃった」

『そうだな、感情的にあれをやったのはマイナスだった。あれを理性的にやり、なおかつ自分から僚艦に支援を頼めれば良かっただろう』

「独断専行、だったもんね」

『分かっているならいい。次は上手くやれ』

「……上手く?」

予想の範囲外の言葉に、陽炎は思わず足を止め、反射的に聞き返す。もうやるなという指示を出されるか、と考えていたのだが、これは予想外だ。



『そう、上手く、だ。確かに、目の前の相手にのみ集中したのはあまり良くなかった。そういうのは、敵が一隻だけの時か、あるいはいつそ、自分が一人にいる時にだけやるものだ。たとえ距離があろうとも、自分と相手以外に誰かがいる場合は、僅かでもそちらに集中を割り振っておかないと、死角から容易に撃たれるだけだ……だが』

だが、ともう一度、より強く提督は言う。

『敵を倒す、という目的の範疇なら、あの場での呐喊も、まったくくない選択ではない。周囲への警戒を遼艦に割り振り、自分はただひたすらに中枢を狙うというのは、嵌まれば確かに強い手だ』

だから、と提督が告げる。

『その辺りを、上手くやってみろ。状況を、仲間と敵をよく見て、それを十全に生かした対応を見つけ、共有しろ。そうすれば、お前は——私たちは、必ず勝てる』

そのはずだ、とほんの少しだけ柔らかく、あるいは茶化してくれているのだろうか、と思えるような口調で付け加えた提督に、陽炎は大きく目を見開く。そう、特別なことを言われたわけでもないのに、不思議と、その言葉は陽炎の心を打った。

『それが、自身や仲間を犠牲にするものでない限り、私は貴官が見つけたものを尊重する。それが、どの場でも確実に生き延びられるようにするものか、あるいは死中に活を見出す類のものか。どういふものであれ、貴官の得手をどう伸ばすかは貴官に任せる。だから——極めてみせる陽炎』

「……りよーかい」

『うむ、では後でな』

——ああ、なんと単純なのだろうか。

通信を切り、陽炎は小さく視線を下げる。かけられた言葉の数々は、そう深いものではない。ただ、望んでいなかった言葉を避けられ、思ってもみなかった選択を告げられ、そして最後に、期待の意思とともに発破をかけられた。ただ、それだけ。それだけだというのに——

「本当………本当に、単純だ」

なんとも、清々しい気分が、自分の中を満たしていた。先の戦闘の

悔しさが、まるで方向性の違う力へと変じている。ただ、提督からいくらか言葉をかけられただけなのに、今の陽炎は、数分前の彼女とまったく違っている。その変化の度合いは、いささか単純すぎないかと、これを知った誰かにかかわれそうなほどだ。

「——だけど、これが案外、悪くないのよね」

そう、小さく呟きながら、陽炎は強く笑う。そして、先にある埠頭に視線を向け、そこで待っているだろう『人』の姿を思い浮かべながら、陽炎はまた歩みを始めるのであった。

## 睦月は提督の意外な強さを知りました

——走る。ただひたすらに、走る。

絶対数の少なさ故に、早朝の鎮守府は非常に静かで、澄んでいた。そんな、微かに肌寒さのある空気の中、睦月はただ一人、静かに走る。目的地があつて、というものではない。敷地内を適当に走る、ただのランニングだ。もっとも、それも名目上のこと。良くも悪くも肉体的変化が起こりにくい艦娘にとって、トレーニングの類はさして意味のあることではない。それで筋肉がつくわけでもないし、そもそも——肉体面に限ればの話だが——艦娘の戦闘において、艤装の性能以外は要素足りえないからだ。

だから、どうして走っているのかと言えば、それはただ単に『そうした方がいいと思つたから』でしかない。ただ、漫然と座しているよりは有意義である——あるいはそうすれば何かが進むと——そんな風に思つたからこそ、睦月はただ一人、静かに走っていた。

そんな、孤独なランニングの中で彼女の頭を占めるのは、先の演習の結果だった。

『——この勝負、第二艦隊の勝ちとする！』

昨日行われた、最初の演習。全体的な勝敗において、睦月たち第二艦隊は勝利を収めることはできた。ただし、その過程においては後悔がある。陽炎が離脱した後、睦月と如月は結局、独力で足柄を打ち倒すことが出来なかつたからだ。どちらも損傷を受けこそしなかつたものの、中破した足柄相手に攻めきれず、最終的には、自分の戦場を打破し、援護に来た川内がそのまま打ち倒し、決着となつた形だ。

——その結果に、自身のふがいなさに、睦月は未だ、納得を得ていない。

確かに、個々の能力に差はあつた。艦種違いの足柄は当然として、駆逐艦同士でも陽炎型と睦月型は性能にかなりの差がある。はつきりと言つてしまえば、睦月型は『弱い部類に入る』艦娘だ。故に、あそこまで追い込んでおいてなお、決めきれないということもあるだろう。事実、そうなつたのだ。

だが——だが、である。はたして、それでよしと納得してよいものだろうか。あるいは、納得できるだろうか。

——答えは、否だ。否以外の、何があるうか。

あの時、陽炎を援護しきれなかった後悔。その後において、僅かに手が届かず、敗北してしまつた無力感。それを得てなお、弱いままでいいなどと、受け入れていいわけがない。弱かろうが、古かろうが、艦娘であるならば、戦うことが、勝つことが——守ることが本分なのだから。

故に、思うことは、ただ一つ。

——強くなりしたい。

そんな決意を胸に、睦月はただ、ひたすらに走り続け——

「——にゃ？」

唐突に、一人だけの世界から、現実へと引き戻された。鎮守府内の訓練施設、確か『道場』と仮呼称されていた場所から、喧騒が聞こえたからである。

「えーつと……誰かいるのかな？」

艦娘だからこそ聞こえた程度の音量だったが、妙に活気が感じられる。自分と同じように、朝の自主訓練をしているのだろうか、と思いい、なんとなしに上がり、のぞき込む。

すると、そこには木刀を構えた二人の艦娘——天龍と足柄の後ろ姿があつた。やや荒く、そして深く息をしている様子から、それなりに疲労しているのだろう。その背から感じられる気配を見ても、よほどの真剣勝負を重ねたことが察せられる。

だが、それ以上に目を引くのは、その二人と相対して木刀を構えている、提督の姿だ。普段着のままの二人と違い、道着をまとつた彼は、得物を正眼に構えながら、悠然と二人を見据えている。呼吸には特に乱れも見られず、提督が艦娘二人を圧倒している側ということを容易に察することが出来る。常の立ち姿や、普段から軍刀を腰に下げていることから薄々と感じていたが、どうやら彼は相当な使い手であるようだ。

「……ん、睦月じゃない」

「あら。おはよう、睦月ちゃん」

そこまですを観察したところで、ふと横合いから声をかけられた。見れば、道場の壁際で叢雲と龍田が正座をしている。こちらも普段着のままだが、傍らには木製の薙刀らしきものが見受けられる。

「おはようにやしい。早速だけど、説明欲しいのね」

「見ての通り、格闘の演習よ。とりあえず一通りやって、今は二対一の変則戦ってとこ」

「そんなのをやっていたなんて、初耳なんだけど？」

「ほぼ突発的に、目についた面子でやってみたって形だから。まあ試しよ、試し。これで上手く固まったら、今度はアンタたちにもやらせるかもね」

「うーん、この体格で上手くやれるかにやあ」

「やりようによるんじゃない？ まったく素人つてわけでもないんだし」

「そうでしょ？ と投げかける叢雲に、ううんと睦月は腕を組む。

基本的に艦娘というものは、ある程度の知識や、今の世のおおまかな常識などを得た状態で、建造ないしドロップされる。最初から、見た目相応かそれ以上の知識を得た状態で生まれる、と言い換えてもいいだろう。

これらの内容は——艦娘それぞれで多少の振れ幅はあるが——ある程度共通しており、その中には戦闘関連の知識も含まれる。戦術や戦略、という頭を使うものから、射撃や格闘といった身体を使うものまで、それなりに広い。先の叢雲の問いかけはこの後者を指しているのだ。

ただ、これらの知識があるからといって、それをすぐに生かせるとは限らない。何故なら、それらの知識に対して、艦娘ごとに実感を覚えていてる者といない者がいるからだ。つまり、対象の知識に対して『そうである』と納得している者と、『そうであるらしい』と知っているだけの者に分かれているのだ。そのため、身体で覚えている人と頭だけで理解している人では同じことが出来ないように、艦娘たちもそれらの知識を実践するにあたって差異が出る、ということである。

この二つの違いだが、これはかつての乗組員たちの記憶を持っているかどうか、と言われている。実感を覚えている者は知識と一緒に彼らの記憶を得ており、覚えていない方は彼らの知識だけを得ている、という解釈だ。知識を得た過程を覚えているかどうか、と言い換えてもいいかもしれない。

この説は実際に、前者の艦娘たちがかつての乗組員たちの記憶があると主張しているために生まれたものだ。特に、彼女らは他の艦娘が知らないような専門知識を持っている場合があり、なおかつそれがかつての時代だからこそそのものであることが多いため、おそらくはそういうことなのだろうと、漠然と支持されている。まあもつとも、では覚えている艦娘と覚えていない艦娘の違いは何か、というのは分かっているため、どうにもしりすぼみな話でもあるのだが。

そして、これらの知識区分の内、睦月は後者、つまり記憶がない側にあたる。それこそ、先の説を聞いた時にも、他の艦娘はそうなのか、と特に感慨なく頷いたほどだ。よくは分からないが、とりあえず知っている。睦月にとって自分が持つ知識というのは、結局その程度ではない。だから、叢雲の確認に対しても、知ってはいても活用は難しい、と悩ましい反応を示す以外になかったのである。

「まあ、でしょうね。どうも、うちはそういうタイプみたいだし」「そういうっ？」

知っていた、とばかりの反応を返した叢雲に、睦月はやや首をかしげる。

「艦娘の知識と記憶の関係だけど、鎮守府によって偏ることが多いよ。この鎮守府では記憶持ち、あの鎮守府では知識のみ、って感じだね。今ここに居る面子は全員後者だから、たぶん七号鎮守府自体がそちら側なんだと思うわ」

「そういうものがあるんだ」  
驚き、龍田の方に視線を向ける。すると、彼女もまた同意の頷きを返す。

「私も、なんとなくこれの振り方は分かってても、どうするのがいいのとか、どう動きたくなるのかとかは全く分からないのよねえ。おかげで

なかなか形にならなくて」

そう言つて、龍田は傍らの薙刀を撫でる。

「その辺り、天龍ちゃんは強いわよねえ。とりあえず動いて引き寄せ  
るタイプだから——つと」

「ぐはっ——ぐえっ！」

話を切るように、色気のない声と共に吹っ飛んできた天龍が、龍田の横を通つて壁に叩きつけられる。常人が見れば慌てそうな勢いだったが、この場にいる面子の大半は艦娘であり、自分たちの頑強さはよく知っている。そのため、睦月はその見事な吹っ飛び具合にむしろ感心し、叢雲と龍田に至つてはちらりと視線を向けるくらいの反応しか見せない。どころか、まるで何もなかったかのように話を再開する始末だった。

「私も、中々しつくりこないのよねえ。頭を使う方じゃ特に不便はないんだけど、こっちはどうにも難しくつて」

「そういえば、その傾向云々つて性格とかでも出るつて本当？ この前、工廠の妖精さんたちがそんなことを言つていた気がするんだけど」

「まあ、そうね。そういうのもないことはないわね。性格はちよつと違ふかもしれないけど、例えば全体的に冷静な艦娘が多いとか、逆に熱血ばかりとか、そういうのも鎮守府によつて『色』が出ることも多いらしいわ。土地が建造とかに関係しているとか、提督の氣質が妖精に影響を与えているとか、説だけはあつて答えが出てない類の話だけど」

「ふーん、じゃあここにも他にそういう傾向があるのかな？」

「比較的理性的な娘が多い気はするけれど……分らないわよねえ」

ほんわかと首をかしげる龍田に、そうだねと叢雲と一緒に同意を示す。そんなところで、先ほど吹っ飛んできた天龍が、よれよれと立ち上がった。

「お前ら……流石に反応が薄くないか……？」

「いや、そりや何回も吹っ飛んだのを見ればこうもなるわよ。なんなら私たちだつて似たようなものだったんだし」

「こつち、長物なのにねえ。切り結んだ状態から吹き飛ばされるのはまだしも、どうやったたらあそこから腕を掴んで投げられるのかしら」

「……あれ？　もしかして、一人も勝ててないの？」

まさか、と睦月が問いかけると、三人は一切のずれもなく同時に頷く。

「指導混じり、というのはそうなんだけどね。それでもまあ、あそこまで圧倒的だと逆に笑うわ」

「流石に、腕力的な意味では全力じゃねえけどな。ワンチャン、それでも受け流されるかもしれないってのが末恐ろしいが」

「——無茶を言うな。貴官らが本気の膂力で打ち込んできたなら、避ける以外の選択がないに決まっているだろう」

そこで、提督の声が会話に混じった。見ると、木刀を肩に当てた態勢で立つ提督と、その奥で床に突っ伏している足柄の姿がある。よほど良い一撃をもらったのか、足柄は倒れこんだ状態のまま、ピクリとも動くそぶりがない。提督に息切れの一つもする様子がないところを見るに、聞いた通り彼我の実力差は圧倒的であるらしい。

「あ、あはようございます、提督。実は結構強かったんだね」

「それなりに、だ。艤装からのアシストありならこうはならん」

「なしでもそこそこ強いはずなんだけどなあ、艦娘は」

「技術勝負なら余地はあるということだ」

「流石は刀剣類の携帯許可持ちよね」

「携帯許可？」

「銃刀法は知っていますでしょ？　あれを限定的に無視できる権利のことよ」

「……あの軍刀、鎮守府内だから持ち歩いているわけじゃなかったの？」

龍田の疑問に、提督は木刀で肩を叩きながら答える。

「自分で言うのもなんだが……あれは提督学校において、そちらの関係の成績優秀者だけが持てるものだ。貴官の言う通り、軍の敷地内ならともかく、一般の提督や軍人は公道での携帯はできないようになっている。その代わり、拳銃の方は比較的制限が緩く、大体の者は所持



している。それこそ、素人と大差ない提督ですら、公務中であれば携帯が可能だし、人によってはプライベートでも持ち歩ける。まあ実際に使ったり、変に一般人に見せたりしたら、後で処分を受けることもあるが」

「じゃあ提督は拳銃も持っているの?」

「ああ、普段は懐にしまっている」

「軍人だからって、そこまで出来るもんなのか?」

「基本はそうなんだが、少し前にちよつとしたごたごたがあつてな……」

「ごたごた?」

「諸事情でね、一部地域なんかで限定的に治安が悪くなったのよ。それに関連して軍関係者——特に鎮守府を出入りしている者が襲われることがあつて」

「それで、自衛の強化ということで軍人の武器の携帯が許可されるようになったわけだ。かつての大戦からこちら、元々軍の影響力は強かったし、深海棲艦が出現するようになってからは多少の無茶も利くようになった、とか。その辺りは私も詳しくないがね」

「艦娘からの提督、それでなくても護国のために軍人の身は大事、つてわけか」

そういうことだ、と天龍のまとめに、提督と叢雲が揃って頷く。色々あるのだなあ、と今の軍人の武器事情にそんなことも思いつつ、それではと睦月は口を開く。

「じゃあ、そのごだごだつてなんにやしい? 提督関連なら、私たちも知っていた方が良い気がするのね」

「それはまあ、道理ね。どうする?」

「……まあ、鎮守府内の資料なり、支給品の端末で調べれば分かるか。私もざつくりとしか知らないが——」

と、思案顔を挟みつつ、提督が説明を始めようとしたところで、

「——っ、まだまだあー!」

突然の咆哮と、何かが砕けたような轟音。何事か、と見れば、先ほどまで寝転がっていた足柄が、提督に向かって一直線に駆けだしてい

る。ようやくの覚醒から、意識があつた直前の状況を再開——リベンジをしに来たらしい。

「ちよつ、足柄さん!？」

しかし流石に動きが速すぎる。常人であれば出せないだろう、という速度で迫り、木刀を振り上げる足柄に、睦月は思わず驚愕の声を上げる。艦娘相手ならともかく、人間に相手にその勢いで当たれば、怪我程度では済まない可能性が高い。それはまずい、と止めようとして

「——つせい!」

「にゃあつ!？」

思わず伸ばした手の先で、素早く振り向いた提督自身が、見事足柄を投げ飛ばした。その反応速度と、動作の淀みのなさは、一瞬状況を忘れ、つい感嘆してしまうほどに美しかった。あるいは、睦月以外もそう感じたのか、視界の端に映る叢雲たちもまた、介入のために踏み込もうとした姿勢のままに固まっている。その隣を——空中での上下一回転を挟みつつ——足柄が通り過ぎ、その勢いのままに背中から壁に叩きつけられた。

「がっ——いった!!?」

背中への、そして落下からの頭部への一撃。いつそギヤグかなにかのような流れで発されたその鈍い二音と、その痛みから転げまわる足柄に、ハッと睦月たちの時が動き出す。

「……すつご」

「え、あれに反応できるのかよ」

「提督、本当にすごいよね……」

「いや……今のはほとんど無意識だったんだが。まさかあそこまで身体が動くとは」

提督自身ですら予想外だったのか、珍しく困惑十割の表情を浮かべる彼に、睦月は尊敬の視線を向ける。

あるいは——これが自分の求めていたものではないか。こういうことが出来るようになれば、より強くなれるのではないか。そんな風に、睦月は感じ取った。本来の艦娘のあり方としては、これはかな

り異質な思考だろう。砲雷撃戦を主とする艦娘に、文字通りの格闘戦を生かす余地など、本来であれば、ない。

だが、魅入られてしまった。提督が今見せたあの技に、睦月の心は大きな衝撃を受けていた。だから思わず、状況も忘れて師事を請おうとし――

「な・に・を――やっているの、アンタは！」

それよりも先に、叢雲の怒声が睦月の耳を打った。思わずハツと――浸っていた熱から覚めて――そちらを見れば、そこでは未だふらふらとする足柄に対し、ためらいなくこぶしを振り下ろす彼女の姿があった。

「いっ――た!？」

叢雲の拳が足柄の脳天に突き刺さり、一応は生物同士である、とは思えぬほどの鈍い轟音が鳴り響く。見た目以上の衝撃があったか、一瞬白目をむいた後、足柄が頭を両の手で押さえる。だが、そんな足柄に配慮するそぶりもなく、叢雲は彼女の襟首を掴み上げる。

その剣幕に、熱に浮かれかけていた睦月の思考が平常に戻る。その極端な温度差に、直前の思考を思い出せなくなる睦月の前で、叢雲が足柄の胸倉をつかみ上げ、不自然なほどの笑顔で問いかける。

「ねえ、足柄？ 艦装を展開中の艦娘は提督と物理的接触してはならない、と決まっているのは知っているわよねえ？ それはなんでだったかしら？」

常の叢雲が見せないような、とびっきりの笑顔。だが、その目には光がなく、その背からは尋常ではないほどの圧が発せられている。そこに可憐はなく、ただひたすらに苛烈。怒髪天を突く一人の艦娘の姿が、そこにはあった。

「……ぎ、擬装を展開しているときは、パワーアシストがオンになっているから」

「そう、つまり擬装展開中、私たちはデフォで怪力になっているということ。基本的には意識して制御できているけれど、無意識に制御が緩む可能性はある。気を抜いているときに握手を求められ、うっかり相手の手を握りつぶす、とかね。そういうしたことによる事故が起きない

ように、擬装展開中は人間に近づきすぎない決まりになっている」

「そうよね、と叢雲が笑顔で首をかしげる。文句のないほどの美少女、という様であるにもかかわらず、彼女と至近距離にある足柄の顔には、冷汗以外のものが浮かんでいない。いや、それは睦月も——そして、天龍と龍田もまた、同じ。この場にいるすべての艦娘が、叢雲の発する怒気に飲み込まれている。」

「とはいえ、擬装を展開していなくても、接続自体があるならば、アシストは受けられるようになっていくわ。だから非戦闘時にも十分な自衛は出来るし、その膂力を日々の雑務に生かすこともできる——そう、意識すれば、ね？」

叢雲が言葉を紡ぐほどに、足柄の顔が蒼白に転じていく。その内容に、ではない。彼女の全身から発される圧が——無関係の睦月ですら、まったく近づけないほどのそれが——あの勇猛な足柄をすら恐怖させているのだ。

「今、アンタは擬装を展開していない。だけど、さっきの踏み込みは明らかに、擬装からのアシストを受けたものだった。ええ、ええ——それはつまり、意識して擬装を使ったということ。司令官相手に、負ける気を発揮したと、そういうことよね？」

そう言って、特大の笑みを叢雲が浮かべる。だが、それが彼女の表情を占めていたのは、瞬く間のこと。

次の瞬間には、彼女は羅刹もかくやという形相で、再度拳を振りかぶり——

「ちよつと負けた程度で、提督を殺しにかかる艦娘が何処にいるかあ——!!」

もう一度、足柄の頭部を発生源とした轟音が、睦月たちの耳を打った。その剣幕に思わず身をすくめる中、足柄はくらくらと頭を揺らした後、ボタンとその場に倒れこむ。それと、フンと鼻を鳴らす叢雲に、睦月の脳裏をノックアウトという言葉が占める。

「……はあ、まったく」

そんな中、一人まるで動じる様子を見せなかった提督が、呆れたように息を吐いて、

「とりあえず——今日一杯は独房入りな」

細かい沙汰は後で下す。そう告げる提督に、聞こえていないと思うけど、などと突っ込みを入れられる度胸を、残念ながら睦月は持ち合わせていないのであった。

龍田は艦娘の事情について知りました

「——と、まあ、そういう流れだったわけよ」

「バカだろ」

昼下がり、執務室に備え付けられたソファにて、呆れに満ちた感想が吐かれた。今朝の出来事を聞いた木曾からの返しに、だよなあ、という表情を語り手である天龍も浮かべ、互いに苦笑する。その二人の様を見て、龍田はつい笑みをこぼす。

「ふふ……でも、天龍ちゃんもそういうことをしそうな気配があったわよ?」

「ええ? そうだったかあ?」

そうよ、とあの時に感じた姉妹としての見識を伝えると、天龍は覚えのなさそうな顔で首をひねる。

「やらないでくれてよかったわ。アンタまでやらかしていたら、シフトの調整が一層面倒になっていた」

パソコンの画面を見ながら、叢雲が不機嫌そうに言う。まったく迷惑な、と未だに足柄に対して怒っている様子の彼女に、提督が珍しく困ったように眉を寄せる。

「そろそろ機嫌を直したらどうだ? 貴官も、事情は分かっているんだろう?」

何やら含みのある言い回しに、龍田は首をかしげる。対して、その意図を読み取ったのか、叢雲は何らテンションを変えることなく——むしろ、より苛烈になった気もする——提督の方に向き直ってから答える。

「そりゃ、分かってはいますけどね。あまり言及したくもないけど、あれで司令官が怪我をしていた場合、それこそ解体処分もありえたのよ? なあなあにもできないでしょうに」

「上官への暴力沙汰ってなればそうだろうなあ」

天井を見上げながら、木曾が叢雲の言葉に同意する。そんな彼女をちらと見てから、提督はまた叢雲の方に視線を戻し、口を開く。

「とはいえ、被害は道場の床が壊れた程度なんだ。そこまで目くじら

を立て続ける必要もあるまい」

「床だけならよかつたんだけどね。きつかけがきつかけとなれば、そこまでお目こぼしも良くないでしょ」

「よう分からんが、これは提督の方が甘いように聞こえるけどな。普段の提督ならもつとかつちりやるか、もうちよい『派手』にやるだろ。いやまあ、オレの時とは違うだろ、つてのはそうなんだろうが……」

そう、天龍が突っ込む——姉妹艦として、龍田も大雑把だがその辺りの事情は把握していた——と、提督はまるで直撃弾を食らったかのように上体を後ろにそらした。非を感じている、あるいはバツが悪いものがある、という風に読み取れるその反応は、彼にしては珍しいものだ。

「貴官とは前提が違う、というのも当然あるが……」

そこで、提督が言葉を切る。おや、と思つて見ると、彼は何事かを考えこむように口元を手で覆っている。

「どうかしたの？」

「言葉を選んでいるんですよ。あれも予定調和だった、なんて軽々に言える立場でもないし」

「予定調和……って、ああなることは予想出来ていたってこと？」

不機嫌さを隠さない叢雲の言葉を受け、龍田は催促の視線を提督に送る。それに、天龍と木曾も続いたところ、提督は僅かな沈黙の後、諦めたようにため息をつく。

「……実のところ、あの手の艦装関連の問題は、大なり小なり起こるものなんだ。知識の実感云々のそれと同じように、どうして禁止されているかというのを身体で覚えていない都合だな」

「これをやったらやばい、という危機感がないからうっかりやらかすのよ。駄目だと言われていたのに、つい火を触って火傷するようなんね」

「あー……頭で理解しているだけだから、反射的に止める、つてのもないわけか」

「そういうこと。で、そのことを叱責されて、当人含め周囲もやったらああなると理解する——と。そういう流れが最初から織り込み済み

なわけ。言ってしまうえば、足柄は貧乏くじを引いたってこと。まあ、だからって同情はしないけど。そも、一般的に起こる場合にしても、それこそ道場の床が壊れるで留まるわけだし」

それをあのバカは……と、今朝に見た怖い笑みの片鱗を見せながら、叢雲が小さく付け加える。下手に藪をつつくべきではないな、と彼女の表情は見なかったことにして、なるほどと龍田は納得の頷きを見せる。

「つまり、あれは艦娘であればどうしても起こりえる事故のようなもの、ってわけね。だからあまり重い処分を下すのはばかられると」「実例が身近にいれば、他も馬鹿な真似をしないようになるしなあ。ある種必要な犠牲か」

別名道化、と天龍が何気にひどい表現を付け加える。しかし、その言葉に誰も笑ったり突っ込んだりすることなく、むしろ深い納得の頷きを示す。

「で、とりあえずの自室謹慎か。他になんかやるのか？」  
「当面は出撃を制限しようかと思っている。陸で雑務の類をやらせる予定だ」

「甘い。もっと厳しくしてもいいでしょ。備品の破壊だけならともかく、今回はアンタの命の危機よ？」

「試合の中での事故、とすると、な。大体、貴官が既に罰を下した節もあるだろう？」

「む……」

提督の突っ込みを受け、叢雲は眉根を寄せつつも、そこで追及の手を止める。周囲が先に怒ると、当事者がいつそ冷静になる、という奴か。

「まあ、戦うのが好きなアイツからしてみれば、海に出られないってだけでもそれなりに罰になるんじゃないやねえか？　ちまちま書類仕事つても苦手そうだし」

「精神的な方は知らないけど、あれで足柄はその辺そつなくこなす方よ」

「普通に優秀な部類だからな、足柄は。だから、酒保の設置周りを任せ



「ようかと思っっているのだが」

「足柄が売店の店員か……っつてか、酒保なんてここにあったのか」

初耳だ、とばかりに木曾が言えば、説明していなかったな、と提督が返す。

「食堂の外に小屋がくつついているだろうか？ あれがそうだ。もつとも、今は中身もあまり入っていないが」

「最近まで閉まっていたって話だものねえ、ここ……あら？」

そこでふと、龍田は数日前の夜のことを思い出す。

「そういえば、隼鷹がお酒を飲んでいたことがあったけれど、あれは残っていた在庫か何かなの？」

「あん？ アイツ、酒盛りなんざしていたのか？」

「ええ、夕食後に食堂で飲んでいたわよ。試し飲み程度だったのか、すぐに切り上げたようだったけど」

「ああ、あれは隼鷹に頼まれて私が用意した新品だ。今回は私が仲介したが、酒保が稼働し始めればそちらで、という風になるだろう。まあもつとも、特殊なものに関しては今後も私が代わりに用意することになるだろうが」

「そんなことまでやるもんなのか、提督ってのは」

「資金管理の都合上、その方が早いからな。私が自分でやった方が、貴官らの給料からの代引きもスムーズであるし」

「給料……？」

はて、と龍田を含めた軽巡組が、揃って首をかしげる。知らぬ言葉、というわけではない。ただ、あまりに馴染みがない言葉だったので、何故この流れでであるのか、と思ってしまうからだ。

しかし、提督と、それに叢雲にとつては、龍田達の反応こそ困惑の対象であったのだろう。二人、特に提督はこちらの姿に眉を上げた後、呆れたように息をはいた。

「……ああ、そこも実感が無いのか。いや、確かに元軍艦からしてみれば、人間の金などそうそう意識もしないだろうが」

「食事とかは最初からスムーズだったんだけどねえ……とりあえずアంతら、それぞれの端末を出しなさい」

言われ、懐から電子端末を取り出す。見た目は、やや大きな携帯電話——正確にはスマートフォンというのだったか——に似ているそれは、少し前に艦娘の装備の一つとして支給されたものだ。艦娘それぞれの専用のものとして調整されており、各自の受けている任務の状況や艤装の状態の確認、提督の持つそれとの通話などの機能がある、言ってしまうえば鎮守府内限定の携帯電話である。なんでも軍独自の規格であるらしく、下手に内部の情報が外に漏れないようにしているらしい。実際、インターネットなども使えるそうだが、これは閲覧専用で、こちらから情報を発信することはできないようになっていたとのことだ。まあ、龍田はまだそこまでこの端末を触っているわけではないので、これらの話は受け取った際の説明のほとんどそのままである。

「じゃあメインから個人情報画面に飛んで、その下から二つ目の項目を選びなさい」

「……どうやるの?」

「もう、じゃあ見せなさい」

素直に渡し、操作を任せる。数秒の後、返された端末の画面には、自身の名前とともに数字がいくつか並んでいた。

「それがアンタの給料、のデフォ。正確にはちよつと違うんだけど、そこに何やかんや足したり引いたりして、各月毎にある程度の額が払われる形になっているわ。実際、天龍と木曾の方は、先月払われた分が表示されているはずよ」

「……ああ、これか。へえ、俺らって給料もらっていたんだ」

知らなかった、と感心したように天龍がつぶやくと、提督と叢雲の二人が同時に天を仰ぐ。

「なんか、ものすごく気が抜ける言葉よね、これ」

「正直、上司としてあまり聞きたくない感じがするな。まあ、衣食住において一切使う機会がないから、そうなるのも分かるは分かるが」  
「食堂のそれも、普段の服も、寮の家賃も、全部タダなものね。この辺、やっぱり私たちがつてずれているわ。いくら見た目が人間でも、後から知識だけ入れただけじゃ駄目か」

「駄目、と言い切るものでもないだろう。少なくとも、普段の生活において支障が出ているわけではないのだから」

「いや、酒保稼働し始めたからお金使うことになるでしょ。ぼっちり影響出るじゃないの」

「ああ……そうだったな」

呆れ調の叢雲の言葉に、疲れを覚えた、とばかりに提督が脱力する。今だろうか、と突然の話についていけなかった龍田が、ややためらいながら口を開く。

「あの、ちよつといいかしら？ さつき、正確にはお給料じゃない、みたいなことを言っていたけれど、結局どっちなの？」

「ああ、それ？ えつと……」

そこで、叢雲が提督の方を見る。その視線に、提督は姿勢を直し、さして間を置くことなく口を開く。

「前提として、艦娘は人間とは違う」

「そりやな」

「故に、艦娘に人権はない。法律上、あるいは軍において、艦娘はあくまで兵器ないし装備の一つという扱いになっている」

「え？ うん、それはそうでしょうね」

一瞬首を傾げ、しかしすぐに同意する。別の生命体である以上、そのまま当てはめられはしない、というのは正しい理屈だ。それはそうだろう、と思えることである以上、さして衝撃を受ける類のものでもない。

「ああ、そつか。給料はあくまで人間相手に支払われるものだから、兵器扱いの俺らに支払われるのは変だな。比喻として道具をねぎらうのはともかく、実際に金をやるのはおかしい」

「うむ、だから実際のところ、貴官らに支払われているそれは、軍の装備に対する維持費のようなものだ」

「維持費」

思わずオウム返しに呟けば、そうだと提督は頷く。

「さつきの今で実感はないだろうが、装備の能力を維持する金を、艦娘の士気を維持するための金として支払っている、とでも思えばいい。

命を張った額として、多いか少ないかは分からんが」

「まあ、あんまり物欲の強い艦娘って多くないから、維持も何もないところはあるんだけどね」

「だから『その『艦娘の会』の活動なんだろうな。実際、雑誌やらを配って趣味を見つけさせるといふのは、艦娘のための人権を定める一歩としては評価できる。軍公認の団体というのも納得だ」

「なんだそれ？」

「簡単に言えば『艦娘に人権を』という目的で活動している団体だ。穏便で真つ当な手段をとっているのもあって、軍でも数少ない提携団体の一つだな。まあもつとも、艦娘の人権を定めるといふのはまだまだ先の話だろうが」

「そうなのか？」

うむ、と提督がまた頷く。

「人権もそうだが、艦娘の存在をどういう形で法律等に盛り込むのか、というのがネックらしい。分かりやすい面で言えば、年齢の問題だな」

「外見年齢は大人、だけど生まれたのはつい昨日です、みたいなことのオンパレードだからね。実働時間だけで言うなら、私たちは全員零歳、最初期からいる艦娘で見るとしても、せいぜい十歳程度。酒を飲むなんて御法度よね」

「そういう風に見た場合、労働基準法や義務教育の問題も引つかかるな。軍の仕事なんぞまともに出来なくなる」

「なんか面倒くさそうだなあ」

「面倒だから、遅々として進んでいないんだ。体型から艦娘ごとに年齢決めて、なんてやったところで、また一年もしたら新しい艦娘が増えていくなんてこともありえる。話を進めるには、艦娘という存在はまだまだ引き出しが多すぎるんだろうさ」

「そういった諸々を回避するために、現状では艦娘は軍の一装備扱いなわけ。分かった？」

なるほど、と全員でそろって頷く。その上で、しかし、と天龍が首をひねる。

「そうなるよ、艦娘に人権を、なんて活動する意味あるのか？ 別に、俺なんかは兵器扱いでもまったく問題ないんだが」

「そりゃそうなんだけど。実際、艦娘側でその辺を気にしているのって少ないみたいだし」

「まあ、見た目も基本思考も同じで、相互理解が十分以上に出来る知的生命体だから、というような難しい理屈もあるが、ないと貴官らが不利を被る部分もあるからな」

「具体的には？」

「いわゆるパワハラやセクハラの種類だな。そういうことをされたとして、人間扱いじゃないと公的に罪を問うことが難しくなる。道具相手に無体を働いたとして、じゃあ何の罪になるのかということだからな。実際、ブラック鎮守府なんて言葉が生まれるくらいには、そういうことが横行した過去もあつたそうさ。道具なら手荒く扱つてもいい、都合よく扱つてもいい、という感じでな。法的にはともかく、倫理的にはアウトもアウトな話だ、まったく」

「ははあ、そういうのもあるのか」

「とはいえ、軍の装備である以上、器物破損やらなんやらを適用できないわけじゃないがな。それに、法的なそれはともかく、軍内部での実質的な扱いとしては、艦娘は普通の人間と同等扱いだ。艦娘相手に良からぬことをすれば、誰であれ真つ当な形でさばかれることになる。少なくとも、今の元帥たち——大本営上層部はそういう方針だ」

だから話を進める意味はあるんだ、と締めた提督に、龍田も改めて深く納得する。形は違うが、これも実感の有無云々の話なのだろう。しかも、これは実感を得てからは遅い部類のものだ。だからこそ、歩みを止めない。それが艦娘のためであり、そして人間のためでもある。そういうものなのだ、と龍田はこれまでの話を解釈し、飲み込んだ。

「なんというか……結構いろいろ面倒なんだなあ。艦娘も、人間も」

しみじみと、天龍が呟く。そういうものだ、と提督が返したところで、アラームが室内に響く。小休止の終わりを告げるそれに、さて、と叢雲が手を叩く。

「それじゃ、各々職務を始めるように」  
「あいよー」

等と、それぞれの返答を投げながら、龍田達は職務を再開するの  
だった。

千歳と提督は、平和な一時にいたはずでした

「——しつかしまあ、よくそんなに飛ばせるよね」  
「え?」

哨戒任務中に発せられた、感心の声。突然のそれに、第一艦隊旗艦の千歳は、水上偵察機の発艦を続けながら振り返る。見れば、随伴としてついて来ている川内型三姉妹、その長女が頭の後ろで手を組みながら言う。

「いやほらさ、私らも水偵は積んでいるけど、二機とかそこらしかないじゃない? それが水母とはいえたった一隻からポンポンと飛んでいくのを見ると、ちよつと驚くなあと」

「それはまあ……そうじゃなきや航空機の母艦なんて名乗れないし。それに、数で言えば加賀さんや隼鷹の方が多いわよ?」

「そりやそうだろうけど。なまじ自分でも使っている装備だと、思わず意識しない? 別にそれで劣等感云々だとかまではつながらないけどさ」

「水母と軽巡で比べるのはナンセンスだもんねえ。あ、でも那珂ちゃんとしては、どんな艦娘であってもアイドルとして負ける気はないよ?」

「あはは、私はアイドルになる気はないかなあ」

相変わらずの『那珂ちゃん節』に、千歳は朗らかに笑う。

「でもまあ、そういうことならちよつと『講義』でもしようかな。神通もそれでいい?」

「哨戒任務中にやることではないでしょうが……まあ、ガス抜きにはいいかと。ただでさえ、姉さんは今溜まっているでしょうし」

そうだよねえ、と振られた川内ではなく、那珂が訳知り顔で頷く。

「二十八号との演習、延期になっちゃったもんね」

「そうそう。他所の艦娘と夜戦出来るの、楽しみにしていたんだけどなあ」

「夜戦をやるなんて話は最初からなかった気もするけどねー」

「いやほら、そうなる可能性もあったわけだし。なんならちよくちよく提督に直談判していたし」

「ああ、そういうええまわりついてたね」

「……姉さん、あまり提督に無理を言っただけじゃないよ？」

「あー、神通。目が怖い、目が怖い」

静かな笑みで迫る神通を川内がどうどうとなだめ、やれやれと那珂がポーズたつぷりに呆れてみせる。そんな姉妹コントに、千歳がからからと笑う。

「まあ、その調子なら貴女たちは大丈夫そうね。他の皆は貴女達ほどそういう傾向は少ないし、存外落ち着いていそう」

「あれで加賀さんとかはがつくりしていそうだけだねー。というか、それこそ今回一番困っているのは提督じゃないかな」

「ああ、皆をなだめる必要があるもんね」

「日程の組みなおしなどがあるからでは？」

川内と神通がそう言うのと、那珂はううんと困り顔をしながら答える。

「それもあるけど、実は提督、今回の演習にかこつけて足柄さんの出撃制限を解除する腹積もりだったみたいなんだよね」

「え、そうなの？」

初耳だ、という表情を、那珂以外の全員が浮かべる。それに、たぶんだけど、と前置きして、彼女は続ける。

「提督的にも足柄さんの扱いには困っていたみたいだし、ちょうどいい理由として利用したかったっぽい」

「出来るの？ 仮にも、足柄さんのやったことは上官への暴行——未遂のようなものだと思うけど」

「ある種の特赦的なものなんじゃないかな。足柄さんみたいな、戦闘好きなタイプじゃないとしつくりこないだろうけど」

「ああ……それを聞くと、逆に納得するかも」

川内の呟きに、千歳含めその場の全員が小さく頷く。確かに、それならば納得できるものがある。どうやら、足柄とはそういう艦娘であ



る、というのがこの場での共通認識であるようだった。

「というか那珂、それどこで聞いたの？ その言いまわし的に、提督から直接聞いたってわけでもなさそうだけど」

「ああ、それは叢雲ちゃんから。そういうつもりなんじゃないかって、秘書艦業務中に聞いたんだ」

「あー……叢雲としても、そこが落としどころだったんでしようね。いの一番に怒った手前、軽々と処理は出来ないでしょうし」

「建前がいるってわけか。面倒だねえ、そういうのは。やっぱり、私は海で戦う方が好きだよ」

うんうんと、川内が深く頷く。彼女のそんな様に、足柄と同類だな、と千歳は思わず苦笑する。もつとも、千歳自身もどちらかと言えば現場の方が好みである——おそらく、この場の全員がそうだろう——ので、目くそ鼻くそ的なそれであるのかもしれないが。

「……って、違う違う。今は千歳のターンだって。ほら、偵察機の話」  
そこでようやく、川内が脱線していた話を元に戻す。それに、そうだったと頷いて、千歳は振られていた説明を始める。

「それじゃ改めて、偵察機——というか航空機についてちよつと説明しましょうか。まず前提として、航空機の操作はオートとマニュアルに分かれているわね？」

「まあ、文字通りの分類だね。前者は指示を出す、後者は操作する、と。私たちは基本前者かな？」

「そういう『仕様』だもんね。頭のリソース——艦娘の処理能力の限界が決まっている以上、最初からそれぞれの艦種に合わせた形で得意不得意を割り振っておくのは当然。つまり、巡洋艦や戦艦は砲雷撃に強くて航空機に弱く、空母や水母はその逆」

「砲撃の軌道や雷撃のタイミングを計算する中、偵察機の制御までやるのは大変ですからね。艦種が上がれば計算能力も増えるそうですが、それでも本職以上に計算を割り振るのは難しいでしょう。航空巡洋艦などであればまた違うのでしょうか」

そうなると、と川内が口元を撫でながら言う。

「空母系列の艦娘は、マニュアルでの処理能力が高いからたくさん飛

「ばせる、ってこと?」

「ちよつと違うかな。マニュアルかオートに限らず、処理能力が高いつて感じ。それで機体や状況を見てオートかマニュアルを自由に選べるの。加えて、航空機側の機能もあるかな」

「というところ?」

「例えば偵察機の場合だけど、皆が偵察機を飛ばす場合、送ってくる情報の取捨選択は自分でやっているわよね?」

「そうだね。向こうから逐次送られてくる情報を自分で見て、重要そうなのを切り取るって感じかな」

「私の場合、それは偵察機側がやってくれるの。この辺はたぶん、空母系列でのみ解放される機能なんだと思う」

この限定機能は、他の艦載機群にも存在する。戦闘機であれば、より複雑な空戦機動を。爆撃機や雷撃機であれば、突入時の位置取りやタイミングを。空母系列が使い、習熟していくことで、そういった機能を向上させられる。

これはおそらくは、そういう仕様なのだろう。妖精側の都合か、艦娘という存在の限界か。その辺りは不明だし、追及する意味も——少なくとも、運用する千歳たちの側には——ない。どうして、ではなく、最初からそういう造りなのだ。

「じゃあ必要な情報だけ送ってくれる感じなんだ。セミオートかな?」

「ああ、いや、そこはちよつと説明を飛ばしちやっただか。正確には、最終的にはそうなる、って感じ。現状だとまだ私からの確認が必要だから」

「ですが何度も飛ばす——つまり『熟練度』を上げていけば、というわけですか」

そういうこと、と千歳は首肯で返す。何か『正常』で何が『異常』か。どれが重要でどれがそうでないか。そういうことを千歳が判断し、偵察機に学習させる。それを繰り返すことで、水上機母艦と水上偵察機は最適化されることになる。それが『熟練度』を上げるということだ。「まあでも、今の時点でそれなりに自動化もできているんだけどね。」

何か変なものがあったら連絡が来るくらいには——つと?」

ちようどよく、と言うべきか。艦載機の一機——通常の哨戒範囲を超え、七号鎮守府が担当する海域の境界線近くまで飛ばしたそれから、何かを発見したという報告が来た。はて、何を見つけたのだろうか、と警戒度を上げつつ確認すると、

「——は?」

返ってきた情報は、千歳の想像を超えるものだった。その『重さ』に思わず茫然とする彼女の肩を、川内が怪訝そうな表情と共に叩く。

「ちよつとちよつと、どうしたの?」

「え、あ——報告!」

それにハツとし、千歳は急いで鎮守府に通信を繋げる。数秒の間を開け、回線が繋がったと同時に、彼女は大きな声で叫ぶ。

「報告します! 鎮守府担当海域の境界線外に、深海棲艦群を発見!

数は——」

「やれやれ、上手くないものだ」

手元の書類を見ながら、防人は思わず嘆息する。二十八号鎮守府との演習が目前に迫ったところで届いた、大本営からの演習中止の命令書。そんなものが届いたのは、近隣の鎮守府の一つである百十五号鎮守府が担当する海域において、とある事態が発生したからだ。

「深海棲艦による中規模の艦隊群が確認された、か」

故に、不測の事態に備えて待機せよ——つまりとところ、演習を延期せよ、という命令が来た。それ自体は真つ当なもののだが、思うところがないわけではない。

「せめて、今でなければな」

日程を決めなおさなければならぬ面倒と、何より艦娘たちを——どちらかと言えば理不尽な形で——落胆させてしまったことに、防人は思わず書類をにらみつける。いっそ、七号鎮守府が直接戦うことになった、となればまだそちらに集中もできたのだろうか、今回は後詰にすらなるかどうか、という状況。どうあがいても前向きな気分になれるものではない。

もう一つ、防人にとっての誤算があった。今回の演習にかこつけて行うつもりだった、足柄に科した出撃制限の解除。それがお流れになつてしまったことである。

仕方のないこととはいえ、足柄のやったことはそれなりに問題のある行為であり、そう易々と処分を緩められるものでもない。防人個人としてはともかく、組織としての建前の話だからだ。

だからこそ、今回の演習の実地において、『今の七号の全力を試す』などということにして、足柄に戦闘を許可する予定だった。かなり雑だが、元の建前が建前故、この程度の主張でも問題ない。そうして、良く言えば全体的に都合よいお年頃を迎える、悪く言えばなあなあにする予定だったのだが……どうにも上手くいかないものだ、と防人はまた息を吐く。

『まあ、こればかりはしょうがないわな。念のためそつちに備えろ、と言われちや素直に従うしかねえ』

防人の落胆を受け、パソコンの画面越しで、一人の青年が肩をすくめる。彼は名を仁科といい、二十八号鎮守府の提督にして、防人にとっては学生時代からの友人である。分かりやすくがつりとした肉付きと、ラフな物言いが特徴である彼は、代々とまではいかないが、政治家を多く輩出した家の生まれであり、転じて度胸に満ちた豪快な人物だ。その堂々とした様と、案外と面倒見の良い性格は、大体の人間に好印象を与え、彼個人の人脈を増やすのに一役を買っているらしい。

とはいえ、仮にも公務中でありながら、常と変わらぬ口調というのは如何なもののだろうか。秘書艦席でパソコンを叩いている電をちらりと見てから、防人は一瞬瞑目し、また嘆息する。

『そんな残念がるなって。向こうの件が片付いたらまたやりやいさ』

「……まあ、そうだな」

今のはそつちじゃない、という言葉を飲み込み——この辺りが、防人が彼に心を許している証左か——その代わりとして、ふと思いついた話題を投げる。

「しかし、百十五号か。あそこも何というか、個人主義的だな」

『確かになあ。いくら突発的とはいえ、普通ならもうちよい早く情報が回ってきそうもんだが』

なんだかなあ、と仁科がぼやく。今回の百十五号の情報と、それに付随した大本営の命令書が届いたのが今朝。そこに書かれた敵戦力と、それを察知したタイミングを見るに、数日前から事態が始まっていた可能性が高い、と防人たちは分析していた。そこから分かる明らかなタイムラグは、二人が百十五号の提督に対し、疑問や不信感を抱くに十分なものだった。

「あからさまに、こちらに対し救援を請う気がないな。自分のところで全部やるという前提で、最低限の道理を通したという感じだ」

『実際、あちらさんは歴戦のそれだからなあ。大本営にしても、完全に念のための命令だろ。警戒だけで準備はしなくていい、つてのがその証拠だ』

「建前はともかく、実際に後詰をさせる気はない、か。まあ、やれと言われても難しい話だが」

『年季が違うしな。そりゃ無理つてもんよ』

『年季か……そういえば、あそここの提督はどういう人物なんだ？』

実家の件と、本人の性質もあり、仁科はいわゆる情報通だ。様々な場所に独自の伝手があり、特に実家由来の人脈がある国関係や軍関係に関して、それこそ学生時代から妙に深いことを良く知っていた。その辺りは、軍人の家系に生まれながらそういうことに疎い——人脈そのものはあるのだが、彼自身にそこを生かす気が薄いのである——防人とは対照的だ。

だから、自分では知りえないことも知っているだろうと問いを投げ

た防人であったのだが、予想に反して仁科は浪面を浮かべる。

『百十五号か……あそこは何というか、噂が回ってこないんだよなあ』  
「お前でもか？」

『まったくないわけじゃないんだが……なんというか、提督個人の話が聞こえてこないんだよ。どういう人物であるとか、戦果に対してどう思っているらしいとか、そういう『色』みたいなのがまったく噂に上がってこねえ』

「話に上るのは結果だけ、というわけか」

『そんなところだな。業績はちよいちよい話に出るんだが、提督その人のことは……って感じた。人づきあいが悪いというか、秘密主義というか、露出するが嫌いなのかね』

「そこに限れば分からなくてもないが……だったら、十三号の方はどうなんだ？」

ついでに、七号鎮守府三つ目のお隣さん——配置としては、海外線沿いに七号の北が十三号、南が二十八号、海洋に出て東が百十五号になる——について問うと、仁科は肩をすくめた。

『あそこか。あそこは分からん』

「また簡潔だな」

『十三号は百十五号以上に話が来ないんだよ。この間、お前のところで戦闘があつたらう？ 水雷で空母機動落としたやつ。あれって軍内部でも微妙に噂になっているんだが』

「あれが、か？」

思わず、眉をひそめて問い返すと、仁科は何故か少しだけ誇らしげな風で頷く。

『そう、当事者からしたらちよつとしたことでも、案外噂話ってのは回ってくるもんなんだ。特に、新人の活躍ってなれば、将来有望ってことで話になる。まあ、出る杭云々、って場合もあるが……今はいいやな。それこそ、百十五号の提督だつて、配属当初のころは話題に上っていたらしい』

「それなのに、まったく噂がないと」

『俺らから見てあそこは一年くらい先輩なんだが、その間に目立った

戦果がないんだよなあ。なんなら失態すらも聞こえてこない。いやまあ、あそここの担当海域は俺たちのそれを同じで基本的には穏やかな部類だそうだから、戦果も失態もあつたもんじゃないってならそうなんだろうが』

「それにしても……と言えなくもないということか。現状維持に腐心しているといくのが無難な答えか？」

『どうなのかね。それにしても、つて気はするが』

ふうむ、と防人は顎を撫でる。どうにも、七号鎮守府のご近所さんは総じて癖のある様子であるらしい。無条件に信じられるのは二十八号だけか、と今後の動き方を考えようとしたところで、突如として鳴り響いた通知音が彼の思考を邪魔する。警戒任務に出撃中の、第一艦隊からの通信であつた。

「む、仁科、少し待っていてくれ」

『あいよ』

断りを入れ、通信を仁科から第一艦隊旗艦の千歳に切り替える。

「私だ、どうした？」

『報告します！ 鎮守府担当海域の境界線外に、深海棲艦群を発見！

数は三十、大型艦を複数含む、大艦隊です!!』

「——なんだと!?!」

突然の千歳の報告。それに、防人は思わず立ち上がりながら、驚愕の声を上げたのであつた